

いしかり 曆

- 哀惜 石狩市郷土研究会顧問山口福司氏の功績を讀んで…村山 耀一… 1
村山家文書解説
- 明治八年村山家が石狩漁場を井尻家に託した際の関係文書…村山 耀一… 3
- 石狩川沿いのアイヌ地名(3) -志美・ピラカヤウシ…井口 利夫…16
- 石狩尚古社所蔵俳句の紹介7 石狩尚古社選者 西尾其桃の遺墨…中島 勝久…24
- 寒塩引に関する文献…工藤 義衛…25
- 石狩衆の漁場作業衣など考察して ~石狩三地区の人々~…吉岡 玉吉…36
- 石狩市八幡町の古老が語る二つの空襲体験…三島 照子…46
- 弁財船入港でにぎわう明治の厚田の情景を新設道の駅に
ジオラマ模型制作の構想…石黒 隆一…51
- 撮影紀行「河口の町・石狩」…坂東 忠明…61
- 石狩市郷土研究会活動の記録(平成16年度~平成27年度)…村山 耀一…70

第 30 号

2017. 3

石 狩 市 郷 土 研 究 会

哀惜 石狩市郷土研究会顧問山口福司氏の功績を讃えて



山口福司氏

生年月日 大正十年（一九二一）二月一四日
 出生地 長野県上水内郡鬼無里（きなき）村
 没年月日 平成二八年（二〇一六）一月五日 享年九五
 戒名 仁秀院明德福昌居士

哀惜のことば

石狩市郷土研究会会長 村山耀一

山口福司氏は、元和乙卯年（一六一五）から鬼無里に居住し松代藩主から帯刀を許されて御林山見役や組頭などを世襲した山口家の二代父山口武司郎と母よいなの二男として出生。長じて大東亜戦争開戦と共に衛生部員として奉天陸軍病院・鉄嶺陸軍病院・戦地と三年半、シベリヤ抑留三年半（陸軍衛生軍曹）後、昭和二三年五月に引き揚げました。

上司のすゝめもあり、同年秋季来道し一〇月一日付けで道立江差病院放射線科に採用され、同三一年道立紋別病院に転勤され二三年間の勤務を経て同五四年札幌恵北病院・平成二年円山整形外科病院、同三年創

成えんどう病院と実役五〇年余勤められました。この間、道放射線技師会の理事、監事などを歴任されています。また、数多くの論文を発表し、学会技術賞、道知事表彰のほか総理大臣賞はじめ日本放射線技師会長表彰など、この道ひと筋の功労によって、平成一〇年秋の叙勲で勲五等瑞宝章を受章されました。

山口福司氏は本業のかたわら文化活動・地方史研究に意を注がれていましたが、昭和五四年一二月石狩町の花畔団地に居住されたのを契機に、石狩町郷土研究会に入会し、同五八年八月から平成三年三月までの八年七カ月間、会長を務め、八年から没年まで顧問として執筆や例会発表、『石狩の碑 第一輯・第二輯』『石狩の空襲を語りつぐ』の発行や会誌『いしかり暦』の継続発行及び活動資金の寄附など、会の発展振興に貢献されました。また、石狩市文化財保護審議会、会長（一三カ年）、市文化協会会長（二三カ年）、なども務められ、平成一〇年に石狩市表彰・石狩市教育文化功労賞を受けておられます。

「執筆内容」

『いしかり暦』への執筆

- ・ 昭和五九年二月 第4号 「あいさつ」（会長就任のことば）
 - ・ 昭和六〇年三月 第5号 「郷土資料館の早期実現を」
 - ・ 昭和六一年三月 第6号 「石狩町の石碑調査について」
 - ・ 平成元年三月 第8号 「（長谷川嗣氏）追悼号発刊によせて」
 - ・ 平成一六年三月 第17号 「いしかり郷土シリーズ2 『石狩の碑』第一輯 石碑等にもみる石狩町の歩み」
- 「二代目会長を引きうけて」

「いしかり郷土シリーズ」1〜3への執筆

- ・ 昭和六二年二月 『石狩の空襲を語りつぐ』 「発刊によせて」
- ・ 昭和六二年二月 『石狩の碑』 第一輯 「発刊によせて」
- ・ 昭和六三年三月 『石狩の碑』 第二輯 「発刊によせて」

〔執筆内容〕

- ・平成五年 三月二十八日 「石狩町郷土資料館構想提言書について」
- ・平成五年 二月二十六日 「神道について」
- ・平成八年 二月二十九日 「医療の昨今、生活習慣病・医療之実態等」
- ・平成九年 十月十六日 「アイヌの戸籍・地名等について」
- ・平成一〇年 五月二二日 「歴史最近の話題」
- ・平成一一年 三月二十八日 「叙勲制度について」
- ・平成一一年 五月二〇日 「建国二千六百年奉祝記念式のテープによせて」
- ・平成一二年 八月二十九日 「大東亜戦争開戦の詔書・終戦の詔書」
- ・平成一二年 一月十六日 「姉妹都市彭州市訪問に参加して」
- ・平成一二年 二月二二日 「彭州市訪問のスライド」
- ・平成一四年 一月二二日 「百印百詩」
- ・平成一五年 二月二〇日 「百印百詩」
- ・平成一七年 三月二七日 「中央アジアシルクロード」ウズベキスタン
- ・平成一七年 一月二七日 「中国における死刑因からの臓器移植」
- ・平成一八年 十月一九日 「本庄陸男について」
- ・平成一九年 二月二五日 「病気に罹らないで長生きをする知恵」
- ・平成一九年 八月二三日 「昭和中期を検証する」
- ・平成一〇年 二月二八日 「終戦から講話条約まで」
- ・平成一一年 八月二〇日 「北海道庁の今昔と道職員勤務時代の話」
- ・平成一二年 八月一九日 「シベリア抑留のすべて」2年7ヶ月の抑留体験から
- ・平成一三年 八月二七日 「皇居・天皇に関する資料の提示と解説」
- ・平成一三年 八月二七日 「福島原発に学ぶ」
- ・平成一四年 八月二六日 「健康寿命を伸ばす知恵」
- ・平成一五年 八月二六日 「シベリア抑留の意味とその実態」
- ・平成一六年 八月二二日 「靖国神社の成りたちと歴史・A級戦犯について」



「ドッピ」というウズベク族の帽子をかぶり

お話しされる山口福司さん

平成17年3月17日（木）例会にて

明治八年村山家が石狩漁場を井尻家に託した際の関係文書

村山 耀一

(一) 賣渡證書之事

賣渡證書之事

石狩郡西濱漁場壹ヶ所
 同川通字貞寧鮭漁場式ヶ所
 但シ 諸道具別冊之通相添
 一 同川通字貞寧鮭漁場式ヶ所
 但シ 諸道具別冊之通相添
 代金七千五百円也
 右者今般双方熟談之上別紙為
 取替約定書之通取究貴殿方江賣
 渡前書之金高正二相受取候處
 相違無御座然上者萬々一縁方ヨリ
 違乱ケ間鋪義申出候共連印者罷
 出急度埒明貴殿江御迷惑毛頭
 相掛申間鋪依之為後日親類
 連印賣渡證書仍而如件

明治八年四月七日

賣渡證書之事

- 一 石狩国石狩郡西濱漁場壹ヶ所
- 但シ 諸道具別冊之通相添
- 一 同川通字貞寧鮭漁場式ヶ所
- 但シ 諸道具別冊之通相添
- 代金七千五百円也
- 右者今般双方熟談之上別紙為
- 取替約定書之通取究貴殿方江賣
- 渡前書之金高正二相受取候處
- 相違無御座然上者萬々一縁方ヨリ
- 違乱ケ間鋪義申出候共連印者罷
- 出急度埒明貴殿江御迷惑毛頭
- 相掛申間鋪依之為後日親類
- 連印賣渡證書仍而如件

明治八年四月七日

(二) 約定證書之事 (村山家から井尻家へ)

林 麒一郎殿

賣主
村山傳治郎
親類
村山利兵衛
日
中嶋幸左衛門

林 麒一郎 殿

賣主
村山傳治郎 (傳治郎の傳次郎のこと)
親類
村山利兵衛
同
中嶋幸左衛門

約定證書之事

一、般別紙證書之通石狩鮭
漁場西濱並二貞寧共都合三ヶ所
讓渡則代金七千五百円相受取
當亥年ヨリ向巳年迄七ヶ年間
悉皆御任申上置右期限リ至リ
前行代金七千五百円為相濟候
上者前行漁場不殘御返却
可被成下候定

約定證書之事

一 今般別紙證書之通石狩鮭
漁場西濱并二貞寧共都合三ヶ所
讓渡則代金七千五百円相受取
當亥年ヨリ向巳年迄七ヶ年間
悉皆御任申上置右期限リ至リ
前行代金七千五百円為相濟候
上者前行漁場不殘御返却
可被成下候定

一七ヶ年中漁場支配方之儀者
 一切私引傳精々尽力仕私始
 召使之者二至り迄不都合之儀無之
 様相勤可申候然(就)而者年々鮭取
 揚高より御税並二九一其外共引去
 全手取高ヲ以當所立直段代金
 高より八分通支配料として可被下之定
 尤右之内ヨリ年分暮方入用丈相
 受取過金之儀者貴殿方江御預ケ
 置積金可備置事
 一年々漁場入用品者貴殿方江御
 仕込可被下候尤當方二於テ買入之品者
 支配出張之人より見留ヲ可請事
 一三ヶ條

右之通約定取究候儀実正也
 然上者前ヶ条堅相守可申候
 萬二一不晴之儀等有之候節者八
 分之通支配料不相受取儀者
 勿論如何様之御沙汰二預り候

共一言之儀申間鋪候依之為後日
為取替約定書仍而如件
明治八年
村山傳治郎

明治八年
四月七日
奉公人惣代
加藤圓八

漁方支配人
赤石與市

親類
中嶋幸左衛門

林麒一郎殿
井尻半左衛門殿

共一言之儀申間鋪候依之為後日
為取替約定書仍而如件

本人
村山傳治郎

明治八年
奉公人惣代

四月七日
加藤圓八

漁方支配人

赤石與市

親類

中嶋幸左衛門

林麒一郎殿

井尻半左衛門殿

北海道博物館収蔵村山家文書「賣渡證書之事」
整理番号 224・索引番号 0467・
収蔵番号 100652

三 明治八年第三月
石狩郡鮭漁場西濱大網并貞寧附屬品々調子書

明治八年
三月

石狩郡鮭漁場
西濱大網并調子書
貞寧附屬品々

石狩郡
井尻半左衛門

明治八年
三月
石狩郡鮭漁場
西濱大網并調子書
貞寧附屬品々

石狩郡
井尻半左衛門 ㊦

西濱大網附屬品々
左之通り

西濱大網附屬品々
左之通り三拾五

一 鮭網 壹反半 三拾五間切
三拾六枚

一 鮭網 拾五尋半 三拾五間切
拾六枚
但 戊年 新規大網附

但 貳反 取合
戊年 新規大網附

一 同袋 拾五尋半 三拾五間切

一 同袋 九反九尋半 三つ

但 拾五尋半 新規
拾六枚
但 戊年 新規

但 內 貳つ 戊年 新規
壹つ 古大網附

三拾五間切

一 鮭網 拾五尋半 三拾五間切
拾六枚
但 拾五尋半 新規
拾六枚
但 戊年 新規
拾六枚

一 鮭網 壹反半 貳拾四枚

但 內 貳反 取合
貳十壹枚
申酉 貳ヶ年入
三枚 戊年 新規小網附

★以後、原文を省略

一	平釜	壹枚
一	大鍋	三枚
一	飯木鉢	十一枚
一	目籠	壹つ
一	丸筥	四枚
一	塩通	貳枚
一	米搗臼	三つ
一	同木根	貳本
一	尺立	三十間
一	高張	八張
一	提灯	貳張
一	弓張	壹張
一	建物	
一	鮭切藏	壹ヶ所
一	筋子小屋	但 四間 二 十八間 壹ヶ所
一	賄小屋	但 第四間 二 八間 壹ヶ所
一	細工小屋	但 第四間 二 六間 壹ヶ所
一	居小屋	但 同 断 壹ヶ所
一	網藏	但 第五間 二 三十三間 壹ヶ所
一		但 三間 二 四間

一	袋布網	但 五十目漉 百五拾間 戊年仕入残り品 當亥年仕入ニ相迫候分
一	鮭袋	但 四反合 六つ 四尋半 戊年入 四つ 酉年入 貳つ
一	出入網	但 古物也 拾壹本
一	同	但 同 断 壹流 百五十間切
一	同	但 同 断 貳流 五六十間切
一	鮭網	但 貳反合 貳流 百九十間切 戊年 新規阿羽足棚附
一	左之通り	貞寧漁場付属品
一	大網附属品	メ

一	目籠	六枚	
一	ハシゴ	貳丁	
一	タゴ	一丁	
一	米搗臼	五つ	
一	大釜	三枚	
一	飯臺	八枚	
一	飯鉢	三つ	
一	焼印	三丁	
一	細工道具	老通り	
一	古筵	十五束	
一	天王寺鋸	三枚	
一	腰間切	八枚	
一	鯖左し	貳十枚	
一	大鍋	三枚	
一	飯釜	貳枚	
一	鎌	八枚	
一	唐鋏	四丁	
一	飛口	五丁	
一	鐮	三十三丁	
一	皿	三十五	
一	茶碗	三十五	
一	地轆轤	三胴	
一	川般	四艘	
一	持荷船	三艘	
	但 道具附		
	但 キヨリ芋也		
	但 右同断		
		七拾把	

一	丸箆	六枚	
一	塩通シ	貳枚	
一	高張	五張	
一	籠提灯	三張	
一	新鐮	五十丁	
一	斧	三丁	
一	染芋	拾老貫目	
一	柿	但 キヨリ芋用	
一	但 洪	三挺	
	但 右四口戌年残り品		
	但 當亥年仕入ニ相迫り候分		
一	鮭切藏	但 四間 二十貳間	老ケ所
一	塩藏	但 三間 二五間	老ケ所
一	網藏	但 三間 二四間	老ケ所
一	米藏	但 四間 二四間	老ケ所
一	筋子小屋	但 第四間 二八間	老ケ所
一	テツキ小屋	但 第四間 二十貳間	老ケ所
一	居小屋	但 第六間 二貳十五間	老ケ所
	建物		

貞寧両所付属品
右之通漁場附属品々
如此ニ御坐候也

石狩郡辨天町番外地
井尻半右衛門

北海道博物館所蔵村山家文書「石狩郡鮭漁場西濱大綱并貞寧附属品々調子書」整理番号223・索引番号0346・
収蔵番号100396

【解説】

この度は、北海道博物館に所蔵されている村山家文書の中から明治八年の村山家と井尻家に関わる文書を取り上げました。

「賣渡證書之事」は村山家が幕末の石狩改革や榎本脱走軍へ納めた上納金が榎本軍の降伏により不意になり負債を抱え、その経営は行き詰っていたとき井尻家との出会いがあり、漁場経営を託した際の史料で標題の「賣渡證書之事」をはじめ一連の文書からなっています。標題となつている「賣渡證書之事」は石狩場所を任されていた村山伝次郎が明治八年四月七日に井尻家（初代半左衛門）代理の林麒一郎宛てに石狩の西濱、貞寧など三漁場を金七千五百円で預けて経営を任せる約束をした賣渡証書です。文書には、各漁場の諸道具を別冊にして添えられたことが分かります。

二の文書「約定證書之事」は「賣渡證書之事」に含まれている文書で、売り渡しの条件が整った後に村山家から井尻家に四月十日に渡された證書です。

この文書には「賣渡證書之事」にかかわって三点の約束が示されて

います。

一つ目は売渡證書に記されている石狩鮭漁場三か所を明治八年亥年より同十四年巳年まで金七千五百円で井尻家に譲り渡すと言うこと。ただし、この代金が返済できた時には漁場は残らず返却してもらうこと。

二つ目は、井尻家に経営を託している七年間に漁場の仕事に関して不都合のないように、使用人も含め村山家で尽力する。但し、鮭取り場高より税金や九一金（漁獲配分の割合）などを差し引いた残りの八分は場所支配料として村山家の方に納めていただくこと。

三つ目は漁場の入用品位は、漁場に向いた支配人に相談し、買入れてほしいという内容です。さらに万が一に三ヶ条の約束が守られない時には支配料は勿論、どんなさばきも受けること。今後のためにこの約定書を渡すとしています。

三の文書「調子書」は前述の「賣渡證書之事」に記しているように村山家が井尻半左衛門に預けた石狩の西濱大綱と貞寧漁場の鮭網や道具類等の附属品や鮭切蔵などの建物の目録です。明治四年三月にまとめられたもので、当時の漁場の規模を詳細に推察することが読み取れるものです。

明治期石狩郡鮭網取獲高等統計表

年次	漁獲高 (尾数)	年次	漁獲高 (尾数)	年次	漁獲高 (尾数)
明治一年	一、二二五〇〇〇	明治二年	九五五〇〇〇	明治三年	七二五〇〇〇
二年	九二〇〇〇〇	三年	一、九四五〇〇〇	四年	五六一〇〇〇
三年	〇二〇〇〇〇	四年	一、一六〇〇〇〇	五年	四七〇〇〇〇
四年	〇〇〇〇〇〇	五年	八六五〇〇〇	六年	四六〇〇〇〇
五年	一、四五五〇〇〇	六年	一、四八〇〇〇〇	七年	四四〇〇〇〇
六年	一、〇三〇〇〇〇	七年	一、〇〇〇〇〇〇	八年	四四〇〇〇〇
七年	九〇〇〇〇〇	八年	一、〇〇〇〇〇〇	九年	四七〇〇〇〇
八年	六三三〇〇〇	九年	五八二〇〇〇	十年	一七〇〇〇〇
九年	九一〇〇〇〇	十年	七九八〇〇〇		
十年	八六五〇〇〇		七九八〇〇〇		
	七五〇〇〇〇		六四五〇〇〇		

(石狩漁業史から)

村山家が井尻家に預けた漁場が全て戻ったのは二代目静蔵になってからの明治十七年と言われています。この間、右資料に見るように、井尻家に石狩漁場を預かった明治八年から明治一六年の間の鮭鱒漁獲量は豊漁の時期も続き井尻家は誠意をもって事にあたり、村山家との間は親戚づきあいの仲であったと言われています。このように井尻家は村山家の再興を陰に日なたに支えたこともあって、昔日の繁栄には及ばないものの、明治三〇年代には石狩郡漁業家中その首位を占める富豪と目されるようになっていきます。

一、村山家の概要（渡道から幕末まで）

村山家は初代伝兵衛が元禄十三年（一七〇〇）に能登国安部屋村（現石川県羽咋郡志賀町安部屋）から渡海し松前に籍を設けて廻船業を営み、阿部屋を号し、店印を[㊦]（まるじゅこ）とし、村山家の基礎を築きました。

宝永三年（一七〇〇）には、宗谷、留萌、のほか石狩などの場所請負を家業とした。伝兵衛はアイヌに新しい漁法を教え漁獲を増すなど場所経営に優れた手腕を発揮した。

三代目伝兵衛の時には松前藩との結びつきも強くなっていき、一方では問屋株も取得し、松前の問屋仲間の一人となり自然に富を蓄えた。

安永二年（一七七三）以降何度か松前藩のカラフト場所漁場の調査に協力し苗字帯刀を許されている。また寛政元年（一七八九）のクナシリ・メナシの戦い後、救援物資の輸送に協力し、寛政四年（一七九二）のロシア初の遣日使節ラクスマンが根室への来航の際には滞在費用の負担など、松前藩への功績は大きかった。伝兵衛は最盛期には持ち船一〇二隻に及び、松前に入港する船の三分の二をしめていた。経営した漁場も石狩場所をはじめ、宗谷、留萌、斜里、根室、三石など蝦夷地一円のほか、樺太や国後を含め三五場所に及び、一年間の儲けは六万両ともいわれ、日本長者番付に名を残すまでになった。

文化二二年（一八〇六）年、六代目傳兵衛直之の時、石狩十三場所すべてを請負うことになり、それを祝って石狩弁天社を再興させた。石狩十三場所は村山家により安政四年（一八五七）まで続いた。

ところが、幕末になり外国がわが国に開国を求める動きが活発になりついに幕府は安政元年（一八五四）日米和親条約を締結し、下田と箱館を開港した。ロシアの蝦夷地への南下を恐れた幕府は翌二年蝦夷地を幕府直領とした。蝦夷地の警備を箱館奉行だけでは難しいと考えた幕府は本府を石狩地域に設ける方向で考えていたようである。

安政四年（一八五七）、幕府は箱館奉行石狩調査役並の荒井金助を石狩役所に赴任させ、翌安政五年「石狩改革」を実施した。この改革により石狩十三場所を請負っていた村山家に対し場所請負人を罷免し、西濱、貞寧などの幾つかの漁場持ちの出稼漁業者扱いとされ縮小された。

（注）全道での場所請負制の廃止は、開拓使が設置された明治二年である）

石狩改革後村山家は、不漁続きのうえ、経営の本拠であった運上屋（元小屋）が本陣に指定され、通行人数の取扱いを命じられたため多額の経費を支出し次第に家産を傾けていった。

慶応四年（一八六八）の王政復古の号令の際には、村山家が請負いを復活し家を再興させる好機ととらえ、村山家漁業部を任ざられていた村山伝次郎は、同年五月に箱館裁判所が開かれると、請負の復活を求め何度となく請願を繰り返していたが、聞き入れられなかった。ところが十月に榎本脱走軍が鶴の木に上陸し五稜郭を占領したのである。戦乱が一段落した十一月になると、脱走軍は軍資金の必要性もあり石狩場所などの請負人を公募することになった。

村山伝次郎は不安定な脱走軍に不安を感じながらも、石狩場所が他の商人の手に落ちるのを恐れ、十二月に契約を結んだのである。脱走軍からは運上金として二、五〇〇両の即納を求められたが、前納金として五〇〇両を借金しての契約であった。しかし、翌明治二年五月の

榎本脱走軍の降伏により水泡に帰したのである。

六月には石狩場所の本陣取扱いを免じられ、漁場をはじめ蔵々まで封印されてしまった。そのうえ伝次郎は、心労から病氣療養中であつたが、入牢を申し付けられたのである。身体の心配もあり親族や請負人仲間から恩赦を求める歎願も幾度も出されていたが、八月二三日に箱館府の御白洲で「手鎖」の判決が下り刑は比較的軽く、九月二一日には許され、まもなく漁場や蔵々の封印も解かれたのである。

二、村山家復興にむけて井尻家との関わり

村山家は先の石狩改革の影響や脱走軍へ上納した五〇〇両の借金が残り、石狩本陣の取り扱いも復旧しなかつたうえ、その後の諸改革で小樽、高島、厚田に持つていた出稼ぎ漁場は、政府に引上げられたり、入札にかけられたりしました。多数の奉公人を抱えていたため、経営から手を引くことができず、漁場入札のためさらに借金を重ねたため経営を立て直すのに苦しみが続いていました。

村山家の経営苦心に対し援助の手を貸したのが、鹿児島出身の井尻半左衛門であつた。半左衛門のひ孫にあたる井尻正二氏編の『わが家の歴史』（一九八二年発行）の中にある筆者の曾祖母にあたる村山コトの口述を読むと、石狩場所経営を任せられている村山伝次郎（コトの父）は従弟の村山源助（井尻半左衛門の新潟での船の船長）の橋渡しで、井尻家に整理を頼むことになつたと言っている。

村山コトの口述の一部を抜粋すると

〔前略〕 村山伝次郎は、従弟村山源助（井尻半左衛門の、新潟での船の船長）の橋渡しで、井尻家に家の整理を頼むことになりました。その間、伝次郎、曾乃（その）、こと、もとの四人は、小樽の漁場の留守番をしておりました。三年が過ぎましたが、整理が不十分で、後七年をまかせるうちに、村山家の漁場、川の貞寧二カ所、海の大網、川尻と

もに大漁続きで、十七年には井尻家に預けた漁場は全部返り、そのうえ養生芝（やうしば）と聚富の二カ所の漁場を買いました。（後略）

これによると、伝次郎の従弟にあたる村山源助が新潟で井尻半左衛門の持ち船の船長であつたことにより、井尻家との出会いがあつたことが読み取れる。井尻家の村山家への整理は、文書「賣渡證書之事」に記されているように明治八年に交わされ証書で分かるが、村山コトの口術によると、その三年前から何かしらの支援を井尻家から受けていたことが分かる。しかし、本格的には「賣渡證書之事」の文書どおり明治八年に約定証を取り交わし、向う七年間の約束で石狩に持つ西濱、貞寧などの漁場の経営を井尻家に預けたことになる。

三、井尻家とは

井尻家の墓が石狩市親船町の能量寺（浄土真宗）の境内にある。

明治四十三年九月に建立されている墓碑の裏面に

「井尻半左衛門者鹿児島之人夙以商業従村田経通林実友転任長崎大阪新潟東京之諸店能幹其事以明治七年臻北海道專管漁獵之事勤苦有成

十五年二月四日以病疫於石狩之店享年五十九葬邑之能量寺私諡日守道立信居士」と刻まれている。

初代の半左衛門は、鹿児島の人、林徳左衛門の方で商業に従事して、村田経通、林実友方を転任し、長崎、大阪、新潟の諸店を發展さ



能量寺境内に建つ井尻家の墓碑

せ明治五年（一八七二）の頃は、函館で昆布を買入れ、上海に輸出していた。

明治七年、北海道に渡り、小樽色内町で鯨漁業を経営していた。その頃から村山家の復興に力を貸していたが、同八年（一八七五）これを引受け自ら経営にあたった。半左衛門は、当時で数万の負債を抱えていた村山家のため、一方ならぬ尽力を尽くしたのである。

同十一年（一八七八）六月二十四日、石狩町横町北三十番地に転籍した。半左衛門は明治一五年二月石狩で没した。享年五九歳

二代目井尻静蔵は、安政三年（一八五六）鹿兒島県に生まれ、宇野甚助と称していたが、静蔵と改め半左衛門の養子として入籍した。明治八年石狩に来て養父の漁業を助けた。養父の没後、村山伝次郎から引き受けた家事の整理にも尽力した。村山家の漁場を引受けた翌年から鮭の大漁は続いた。静蔵は厚田の鯨漁場など約二〇場所を経営し収益をあげ、石狩、厚田両郡の雄となった。また、小樽で倉庫業をはじめて開いた。

村山家から預かった漁場（貞寧、大網、川尻）は明治一七年に返却された。尚、妻は当別の伊達家（邦直）の次女加寿子である。明治三五年一月東京で病没した。享年四六歳

三代目、井尻静蔵は明治一三年（一八八〇）一月一四日、石狩町横町で生まれで幼名を新一と称した。地元小学校から庁立札幌第一中学校に進んだ。父の死後、石狩本店と小樽支店を往復し父の業を引継ぐと共に、小樽で郵便局長も務めていたが、石狩の漁業不振や政治運動資金の出費増大で財を失い、大正四年小樽に移った。その後、小樽区会議員や消防組頭となり大きな貢献をした。道議会員も務め、公共事業や北海中学校の設置運営等、教育振興に力を尽くした。

石狩時代は碁と俳句に親しみ尚古社の社員として俳号を淇水と称した。昭和七年五月一六日に没した。享年五三歳
尚、次男正二は古生物学者、科学作家の井尻正二氏。

謝辞

文書の解説にあたっては北海道博物館学芸員の三浦泰之氏に詳しくご指導とご協力を頂きましたことに心から厚く御礼申し上げます。

【参考資料】

井尻正二編 一九八二 『わが家の歴史』 私家版

井尻正二 一九八八 『石狩湾』 築地書館

石狩町 一九八五 『石狩町誌』 中巻一

石狩市郷土研究会 一九八七 『石狩の碑』 第一輯

幸前伸編著 一九八四 『開拓の神々』 北海道神宮社務所

【関連資料】

初代 井尻半左衛門



二代目 井尻静蔵



三代目 井尻静蔵



倉庫の店印が残る旧井尻家倉庫
(小樽市色内町)



旧井尻家倉庫群
(小樽市色内町)

石狩川沿いのアイヌ地名(3) —志美・ピラカヤウシ—

井口 利夫

はじめに

石狩川沿いのアイヌ地名について、これまで花畔、マクンベツと探り上げてきました。いずれもアイヌ地名由来の地名ですが、アイヌの人々が名付けた場所からは大分動いてしまっているらしいことを紹介しました。今回採り上げた志美も、やはりかつてのアイヌ地名の付いていた土地からは大分動いてしまっているようです。元の地名の位置は何処なのか、何故動いてしまったのか、などを考えてみました。

1. 志美の由来はアイヌ地名のシビシプシ

志美の元になったアイヌ地名は『石狩町誌 上』(以下、石狩町誌)には

志美……シビシビウス(トクサの多い処)(永田方正)

と書かれています。ここに(永田方正)とは、永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(以下「永田地名解」)の意味でしょう。永田地名解の原文をみると、

Shipishipi ushi シピシピ ウシ 木賊(トクサ)多キ處

と書かれています。

永田方正のアイヌ語の表記は現在の用法とはやや異なるところがありますので少し補足をおきます。

トクサのアイヌ語表記は『旭川アイヌ語辞典』によれば「apsap」(山田秀三流に書けば shipship)「シビシピ」で、pの後は母音がありません。従って、永田方正の「シビシピウシ」は山田秀三流に書けば「shipship-ushi」で、現在の表記法では「シビシビウシ」または「シビシプシ」になると思われます。(注1)

注1 shipshipに ushiが付くと、shipshipの末尾のpと ushiのuが合わさっ

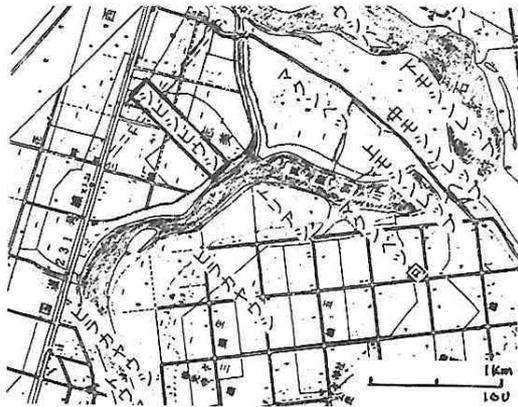


図2. 石狩のアイヌ地名

(石狩町誌(上)挿絵を一部改変)

前報で既述のように、本誌で示されたアイヌ地名の位置は、幕末期以降の和人の活動によりかなり動いた後の状況を示している。



図1. 現在の地形

(現行地形図を一部改変)

図にある「真敷別川」は旧石狩川の一部で、旧石狩川は本図の左から右へ流れていた。

現在の「志美」は旧石狩川の左岸(北岸)にあたる。

てロロと発音され(連声「リエゾン」)、シビシプシと発音されることが多いようです。

なお志美の元になったアイヌ地名は文献により表記が様々です。アイヌ語表記としては、上記のようにシビシプシが妥当と思われるので、以下では文献から引用する場合を除き「シビシプシ」を使います。

また、後出のように伊能間宮図の「シブシウシ」を除き、明治初年までの古い記録に残されている地名には「……ウシ」の形のもの無く、すべて「……ビシ」の形になっていること、漁場割図(後出図7)と永田地名解など後年の記録が「……ウシ」の形になっている(連声「リエゾン」が起(こ)っていない)ことが注目されます。

シビシプシの故地は左岸か右岸か

「志美」という地名は、現在は旧石狩川の北岸(左岸)一帯の地名です(図1)。「石狩町誌」でもその地名の元となったと思われるアイヌ地名シビシウシ(「シビシプシ」を北岸側(左岸)の地名としています(図2))。

しかし、このアイヌ地名「シビシプシ」の元々の位置については、石狩川左岸の地名だったとは言い切れないようです。

たとえば、先に紹介した永田地名解では、石狩川右岸の地名としています。

永田地名解は明治二十年代に調査した記録ですが、それ以前の史料でも文化十年代(一八一三)に間宮林蔵の測量した伊能間宮図(図3)でも「シブシウシ」は右岸の地名になっています。そのほか、以下で紹介するように、この地名を右岸とする史料は少なくありません(ただし遡上の際の記録では左右の表記が逆になります)。

- 文化十年代 (間宮図) シブシウシ (右岸)
- 天保期 (蝦夷行程記) シビ、シ 左(右岸) 夷家有。
- 弘化三年(一八四五)(再航) シビシヒシ 東河岸(右岸) 二夷人 小屋耆軒有。



図4. 「石狩川漁場」
(安政期)

安政2年(1855)以降、蝦夷地が再び幕府直轄となり「在住」も入植した。伊能間宮図の「シブシウシ」のあたりに「シビ、シ 土人持」とあり、漁場名として使われているのがわかる。

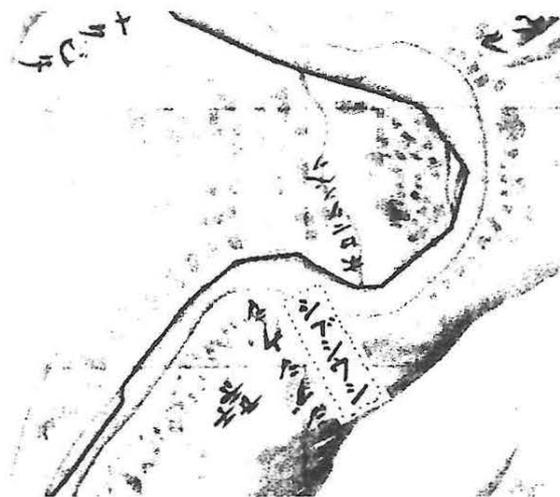


図3. 「伊能間宮図」
(文化10年代)

伊能忠敬の依頼により間宮林蔵が文化10年代(1813~)に測量した。大図は3万6千分1の大縮尺で、地名の位置も正確にわかる。石狩川の南岸(右岸)に「シブシウシ」と書かれているのがわかる。

安政四(一八五七)(観國録) シビシビシ 左岸(注には右岸とある)
 皆前二て漁獵をする。
 夷一戸、漁場アル。

安政年間(川々取調帳) シビシビシ(右岸)

幕末(石狩川漁場) シビ、シ(右岸)「土人持」

明治六年(一八七三)(西部図) シビ、シ(右岸)朱点2つ。

(※この図の朱点はアイヌ家を指す)

このように地名の表記に少し違いはありますが間宮林蔵が石狩川沿岸を測量した文化十年代以降、明治初年までの記録では、一貫して右岸の地名で、いずれもアイヌの網引場だったようです。

3. シビシプシが左岸の地名になったのは何故か

花畔の項で既に詳述しましたが、石狩のアイヌ地名の位置が動き始めたのは幕末期からだったようで、その原因は幕末期以降の漁場の拡大などがあった時に、新しい漁場の名前として古い漁場名を流用したことによるようです。更に明治時代になって(これは他の時代でも同じですが)和人達の入殖が進み、それぞれの土地の小字名への流用や、行政地名など広域地名へ流用したためと思われます。つまり、地名の移動は単なる誤記や誤伝によるのではなく、和人の活動という社会的な理由から起こったようです。これは「シビシプシ」についても同じだったと思われます。

シビシプシ転用の歴史

江戸時代にこの「シビシプシ」の地名が新しく開いた漁場の名に転用された好例として、村山家資料「安政五年石狩改革一件／網引ヶ所之儀」の中に、新規漁場開拓についての次のような記事があります。

「新キ見立ヶ所 上シビシビ」

これは、シビシビシの上流側に新しく網引場を開くに当たって、その新しい網引場の名を「上シビシビ」と名付けた、という意味のよう

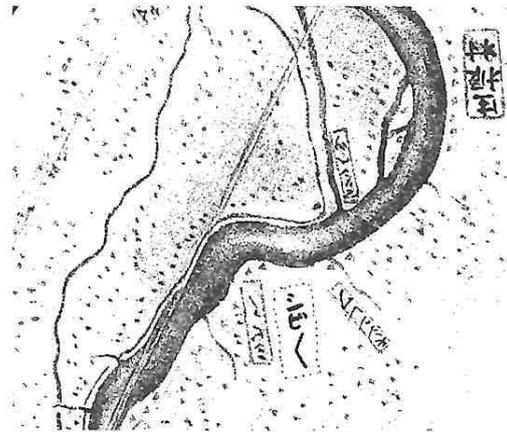


図5.「札幌郡西部図」
 (明治6年(1873。))
 (道立図書館蔵)

開拓使の飯島矩道・船越長善の調査図。
 伊能間宮図の「シブシウシ」のあたりに「シビ、シ」とある。



図6.「安政五年年書上絵図面」
 (村山家文書を一部改変)
 図の右端①に「シビシビ 土人網引場」
 左端中央②に「上シハ、シ ビラカヤウシトモ云」

です。この「上シビシビ（漁場）」のあった場所は何処かというところ、幸い村山家資料の「安政五年年書上絵図面」（図6）に載っていました。「シビ、シ」の対岸の上流左岸にあって、次のように書かれています（地名の表記はやや怪しい）。

（右岸）「シヒ、シ 土人網引場」

（左岸）「上シへ、シ」（附札「ヲタル出稼所当テ」）

「此所ヒラカヤウシトモ云」

つまり、対岸の「ヒラカヤウシ」という場所に新しい漁場を開き、そこを「上シビシビ」と名付けた、ということのようです（ヒラカヤウシについては後述）。

従来のシビシビシ（右岸）はアイヌの網引場で、新しく開いた対岸の上シビシビシはヲタルナイの出稼のために当てたことがわかります。

また、明治初年頃の漁場の様子を見ると、村山家資料の「石狩川漁場割図」（図7。明治初年か。以下「漁場割図」）にも詳しい漁場の様子（網引場の印と小屋の絵）があります。

以下、絵図中の描写や記事を詳しく見てみます（ここに「」内は文字、下の（ ）は描かれている内容で、「網引場」は網引場の記号、「小屋」は小屋の絵があることを示します）。

A（右岸）「字シビ、ウス／共救組合」（網引場・一）

B（左岸）「字シビ、ウス／居小屋」（一・小屋2つ）

C（左岸）「字シビ、ウス／……」（網引場・小屋2つ）

D（左岸）「字ピラカヤウス／……」（網引場・小屋2つ）

下流（右岸）Aのシビ、ウスの方には小屋がなく、左岸Bのシビ、ウスの方には小屋だけ（網引場はない）なので、Bは対岸の網引場Aの人の居小屋に違いありません。

更に上流（左岸）Cの字シビ、ウスには網引場の印と小屋の絵が2つあります。

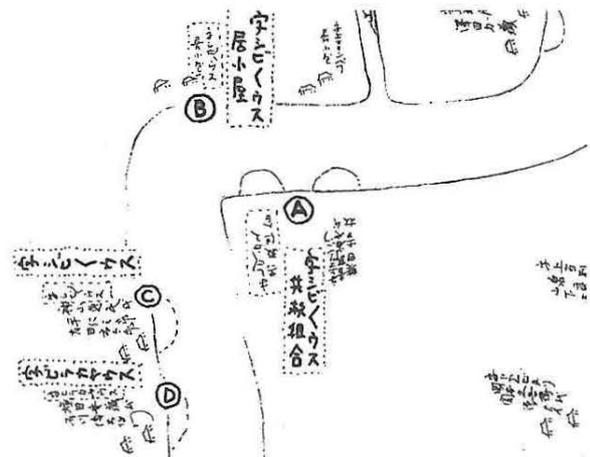


図7. 「石狩川漁場割図」

（明治10年代か）

（村山家文書を一部改変）

- ① 「字シビ、ウス 共救組合」
- ② 「字シビ、ウス 居小屋」
- ③ 「字シビ、ウス」
- ④ 「字ピラカヤウス」

シビシビの故地は湿地帯

トクサは湿地を好む植物のようですからシビシビシは石狩川の右岸（現在の生振4線の北端付近。運河の対岸あたりか？）の湿地帯の地名として矛盾はないようです。

伊能宮図のシブシブスのあった右岸一帯は、T5測図（後出。図11）でもわかるとおりの湿地帯で、網引きには適当な地形ながら居住するには最適ではなかったようです。

シビシビの地名が左岸に移った経緯をみると、安政五年に新規網引場が上シビ、シの名で左岸（ピラカヤウス）に開かれたのがきっかけですが、それ以前にも元々のシビシビウス網引場は右岸にありましたが、その居小屋は対岸の左岸にあったようで、網引場の人々の生活の中心は左岸の方だったのでしょう。それにつれて、左岸の居小屋附

近にもシビシビシの地名が移りつつあったのでしよう。

今は左岸の地名として残っている「志美」は、元々は「生振」と名を変えてしまった右岸の湿地帯のアイヌ地名シビシプシに由来するところがはっきりしました。一方、その故地の生振側には今では原地名の痕跡は全くなくなってしまっているようです。

4. 現在の「志美」の附近は「ピラカヤウシ」

現在の志美の附近にあったはずのアイヌ地名を調べてみると、明治二〇年頃の測量による『北海道仮製五万図』『石狩』(図8。以下、仮製五万図)に石狩川左岸(新港東一丁目附近)に「ピラッカヤウシ」と採られている地名が、前出「安政五年年書上絵図面」の「ピラカヤウシ」に相当するようです。

ピラカヤウシとは何か

知里真志保『地名アイヌ語小辞典』(以下、知里小辞典)では

「ピラ」pira = 「崖」で紛れはないようです。

「カ」ka = ①…のうえ。上面。pira ~ 崖の上。

②…のかみ。

③…の岸。…のほとり。Otaruoy ~ 砂浜でかこまれ

た入り江の岸辺。

アイヌ語の pira-ka の意味は「崖・上」です。一帯の川岸は平地ばかりですから、ここでは川岸の一部が高くなっている辺り、岸が崖のようになっている地形を指しているようです。

シビシプシのあった辺りから川を遡ってゆくと、兩岸はずつと湿地帯ですが、仮製五万図(図8)の「ピラッカヤウシ」の辺りから左岸(志美側)は現在の地形(図9)では+5mの段丘になります。つまり、この辺りから志美側の川岸はずつと崖(ピラ)になっているのがわかります。そのピラ(崖)の上の土地がピラカ(崖・上)と呼ばれた場所だったのでしよう。(注2)

注2 山田秀三によると、平賀サダモさんの姓の元となったピラカは沙流

川東岸の大崖の上のコタンの地名だったとのこと。此処のピラは何十mもの高さのある大崖ですが、山田秀三は八重九郎さんからの聞き取りとして、高さわずか十数cmの川崖もピラという、と紹介しています。石狩川沿いの高さ数mの崖は十分にピラの資格があるようです。

この「ピラカ」が(崖・上)だったとしたら、崖上からは網引きはできませんから、ピラカはコタンか何かを指す地名だったことになります。そのコタンの地名がすぐ下の網引場(yaushi)の地名に流用されて、ピラカ・ヤウシ(pirakayaushi = ピラカの・網引場)という地名が出来たとも考えられます。(注3)

注3 ただし、「ピ」が知里小辞典の③の意味であれば、これはそのまま網引場の地名として不自然ではありませんが、この意味での「ピラカ」の用例は他に未見です。参考までに付記しました。

安政五年(一八七二)の絵図にあった「ピラカヤウシ」の漁場は、明治四・五年(一八七二)頃とされる『石狩郡ノ図』(工藤二〇二)には「ピラカヤウス下漁小屋」「ピラカヤウス上漁小屋」と見えていて、明治時代になっても漁場名としては旧来からの地名「ピラカヤウス」も使われていたことが分かります。

なお、図7で元々のシビシプシ(右岸)のあたりに「共救組合」とあるのは、『石狩漁業組合史』によれば樺太アイヌの共救組合経営場所とのことで、江戸時代にアイヌの網引場だった場所が樺太アイヌの漁場に割り当てられていたことになります。

「志美」に変わる

先に紹介した仮製五万図(図8)に「ピラッカヤウシ」と書かれたあたりは、明治三十九年(一九〇六)の『石狩明細地図』(図10)では「シ



図9. ピラカヤウシ附近の地形の様子

(石橋他 1979 挿絵を一部改変)

左端一帯の着色部分が標高+5mの範囲で、それより右(東側)の湿地帯は地質時代に石狩川によって削られた跡であろう。

「ピラカ(崖・上)」はアイヌ語でこの崖より上の土地を示しているらしい。

漁場の「ピラカヤウシ」はこの崖下の低地帯にあたる。

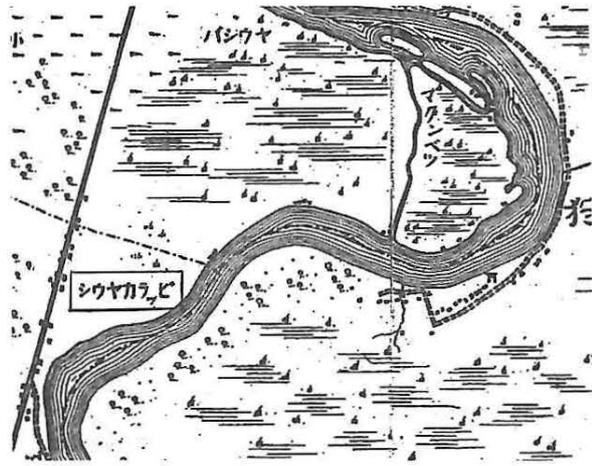


図8. 「仮製五万図」

(一部改変)

明治24年頃測量の北海道庁地理課の成果を基に、陸地測量部が明治29年(1896)に製版した地形図。

南岸(右岸)には地名が無い。

北岸(左岸)には「ピラッカヤウシ」の地名が見られる。

「シビシブシ」に変わっています。一方、陸地測量部の明治四二年修正五万図(図11)ではその附近に「志美分教場」の名が出ていて、大正五年測図(図12)には「シビシブシ」の地名が載っています。

仮製五万図の元となった道庁地理課の測量図はアイヌ地名を積極的に採録しているので、明治二〇年代の初めにも「ピラッカヤウシ」の地名がまだ使われていたのか、既に「シビシブシ」の方が使われていたのかは、これだけでは判断できないようです。

5 まとめ

以上みてきたように、シビシブシの地名が動いた大きな理由は、かつてはアイヌの網引場だったはずの場所(ピラカヤウシ)当時は網引場としては使われなくなっていたのでしよう)に、場所請負人によって新たに網引場が開かれて、上シビシブシと呼ぶようになったことにあるようです。ただそれ以前にも、生振側にあった網引場の居小屋が志美側にあつたりして、地名の動く素地はあつたようです。そして、上記のような経緯を経て、かつてのアイヌの地名「ピラカ」「ピラカヤウシ」などの名を持った土地が、和人の活動にともなつて「シビ」「志美」に置き換わっていったのでしよう。

ピラカヤウシという地名は漁場の名として和人の記録に残りましたが、(その地名の元となった)かつてあつたはずの「ピラカ」の方は和人には縁のない地名だったのか、管見ながら記録には残っていないようです。

現在の志美のある石狩川左岸に「シビシブシ」の地名を付けた初めは、どうやら安政五年(一八五八)の新漁場開発の際だったように思われますが左岸の「シビ」が「新しい」とは言っても、既に百六十年近く使われてきたことになります。



図 11. 「陸地測量部明治 42 年部分修正測図」
(1909。一部改変)

陸地測量部により細部まで三角測量が行われ、地形の描写は仮製五万図に比べ格段に正確になった。

北岸(左岸)に「文 志美分教場」が見え、行政地名としての「志美」が定着したことがわかる。

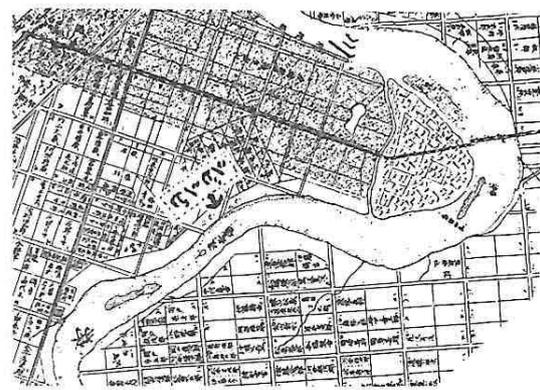


図 10. 「石狩明細地図」
(明治 39 年(1906)。一部改変)

シビシビの対岸に「シビシビ」の地名があり、字名として定着しつつあることがわかる。

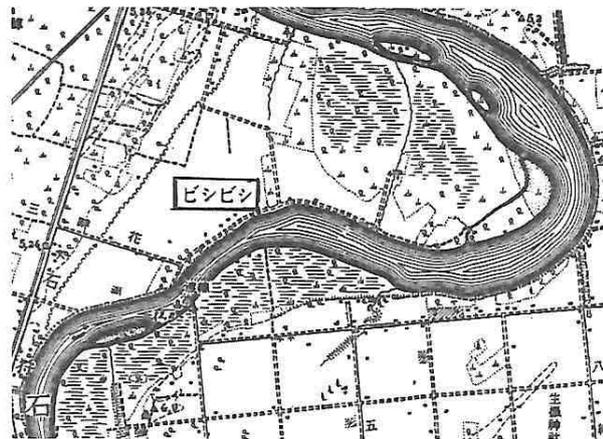


図 12. 「陸地測量部大正 5 年測図」
(1916。一部改変)

明治 42 年修正測図に比べると、伊能間宮図の「シブシウシ」の辺り一帯に湿地の記号が見られる。対岸(「石狩明細地図」と同じ位置)に「シビシビ」と記載されていて、「シビシビ」が付近の「字名」か「集落地名」になっていることがわかる。

あとがき

本稿は前報②花畔と一緒に石狩市郷土研究会の平成二七年九月の例会で発表した内容をまとめたものです。その骨子は既に『アイヌ語地名研究 11』(井口二〇〇八)に発表したものですが、ここではスペースの都合で十分に説明できなかったことや、掲載できなかった絵図も大幅に増やし、なじみのない方にも少しは分かりやすくしたつもりです。また、その後の工藤義衛会員の論考なども参考にして稿を改めました。

【引用・参考文献】

- 飯島矩道・船越長善(一八七四)『札幌郡西部図』北海道立図書館蔵
- 井口利夫(二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九)「伊能間宮図の石狩、勇払横断線の地名①」「アイヌ語地名研究 10」同会／「同②」「同

11』／「同③」同12

石川和介（一八五七／安政四）『観國録』（三）道立図書館／第七分冊
安政丁巳五 北大図書

伊能忠敬・間宮林蔵（一八一三）／文化一〇年代・二〇一四）『大日本沿海輿地全図』・（仮）伊能大図写「アメリカ議会議会図書館蔵『伊能大図総覧』角川新社

石狩町（一九七二）『石狩町誌 上』石狩町

石橋孝夫他（一九七九）『石狩湾新港地域開発区域埋蔵文化財発掘調査報告 SHIBISHIBUSU Ⅱ』石狩町教育委員会

太田 満（二〇〇五）『旭川アイヌ語辞典』アイヌ語研究所

工藤義衛（二〇一〇）『石狩郡図（三番）』について『いしかり砂丘の風資料館紀要 第1巻』・『石狩郡ノ図』について『同 第2巻』同館

田中 實他編（二〇一〇）『石狩漁業協同組合史』石狩漁業協同組合

永田方正（一九九一・一九八四）『北海道蝦夷語地名解』北海道庁・復刻Ⅱ草風館

松浦武四郎（一八五〇／嘉永三・一九九九）『再航蝦夷日誌』『三航蝦夷日誌』・『校訂蝦夷日誌全』北海道出版企画センター

——（二八五七／安政四・一九八二）『丁巳日誌／丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』秋葉實編。北海道出版企画センター

——（二八五六～五八／安政三～五・一九八八）『川々取調帳』『武四郎蝦夷地紀行』秋葉實編 北海道出版企画センター

山田秀三（一九八四・二〇〇〇）『北海道の地名』北海道新聞社・復刊Ⅱ草風館

陸地測量部・地理調査所・国土地理院（旧版地形図。詳細略）
編著者不明（一八五八／安政五）『安政五年石狩改革一件／網引ヶ所之儀』村山家内蔵・北海道博物館蔵

石狩尚古社資料館所蔵俳句の紹介7

石狩尚古社選者 西尾其桃の遺墨

中島勝久



しぐるや雲にも道のあるらしき



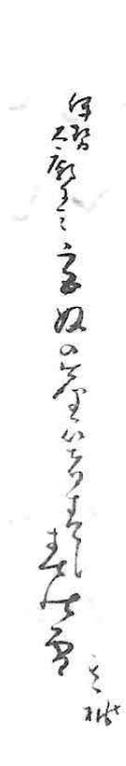
其桃

夕立の風もぬらさぬ晴れにけり



其桃

伊勢大郭にて 宮奴の座箸すてし春の雪



其桃

西尾其桃（にしおきとう）・本名 弥三郎、明治元（一八六八）年、昭和六年（一九三一）年四月没。六四歳。播州（兵庫県）明石郡垂水村に生まれる。

旧姓清水。一二、三歳の頃、且那寺の和尚三千堂清月師に俳諧を学び、三千堂・永春庵と号した。長じて医師となり、青年時代より下関に住み、永年同地の医師会会長を務めた。初め美濃派の俳諧を学んだが明治三九年、東京に出て森山鳳羽の門に入り、羽州・石芝・清美・永機・可都三、老宗匠と風交した。鳳羽没後は無名庵瀬川露城の教えを受けた。のち医師として下関に定住、三千堂其桃の号で、とかく衰えていた蕉風の俳諧、連句の再興に力を注いだ。昭和三年露城没するやその後をめぐって大阪の小野霞遊との間に無名庵の跡を誰が継ぐか決めかねたが、其桃が譲って五年間霞遊が一六世となりそのあと一七世を其桃が継ぐ契約であった。ところが其桃は昭和六年に旅先の紀州白浜で客死したため、一七世としては一日も入庵できなかった。霞遊の後を継いだ寺崎方堂は露城晩年の弟子であり、其桃門下第一人者であったので、恩師其桃を一七世主人と号し、自分は一八世となった。

著書に発句、連句、紀行などを収めた『其桃集』（昭和五年）は還暦記念であり、その他『古式百韻三つ物俳諧式二考』（昭和五年）、没後の昭和七年其桃追悼句集『子の血汐』が刊行された。（『子の血汐都の花をみすべきめ』辞世。其桃の句集は下関の日和山の〈春の日のきらめく蘭の葉尖かな〉の碑の他に全国に九箇所ある。石狩尚古社の選者として石狩に多くの句帳、短冊が遺されている。又其桃の追悼句集『子の血汐』に尚古社社長鎌田地菱の送った「一門の塚に舞ひけり秋の蝶」の句が掲載されている。石狩市にある石狩尚古社資料館には、西尾其桃氏の掛軸・短冊等が展示されている。

初出：NPO法人石狩市文化協会編 二〇一六「俳句のまち」いしかり「第12回俳句コンテスト作品集」

寒塩引に関する文献

工藤 義衛

寒塩引（かんしおびき）とは、石狩の伝統的な鮭加工品のひとつである。石狩市の鮭料理の老舗金大亭で作り続けられてきたが、幻の珍味となっていた。近年、寒塩引が再評価され、石狩発祥の水産加工会社佐藤水産や石狩市観光協会で復元製造されるようになっていたことは喜ばしい限りである。

本稿では近世から現代までの史料、文献から寒塩引の製法に関する部分を抄出した。食文化はあまりにも日常的なものであることから資料が残りにくく、

また誰かが発明して定義したわけでもない。その記述内容にばらつきがあるのが普通である。ここに掲載した資料から寒塩引の製法や各時代の認識の違いなどさまざまな情報を引き出していただければ幸いである。

最初に紹介した「慶応三卯六月 土人御目見得諸用扣」は、今回発見できた唯一の近世の史料である。ヨイチ場所を請負つ



石狩市観光協会の寒塩引づくり（2016年2月）

ていた林家の史料で、「オメミエ」の際にアイヌの側から役人に贈った品目の中に「寒塩引」が見える。

「オメミエ」とは、「ウイマム」とも呼ばれ、元はアイヌの首長が松前藩主に拝謁して土産物を出し、その代償に贈り物を受ける儀式のことで、物々交換による交易の側面もあった。時代が下るにつれアイヌが松前藩主に従属する事を確認する儀式となった。また、安政二年からは幕府直轄となったため箱館奉行及び箱館奉行所の役人に対して行われた。

この史料では慶応三年のオメミエの際にヨイチ場所の場所請負人とアイヌの三役（乙名、小使、土産）が箱館奉行所へ行き、正月の祝言を述べたうえ御土産を献上している。御土産として献上した品は干鰯、串貝、走身欠、寒塩引、間切鞘、糸巻であった。かつてオメミエの際のアイヌからの土産品はその場所の主産物や特産物で価値のあるものが用いられていたが、この頃には形式化していたと言われる。しかし、寒塩引が御土産品に用いられたことは、形式化していたとはいえず特産品として位置づけられていたことを示しているのではなからうか。

寒塩引がいつ頃から造られ、贈答に用いられるようになったのか資料は極めて乏しい。本朝食鑑など近世の食文化に関する文献に寒塩引は見られない。田島佳也が示した文化元（一八〇四）年の諸藩から幕府への献上水産物の中で、鮭及び鮭の加工品は13種ある。しかし、この中にも寒塩引は見られない。田島は「（鮭は）中世には鯉の重用と鮭の大衆化によってさして重視されないようになり、四条流包丁では雑魚として扱われたといわれる。」とし、近世になっても鮭鱒は祝儀に用いない考え方が残っていたことを指摘している（田島佳也「二〇一四『近世北海道漁業と海産物流通』」。寒塩引が珍味として珍重されるようになった時期は、塩引鮭が御歳暮に持ちられる風習が定着した時期と合わせて考える必要があるだろう。今後の史料の増加が待たれる。

次に示した「北海道産物製法手続」は、江戸時代に石狩場所を請負っていた阿部屋村山家に伝わる海産物の製造法である。明治一〇年、開拓使に求めに応じて提出されたこの資料には、鮭塩引のほか身欠き鯨など他の水産製品の加工法も記載されている。

「伯林府漁業博覧会出品解説書」「伯林府漁業博覧会出品解説書付録」は、北海道立文書館に所蔵される開拓使文書で明治一三年にベルリンで開催された漁業博覧会に関するものである。出展にあたって漁法や漁具について調査した資料や調製した標本類の概要についてまとめられている。この中から寒塩引の一般的な製法に関する記載と茂辺地で聞き取られた寒塩引の製法についての記載を収録した。石狩以外の地域での寒塩引の製造に関する資料として重要である。

開拓使文書を「寒塩引」で件名検索をすると20件ほどヒットする。明治七年から海軍省が軍艦に載せる保存食として注目し、陸軍もこれに続いた。この頃寒塩引の生産は主に根室支庁管内で行われた。開拓使事業報告で寒塩引の生産額が記載されているのは根室支庁のみである。

「北海道志」は開拓使時代に地誌として編纂がはじまり、開拓使廃止後は大蔵省が引き継ぎ明治一八年に完成した。江戸時代に遡って産業、風俗など北海道の諸物の沿革を示すとともに、開拓使時代の状況を示している。寒塩引についても江戸時代に遡って記述している点は貴重である。特に注目されるのは、「此松前氏ノ時幕府ニ献スル所ナリ」というくだりで、狭くとると塩引が、広く取ると乾鮭、寒塩引、塩引」幕府に献上されたという意味にとれるのだが。

「日本水産製品誌」は、一九三五（昭和一〇）年の刊行だが、編纂は明治二〇年代に農商務省によって行われたものである。寒塩引の製法としていったん塩蔵したものを水で塩抜きする事、その後燻乾することと簡潔に記している。

「北海道漁業志稿」も刊行は一九三五年だが編纂は明治二二年であ

る。編纂した村尾元長は開拓使から函館県を経て北海道庁の記録課長を務めた。「北海道漁業志稿」のほか「北海道漁業史要」など漁業関係資料の編纂で知られている。

「鮭鱒聚苑」は、鮭の百科事典というべきもので鮭に関する著作で鮭の皮で装丁していることが良く知られている。この中で「干塩引」と「寒塩引」の二つについて記述されている。「干塩引」も「寒塩引」も音読みすればいずれも「かんしおびき」である。単に当てた漢字が違うだけなのだろうか。干塩引の冒頭「干塩引と塩引鮭の中……」では意味がとれない。「干塩引は塩引鮭の中販売に適せざるものを……」であれば意味が通じるが、果たして干塩引は出来の良くない塩引鮭のりサイクル品だったのだろうか。

「北海道の水産製品の見分け方とその食べ方」は、一九五五年に北海道庁水産部が編集し北海道漁業協同組合連合会から発行された本で、北海道産の主な水産物の概要と良品の見分け方、料理法などをまとめている。この中で「寒塩引」という製品は掲載されていない。しかし、ここで取り上げた「冷製さけ」の製法は塩漬にした鮭を塩抜きする過程はまさに寒塩引そのものである。寒塩引がただ鮭を干したもののなか燻製なのか「鮭鱒聚苑」でも微妙な記述がある。寒塩引を考えると燻製との関りも注意しなければならないのではないだろうか。

明治から戦前に取り上げられた寒塩引は、戦後ほとんど聞かれなくなってしまう「幻の珍珠」となってしまう。ほぼ同じような製造法、製品が異なる名称で呼ばれていることは、寒塩引を巡る当時の状況を示すものとして興味深い。

こうしてみると寒塩引は石狩でのみ作られていたものではなく、幕末には余市で、明治初期には道南でも造られていたことが明らかになった。ただ、やはり寒塩引は石狩産という認識はあったようである。明治13年のベルリン水産博覧会に出展された寒塩引は石狩産であった。今

回は収録しなかったが、明治初期の十文字家文書中に「寒製の鮭」「(鮭の)寒漬」といった言葉が見られ、これらが寒塩引を指している可能性は高い。明治初期には石狩の人々にとって寒塩引はそれほど珍しいものではなかったのではないだろうか。

多くの文献に共通する寒塩引の製法は、塩漬けにした鮭を冷水に漬けて塩抜きし、乾燥させる方法である。乾燥工程で弱い燻煙にあてるものやあてないものがある。

製造工程からみると新潟の「酒びたし」とほぼ同じものと考えられる。日本各地に見られる塩引の製法には、寒塩引と同様に塩抜きをする手法もある。寒塩引については石狩を中心とする地域でどのように生み出されたのか。そして、鮭の加工品のなかでどのように位置づけられるのか、新潟県村上市を初めとする他地域との比較も重要になってくるに違いない。

最後に、寒塩引の文献については北海道教育大学札幌校教授百瀬響氏、余市町教育委員会社会教育課主幹浅野敏昭氏には種々御教示いただきましてこの場を借りて御礼申し上げます。

一、店行(年々店行 松前竹屋送り)

- 店行
- 年々御店行
- 一、走身欠 二四入 五十本
- 一、外割 百束
- 但し午年より五十束
- 一、干鱈 六十束
- 一、鮭すし 二斗入 十五樽
- 一、同切込 同 十樽
- 但 午年より断々願見合
- 一、海馬

外二

秋味船にて相登七候分

左の通

- 一、並塩引 五十本
- 一、同 十五本入 十箇
- 但しくヨリは祢出也
- 一、筋子 十五樽
- 一、荒巻 二十本
- 但 漁事宜敷年柄は五十束也百束也相登七可申候
- 一、大と塩引 十二疋入 二箱
- 一、子籠 二束
- 一、鮭切漬 四斗 五丁
- 一、浄瑠理子 一斗 一樽
- 一、鮭のすし 三樽
- 但 内一樽戌年より増り
- 是は神明藤田様行の分也
- 一、鮭丸漬 五樽
- 一、塩数子 七十樽
- 但 午年より三十五樽
- 一、鱈ちし漬 二斗 二樽
- 一、干鱈ちし 二斗 二丁
- 一、塩ふき 四斗 二丁
- 一、同子婦漬 二斗 三樽
- 一、昆布 一呎 四本
- 一、く数子 四本
- 目形二十貫目
- 一、昆布 五メ目 十九
- 一、寒塩引 一束

近年より五十本相送り候

一、鱈干ヒラ

一、鮭同

一、塩鯨

一、せんまい

一、わらび

五百枚
十束

此外珍敷品々可相送

一、背綿

近年一瓶相増申候

一、同きも

一、同ちし

其年に寄るべし

一、塩鱒

一、スヒ

同

一、干ヒラ

近年出稼相止に候付無之

一、舞茸

メ

外 珍敷品有之候はは

切囲有之年柄左の通り

一、塩引

一、筋子

一、大く塩引

メ

右通り為相登可申候

(林家文書I-23 諸用留・一・二三)

御奉行様

二 火災類焼者に見舞のこと

安政六年未七月二十八日夜丑刻頃 川原町サ印火元にて 同家土蔵

1ヶ所焼落 猶東付並家数五軒類焼有之候に付 見無として

一斗入醤油一樽ツ、配り候廉左に

御足輕

羽盛加一郎

吉田 藤作

張替ノ敬二郎

メ三たる

砂鉢肴 二枚

井 一

寒汐引 二本

身欠 七把

サ印へ

(林家文書I-39 嘉永年間ヨリ安政年間マテ 諸用控第一卷・六九)

三 慶応三卯六月 土人御目見得諸用扣

御献上物書上 ヨイチ御場所

御役所様 惣乙名

一、干鱈三束 イタキサシ

一、馬駄覆一枚 惣小使

一、キナ同 マクライ

一、筆立一本

一、盆一枚 以上五品

- 一、干鱈 二束
- 一、寒塩引 三本同
- 一、馬駄覆 一枚
- 一、盆 同

右の通御座候 以上

ヨイチ御場所受負人

竹屋 長左衛門
代 嘉左衛門

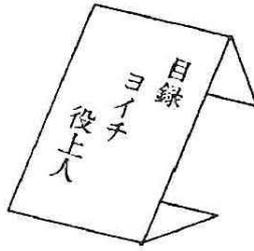
卯六月十二日

御役所様

一、献上物御役所御奉行様 品訳の義は 土人通弁役松浦忠三郎様より差図有之

御役所御献上

- 一、干鱈 三束
 - 一、馬駄覆 一枚
 - 一、キナ 同
 - 一、筆立 一本
 - 一、盆 一枚
- 以上五品



目録板奉書二枚折

上

- 一、干鱈 三束
- 一、馬駄覆 一枚
- 一、キナ 同
- 一、筆立 一本

- 一、盆 一枚

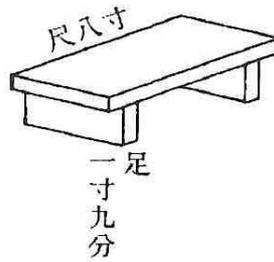
以上

ヨイチ御場所

役土人

御奉行様

- 一、干鱈 二束
- 一、寒塩引 三本同
- 一、馬駄覆 一枚
- 一、キナ 同
- 一、盆 同



目録

御奉行所同断

目録台

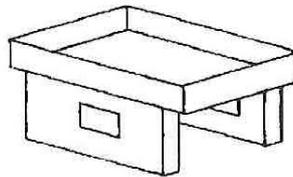
組頭様板奉書三ツ切

御調役様並奉書四ツ切御定役様同様

上

- 一、寒塩引 三本
- 一、馬駄覆 一枚
- 一、キナ 同
- 一、筆立 一本
- 一、盆 同

ヨイチ御場所
役土人



一、干鱈 上 一束
一、馬駄覆 一枚
一、キナ 同

ヨイチ御場所
役土人

ヨイチ御場所
請負人
竹屋 長左衛門
代 嘉左衛門

ヨイチ御場所
役土人

右三枚の名札
ヨイチ音場所
通辞代 伝吉

御組頭

荒木 濟三郎 様
山村 惣三郎 様
高木与惣右衛門 様

一、寒塩引 三本
一、馬駄覆 一枚
一、キナ 同
一、筆立 一本

一、盆 一枚

以上五品

御調役

松岡 徳治郎 様
清水 啓作 様
成瀬 潤八郎 様
吉村 源太郎 様

一、干鱈 一束
一、馬駄覆一枚
一、キナ一枚

以上五品

御定役元メ

柴田 竹一郎 様

一、寒塩引二本
一、キナ一枚
一、糸卷二ツ

以上三品

御定役

植月 良造 様
白鳥 友治郎 様
根岸 馬之助 様
石渡 政吉 様

一、寒塩引 二本
一、間切鞘 一本
一、糸卷 二ツ

松前様御献上

一、寒塩引 二本

一、馬駄覆 一枚

一、キナ 一枚

一、筆立 一本

一、盆 一枚 以上五品

一、走身欠 五把 松前留主居 藤田 吉蔵様

一、同 五把 同下役 平井重右衛門様

ヨイチ運上家土産

一、干鱈 三束 土人通弁役 杉浦 忠三郎様

一、馬駄覆 一枚 御同人様役土人ヨリ

キナ 一枚

一、馬駄覆 一枚 附添通弁代 伝吉ヨリ

一、走身欠 五把 土人手引方 和賀屋

西地受負人惣代

一、干鱈 一束 鍋屋 吉右衛門殿

此分先年無之候得共 外三場所より差出候に付 干鱈右合にも差遣

し尤請負人より土産有之

御祝儀卜記し ヲタルナイ タカシマ ヲシヨロ

ヨイチ四ヶ場所

一、金三両包金 湯吞所小使中江

一、金三百疋 同町台所詰中江

一、金二百疋 同表御門

一、金同 同裏御門

一、百疋 同こしかけ所

土人御礼前々に差遣し候事

(林家文書I・68慶応三卯六月 土人御目見得諸用扣・一・二
(余市町総務課ほか編 一九八五 余市町史第一卷資料編一 余市町)

二、北海道産物製法手續

(前略)

第五條 鮭及筋子寒塩引製法ノ部

第一項 鮭塩引ノ製法ハ収穫シタル即日ニ切倉ニ輸送シ腹部ヲ割キ白

子筋子ヲ取り去ルモノトス

第二項 白子筋子ヲ脱セハ塩ヲ以鮭ノ尾ヨリ頭部ニ四五度モ塗抹シ宜

ク鱗間エ満タシメ尚割切タル腹中ト両眼トニ詰込ムヘキモノトス

第三項 塩ノ斤量ハ鮭ノ大小ニヨリ少異有之ト雖トモ百尾ニ付二斗五

升ヨリ三斗五升ノ間ヲ以テ適度トス二斗五升ノ塩ヲ用ユルハ七八ヶ

月ヲ保チ三斗五升ヲ用ユルハ両三年以上ヲ保ツモノトス

第四項 第二項ノ手續ヲ了レハ縦横ニ切倉エ積□子一□毎ニ塩ヲ振掛

ケ積止ノケ処ニ至レハ一倍(一□間ニ用ユル量ノ倍数ナリ)ノ塩ヲ

塗抹シ周圍ハ□ヲ以宜ク覆ヒ風氣ノ入ラス様注意スヘキモノトス

第五項 鮭ハ収穫シタル日ヨリ五日以上塩ヲ切ラサレハ腐敗ノ憂アリ

故ニ右日限内ニ□ヲ前項ノ手續ヲナシ製法スルモノトス

第六項 塩引鮭ハ六千尾ヲ以百石トナシ別ニ荷造リヲナサザルモノト

ス

第七項 筋子ハ腹中ヨリ取り除ヲ直チニ倉庫或ハ納家内ニ□日光ヲ□

ケス風氣流通ノ宜キケ処ヲ撰□葭簀ヲ敷キ其上ニ平列セシメ百腹ニ

付塩三升五合ヲ度トシ振掛ルモノトス

第八項 前項ノ手續ヲ了シ畧三日過キ筋子ノ外面乾タルヲ度トナシ樽

込ミノ手續ヲナスモノトス

第九項 筋子樽ハ明酒樽ヲ好シトス

第十項 第七項ノ際ニ至レハ樽底エ笹葉三通リヲ敷クモノトス

第十一項 樽詰メノ際百腹ニ付塩一升ヨリ一升五合迄ヲ度トシ一□毎

ニ振掛ルモノトス

第十二項 樽蓋ハ透間ノナキ様堅固ニ打込ミ回石灰ヲ抹リ堅メ流氣ノ

流通ヲ除クモノトス

第十三項 筋子ハ鮭腹ヨリ取り除ク際宜ク注意シテ白子或ハ砂石等ノ混セサル様注意スヘキモノトス

第十四項 白子ハ是迄廃棄スルモノ多クシテ其製法ヲナスモノ稀ナリト雖トモ右ハ鯨白子同様ノ肥糞分子含有スルモノナレハ□シテ廃棄スルヲ禁スヘシ

第十五項 鮭白子ハ鯨白子同様ノ手續ヲ以テ製法シ産物トナスヘキモノトス

第十六項 寒塩引ヲ製スルニハ第一第二第四第五項ノ通りタルヘシト雖とも塩ヲ用ユルノ斤量ハ百尾ニ付ニ斗ヲ以テ適度トスヘシ

第十七項 倉積ノ日ヨリ畧三十日ヲ過キ塩ノ全身ニ回リタルヲ度トシ藁縄ニテ尾ヲ繫キ之ヲ納家ニ移シテ干シ乾スモノトス

第十八項 乾シ場ハ納家内□□高サ六尺以上ニナシ宜ク空氣ノ風動スルケ処ヲ撰□設クルモノトス

第十九項 大寒ノ時節ニ至レハ宜ク清淨ナル水ヲ四斗樽工移シ其中ニ適宜ニ乾燥シ侵スヘシ

第二十項 樽中ニ侵スヘキ時間ハ三日ヲ限ルモノトス

第二十一項 樽中ノ水ハ一日ニ一度以上汲換ルモノトス

第二十二項 前項ノ日数ヲ以水中ニ浸シ了レハ再ヒ第十七項ノ干場に移外面ノ水分宜ク乾キタルヲ度トシ之ヲ家屋内工移スモノトス

第二十三項 前項ノ手續ヲ了レハ焚キ爐ノ上ニテ宜ク煙ノ登ルケ処ヲ撰□果木ノ辺工掛場ヲ設ケ一尾毎ニ掛置モノトス

第二十四項 前項ノ乾場ハ煙氣ヲ含有セシムルノ為ナレハ焚キ爐上ニテ最モ煙ノ登ルケ処ヲ撰ムヘキモノトス

第二十五項 前項ノ場処工掛ケ全身ニ煙氣ヲ含ミ宜ク乾燥ナルニ至レハ日数三十日位ヲ以乾燥ノ適度トス之ヲ倉庫或ハ家屋内ニテモ空氣流動カル場処工移シ蓄ルモノトス

(北海道大学所蔵・「村山家文書」通し番号二一九〇)

三 伯林府漁業博覧会出品解説書(独逸國伯林府漁業博覧会出品採集書類三)

寒塩引

渡島國上磯郡茂辺地村字茂辺地川ニ産ス(和名鮭)此魚□は近湾ノ鹹淡ノ際ニ住ス秋冬ノ季節ニ至リ卵ヲ産スル時川ニ遡リ子ヲ産シ終レハ又海ニ下テ死スト云フ、捕漁者コノ期ヲ懲マラス(即明治十一年十月より十二月)川流に群遡し来る中ヤス(方言器械の名)にて刺突シ而シテ之レカ腸部を刮去シ充分塩ニ漬ケテ後四週間許ヲ経テ冷水ニ浸洗シ火上ニ燻乾シ皮骨ヲ去リ食用ニ充テ則チ寒塩引ト称スル処ナリ其収獲ヲ等スルニ尅カ年大概二千四百本件内製スル三十分ノ一二過キス故に諸方ニ輸出スルナシ

(道立文書館所蔵・簿書三三四九)

四 伯林府漁業博覧会出品解説書付録(独逸國伯林府漁業博覧会出品目録及解説書二)

一 鮭 方言 秋味

製法 毎歳九月ヨリ十二月ヲ以テ捕獲ノ期トス、獲る所の鮭の腹を割き腸を去り食塩壹斗に鮭壹束(貳拾尾を壹束とす)を漬切切蔵に(方言 納屋即魚屋)収むること凡そ六十日間其間二十日毎に上下交換し(表裏反覆するを云)毎尾食塩二合を加え布リ斯くすること数回にして成る 之を塩糝鮭と云う

又、毎歳十月上旬獲る所の鮭の腹を割き腸を去り一尾に食塩凡そ貳合五勺を撒布し土間へ層々相累ネ蔵すること凡そ六十日間然後寒水に浸し清水を換え三日間を経陰乾して水分を去り其頭并腹部の皮肉を切截して爐上に懸け貯う然する中は暑候と雖も腐敗の患なし又此法を施して全體或は頭部を切截したる俣貯うる等皆稱して之を寒塩引と云う

製法

従来塩引ニ製シモノ尤内国人ノ嗜好ニ適ス故ニ其生産高歳々巨多ナリ、又一種寒塩引ト称スルモノ有リ産量甚希少ニシテ一般ノ需求ニ供スルニ至ス、本使近歳洋法ニ倣ヒ鍊葉缶詰ト為シテ広中外ニ輸シ頗ル声価ヲ得タリ、今従来各種ノ製法并ニ鍊葉缶詰ノ大要ヲ述ブル左ノ如シ

塩引

鮭魚ノ腹ヲ割キ腸ヲ去リ以テ此レヲ醃魚庫ニ運ビ腹部及ヒ鰓中ニ食塩(一尾ニ就キ凡五合許)ヲ填メ一尾ツ、并列シテ塩ヲ散布シ層々相積ミ蔵置スルコト凡ソ六旬間ニ旬毎ニ上下反覆シ更ラニ少許ノ塩ヲ加フ斯クスルコト数回ニシテ完ク製了ス

寒塩引

前條ノ法ヲ施シ成ル所ノ塩引鮭ヲ寒水ニ浸スコト凡ソ二週間日々清水ヲ換エ(流水ニ浸セハ水ヲ換ウルノ煩ナシ)後チ之ヲ取出シテ数日陰乾ニシ水分ヲ去リ爐上ニ懸ケ自然ニ熏烟ス斯ク製セシモノハ應久腐敗ノ患ナシ

伯林府漁業博覧会出品目録 開拓使

第一区

第一類

番号	品名	製	数量	産地	代償
第壹号	鮭	剥製	貳尾	石狩国石狩	金壹円五拾銭

(中略)

第二類

第百卅六号	鯛	乾製	貳把	後志国岩内	金拾銭
-------	---	----	----	-------	-----

(中略)

第百六十二号 熏鮭 同 一 胆振国山越内村 同三拾銭

(中略)

第百六十八号 塩鮭 塩漬 二尾 根室国西別 同六拾銭
第百六十九号 寒塩引 同 同 石狩国石狩 同六拾銭

(以下略)

(道立文書館所蔵・簿書三三五〇)

五 北海道志 卷之十三

漁業採藻

鮭ハ方言秋味ト称ス、根室西別川ヲ以テ上品ト為ス而テ其捕獲ノ多キハ西部石狩川ヲ以テ第一ト為ス其他諸川亦在ラサル所ナシ、中秋ノ頃網シテ皮ヲ去リ肉ヲ火上ニ熏シ乾シテ腊ト為シ食ニ供ス之ヲ乾鮭ト称ス、塩醃シテ寒水ニ浸シ塩味ヲ節減シ乾シテ烟氣アル所ニ貯フ之ヲ寒塩引ト称ス、一説塩ヲ溶解シ鮭ヲ漬シ曝乾シテ後寒水ニ入レ塩味ヲ節減ス之ヲ塩引ト称ス此松前氏ノ時幕府ニ献スル所ナリ

(北海道開拓使編 一八八四 大蔵省)

六 日本水産製品誌

二 寒塩引鮭

寒塩引鮭は、塩鮭を寒水にて洗い燻乾せしものなり。製造法は、一旦塩蔵したる鮭魚を寒水に浸し、日々清水を換え(流水に浸すときは水を換るの煩いなし)爐上に掛けて燻乾す。然る時は暑熱の候と雖も腐敗の患いなし。殊更に薄塩を施したるは味殊に佳なり。此ものは燻製を食するが如く、小口切りにして酒肴に供して佳なり。

(農商務省水産局編 一九三五 株式会社水産社)

七 北海道漁業志稿

鮭燻製法

鮭燻製の種類は「テツピラ」、寒塩引燻製、米国風、露国風とあり。米国風の燻製は「テツピラ」製に似て頭を去り且つ無塩なり。露国風の燻製は寒塩引に似たり。「テツピラ」は現時僅か似土人の間に行はる、而身己にして記するに足らず。魯国風は頭及び「ハラス」を除き燻製したるものと及腹を割き燻製したるものとの両製あり。腹を開きたるものは明治四、五年中勸業課の試験に係り悉皆腐敗せりと云ふ。明治十年再び石狩に於て試験せるもの充分の結果を視ず。「ハラス」を去りたるものは明治十一年石狩に於て僅かに試験し結果を得たり。各種製法の概略左に述ぶ。

干塩引

干塩引と塩引鮭の中販売に適せざるものを除き置き、寒中に至り水中に浸漬すること大概二週間以内にして取出し充分に洗ひ、尾際を縄にて結び陰乾し、後ち爐上に燻製す。其日数数三十日位を以て適度とす。

(北海道水産協会編 一九三五 北海道水産協会)

八 鮭鱒聚苑

鮭は祝儀肴

(前略)

乾鮭は「下学集」に干鮭(からさけ)とあり、また一部の人に凍鮭(からさけ)とも書かれる。乾鮭は、昔、南部名産として知られ、近來北海道・青森地方での寒塩引は此れと同じものらしい。凍鮭は今日の冷凍鮭ではなく、寒塩引からきた書き方であらう。また、寒塩引は、乾塩引にも看做されるが、乾鮭、楚割、寒塩引等の製法は多少異なつてゐるであらう。

乾鮭は塩引と共に文学的には俳句の冬の季題となつてゐるが、それは製品が寒空の師走に、市中に〇がれ、また主として歳暮の贈答品として珍重されるためである。

鮭は目出度い魚であるから、現今、新巻等の塩蔵が贈答品として珍重されてゐるが、昔は、殊に乾鮭は祝儀肴として主を為してゐた。美味いことと、魚肉が慶祝にふさはしい赤色であること、此の他他種々な理由もあるらしいが、左の古書のやうな見方もある。

寒塩引

之の原始的な製法では、塩蔵せぬ鮭を天日に、又は杣屋造りの漁家で焚火する天井裏に吊るして土俗ラカンのように製し、鮭を極寒冷水に浸して毎日清水を取換へるのだが、氷を張りつめる川底の流れにさらすと水を換へる面倒が無いので便利である。斯様にして水に晒した後、陰干しとし又は爐の上にかけて乾燥した。然し天候不良・乾湿不定等に災いされることが多いので、近來は乾燥機にかけて乾すやうになり、又塩蔵品で製する。

寒塩引は、真夏でも腐敗の患ひなく、半透明の艶甲色で、殊に薄塩を施したものはなかなか美味い。一寸燻製に似た味もするが、煙の匂ひが殆どなく、之れは乾鮭のやうでもあり、燻製鮭のやうでもある。乾燥度の高いものは肉質が幾分脆いが、小口切又は削りなどして、鮭の肴オードヴルに賞味される。

(松下高 一九四二 株式会社水産社)

九 北海道水産製品の見分け方とその食べかた

(二) 燻製さけ

「冷製さけ」は、えら(さざめ)を除き、腹を開いて精卵及び内臓、背腸を除いて良く洗ひ、二割位の塩で一週間乃至10日間位木槽などに塩漬して肉締りが良くなった頃に塩抜きをし、尾部を細紐で縛つて掛木に下げ、腹腔を広げて燻乾します。燻乾中燻室内の温度は華氏六五度(摂氏一八度)内外を保ち、凡そ四週間位で製了します。冷燻にしんに比して割合に低い温度で永い日数を要して燻乾するのです。

なお、冷燻さけで、頭と腹すを除いて棒状にした燻製がありますが、これは「棒燻さけ」と言われていますが、現在行われているのはほんどこの方法です。

(北海道水産部水産製品課編 一九五五 北海道漁業協同組合連合会)

平成二八年一月五日に石狩市郷土研究会元会長山口福司さんが亡くなられました。山口さんとは石狩町文化財保護審議会の会長と事務局職員ということでお付き合いが始まりました。審議会の事務方としてはあまり出来が良くない私でしたが、山口会長はいつも温和で優しく接していただきました。本当に感謝しています。

郷土研究会の会長を永く務められ、任期中に取り組まれた歴史写真集の刊行事業が「二十一世紀に伝える写真集」として教育委員会から刊行された際には、本当に我が事のように喜ばれていらっしゃいました。

自動車の免許は持たず、自転車でも出かけられていました。叙勲を受けられた際、「運転免許を持つている奴は、違反をして勲章を貰えない奴が多いんだ。僕は無免許で勲章をもらったんだよ。」といたずらっぽく笑ってらっしゃいました。ユーモアのある方でお話の端々からお人柄がにじみ出てくる方でした。この場を借りてご冥福をお祈り致します。

石狩衆の漁撈作業衣などを考察して

石狩三地区の人々

吉岡 玉吉

はじめに

明治中期（明治二十・一八八七）年頃以降、昭和前期（昭和二十・一九四五）年頃まで、石狩浜 厚田浜 浜益浜の漁師は春はニシンを、秋はアキアジを獲って一年を暮した。黎明期の明治期から大正、昭和前期にかけて戦争々々に明け暮れ、浜は食糧増産と囃し立てられ仕事に励んだものである。

さて衣食住にあつては昭和期に入ると一層戦争完遂のためと統制され、食住は都会程ではないが、衣は程々に苦労した。

湖るに浜の漁師の着る物は、昭和期に入り労働に適応した作業衣（ナツパ服）が出廻るようになったが、大正期頃までは水仕事にあつても「ムジリ」「ドンザ」（ドンジャ）と云われる刺子（さしこ）が主流であつた。

本稿ではこの時代の衣服（着る物）を中心に考察することとした。



☆明治中期から昭和初期まで浜で着用した衣類。

○男子衆（注1）

○頭、顔、頬

陸仕事の時は手拭で頬被（注2）か鉢巻または木綿かメリンス（注3）の風呂敷状の三角（注4）。沖仕事になると、夏は手拭を被るか、単に鉢巻きで結ぶ。冬場など寒い時は、三角に日本手拭か手製の鉢巻きを頭部で締め、三角の両端を交差して、耳上にはさめ覆面状にする。吹雪などに最高の防寒姿となる。（この格好を体裁よく被ることが出

来れば漁師も一人前。粋な被り。）

老年人はこの三角の外、ネルや赤ケット（注5）の布を三角にして被った。

この外、市販されているタコボロシ（注6）という防寒用の帽子があつたが、浜では自前（自家で作成）の三角を被るのが主だった。

男の子らは大正年間夏は無帽、冬は毛糸のタコボロシ、昭和に入つてからは学生帽、冬はスキー帽を被った。

注1、石狩・厚田・浜益浜で昭和初期頃まで、互いに衆（津軽衆、秋田衆、越中衆、越後衆、南部衆）を付けて呼んでいた。厚田浜では鯨漁に「廻り船」で来る漁家を石狩衆と呼んでいた。注、磯舟で帆走して来ることから「廻り船」という。

注2、頬被。ホオカムリ、ホッカブリともいう。①頭から頬にかけて衣服や手拭などがぶるること。

注3、メリンス。ポルトガル語。メリノ羊の毛で織つたところから名付く。薄く柔らかく織つた毛織物。唐縮緬。モスリン。

注4、三角。三角帽子の略。主として紺か黒色、生地は木綿かメリンス。裏はメリンス、又は相方メリンス（裏は薄手の生地）を使用。風呂敷状に縫う。ほとんど自家製。小樽市では市販のものもあつた。三地区では小学校を卒業し、浜で働く人はほとんど使用した被りものだった。

注5、赤ケット。ケット。ブランケットの略。英語。毛布のこと。赤色の毛布地。

注6、タコボロシ。蛸帽子。冬の帽子。毛糸で作りと鼻だけ出した蛸のボツチ（頭）のようなシャッポ（帽子）。殆ど自家製、子供用が多かつた。

○手

夏は軍手のない時代は素手。手掛け（注1）冬はテツカイシ、寒い時は綿入れテツカイシ（注2）、子供はポッコ手袋（注3）に両手に紐を付け首からさげてはかせた。

明治時代は藁製が主だった。大正期に入つてからは市販のものも出

廻るようになったが、家々では木綿地で女子衆が夜なべで縫ってはいた。

藁テツカイシ（注4）は機械弄りやワイヤ類の作業の現場で、今日でも使用され、市販もされている。

大正期に入ると軍手も出廻り、陸仕事も沖仕事にもはくようになった。

昭和五、六年になると毛糸の手袋も市販され、毛糸も出廻って主婦や娘達が編んではいた。

また厳寒期にはゴム手袋も出廻り、はいて水仕事もした。

注1、テガケ（手掛け）。木綿地を手、指に

合わせて裁断し、木綿を刺した自家用の手袋。ゴム手袋が出廻る前に沖仕事でも欠かせないはきもの。軍手はぬれると脱げ易かったが、手掛けは、手首に紐がついていて脱げなかった。

注2、テツカイシ（手返し）。木綿地で綿を入れたりして作った親指だけを

離し、他四本指を入れる防寒用の手袋。テツカ、テツケシともいう。

テツカ、①指抜き、青森、秋田、岩手地方の方言。②手の甲、秋田、岩手地方の方言。この地方の来道者によって普及したはき物である。

注3、ポッコ手袋。ポッコとは赤ん坊、秋田、岩手地方の方言。作りはテツカイシと同様であるが小形に作り両方に紐をつけ首から下げてはく。

市販のものもあったが、三地区では自家用で裁断して縫ってはかせた。

子供用の防寒手袋。

注4、ワラテツカイシ（藁手返し）。わらを打ち手袋状に編んだ手袋。かつて軍手やゴム製品のない時代、地曳網などの漁撈用として使用した手袋。



《テガケ》



《ワラテツカイシ》

○足

その後、機械類や油類（ドラム缶）など操作する時にはいた。

足廻りは次の通り一覧とする。

ア、脚絆。脛を保護するために巻く和服時の脛当て。男女共使用。

紐で結びつけ足ごしらえとする。ケハンともいう。

イ、草鞋。わらを打ち、わらを編み、履き、足首にわら紐で結び、

足を保護する履物。ゴム製品のない時代の唯一の履物。男女共

使用。

余話。明治から大正にかけて石狩川河口でのサケの地曳網漁が

盛んに行われていた。夏季のワラジ掛は平気だが、後取り（十二

月のサケ漁）の厳寒期では川に入り網を引くのは足袋にワラジ

掛けでは足の芯までシバレル、ヤン衆（漁夫）は石油缶に熱湯

を入れ、足を突込み「イシカリ」と大喝して網を引いたという。

ウ、草履。鼻緒があり歯がなく平らな履物。藁草履。旧石狩市街は

砂の道路で下駄類は似合うが草履類は不適當。厚田、浜益は道

路は土、砂利、浜は石原、下駄は似合わず藁草履が良く似合い、

子供まで学校に行くにも学校内の上履きにも良く履いていた。

エ、ケリグツ（けり靴）。ケリとは昔の一種。青森、秋田、山形、

岩手ではケリとは藁靴のことをいう。旧石狩本町地区、厚田村

ではアキアジのカノ（雄）で作った履物で中にケリ草を入れて

履いた靴。

オ、雪駄。草履の底に皮またはキルクを張った履物。キルク草履と

もいう。主として男子用。筆者も厚田村で履いた。

カ、下駄。木（柳、桐が主）をくりぬいて歯を作りつけ鼻緒をすげ

た履物。旧石狩本町地区の砂道では良く似合う履物。男女共使

用。

爪皮。雨雪振りなどに下駄の先を覆って汚れを防ぐ用具。

キ、足駄。雪振りなど道の悪い時に履く下駄。高下駄、高足駄。石

狩三地区の冬季間は似合わぬ履物だった。男物が主。

ク、ガツパ。木製の女子供用の履物。青森、秋田、岩手、宮城では、ぼくり(ホックリ)。石巻(宮城)では氷滑り用の履物。旧石狩本町ではガツパと云う人もいたが、昭和初期では下駄スケートと云った。

ケ、足袋。布(木綿、縹子)革で作る足首から下に履く物。労働用。防寒用。儀礼用あり。大小を文(一文銭を並べて数えたところから足袋の衣の長さを計ったところから)で表した。市販されてはいたが、自家用で縫って履いた。男女共使用。

コ、ボッコ足袋。主として子供用の履物。靴下の前身。殆ど木綿生地。自家で縫って履かせた。

サ、タカジョー。秋田の地下足袋の方言。石狩三地区では昭和十年代までタカジョーと発音する人が多かった。地下足袋、直に土地を踏む足袋の意。丈夫な布と厚いゴム底からなる。主として労働用の足袋。水仕事には不向き。

シ、ゴム長靴。ゴム製の靴。ゴム靴。足の文数によって短長あり。特長、左右に分かれて太股まである長靴。労働用。

胴着、胸まである特長。漁撈用として使用。

○着衣(着る物) 注、着る物Ⅱ東北地方の方言。

○下着。肌着類の作業衣

①漁夫一般。サラシ木綿(注1)の肌着、自家製。明治期から大正年間までメリヤスのシャツ、モモヒキ。晒の褌(下帯ともいう。白晒布、六尺、八尺)または越中褌。

②大宅(おおやけ・親方の意)。(注2)メリンス(薄く柔らかく織った毛織物。スペイン語)のシャツ、メリンスの股引またはコールテン)の股引(中高年の役付き漁夫も履くこともあった。

真冬になるとシャツ、モモヒキの上にコットン(注3)の上下を

履く。昭和期になると冬期間や寒い外仕事の時、ジャケット(注4)やチョッキ(注5)を着るようになった。

注1、サラシ木綿(晒し木綿)。さらして白くした綿布または麻布のことであるが現在では白木綿をいう。

注2、大宅 おおやけ。金持ち。大家。ここでは資本家、大地主、網元、親方。この言い方は青森、秋田、新潟、富山、石川、福井、奈良地方にあり、この地方からの移住者によって伝えられた名詞である。

注3、コットン 英語。綿糸、綿糸、わた、カタン糸。木綿の布で作ったシャツやモモヒキのこと。注、カタン糸Ⅱミシン用の木綿糸のこと。

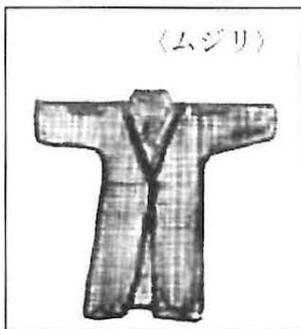
注4、ジャケット。ジャケットの略。英語。毛糸編みの袖の長い上衣の下に着る(一般には上着)もので、チョッキと同じように昭和に入り、毛糸が出廻り自家で編み冬期間に着るようになり、夏でも沖仕事の場合着る。

注5、チョッキ ポルトガル語。洋服の上衣の下に着る短い胴着。袖がなく胸、腹、背を被うもの。昭和初期毛糸が出廻り、労働用にも外出用にも使用した。特に操船(櫓権)をする時、良好な衣類であった。若い衆は明るい色、中高年者はグレー、紺、黒が一般的であった。

○上着

(一) 作業衣

明治、大正期は活動しやすい筒袖や広袖の衣類が主だった。木綿の着長、刺子(注1)ムジリ(注2)ドンザ(注3)ツツレ(注4)サクリ(注5)等名詞の着物が用いられた。冬は二重刺しのムジリ。三地区ではこのうち、刺子、ムジリ、



ドンザの呼称が一般的で、普段はメクラジ（注6）のカナゲサリ（注7）を着た。

昭和期に入ってから若い者を中心に菜葉服（注8）を着るようになった。

大正期の後半からはドンザはあったが、夜寝る時は丹前変りに着た人もいた。継ぎだらけの刺子を着ていた人がいたが、刺子と言っていて、ドンザは辛抱な人（儉約家）が着るものだと思っていた。

掘神威の曳場（鮭の地引網場）で、「津軽から働きに来ている若い衆が継ぎだらけのドンザを着て稼いでいる。お前も辛抱してドンザを着て稼げ。」と母親に言われたと古老は語っていた。

注1、刺子。「刺子ちづれ」ともいう。綿布地を重ね合せて一面に一針抜きに細く縫った着物。丈夫であるところから今日でも消防服、柔道、剣道衣などに用いられている。細かく縫っているので水を通しにくく、水仕事をする漁師の着物として良好であった。全国一円の呼び名である。

注2、ムジリ。ムジリテツポの略。筒袖（袂がなく全体が筒形に仕立てた袖のついた着物。つっぽともいう。）の仕事着で、手仕事に便利。青森、秋田、岩手、福島（相馬）地方からの来着者によって普及された労働着である。

注3、ドンザ。「ドンジャ」とも発音する。木綿地（多く紺地）の布を重ね細く刺してから仕立てあげた着物。刺子の一種。丈夫なので漁場の作業衣として多く用いられた。破れると小布をあて継ぎをして何年も使え、少し位の水も通さない位丈夫な着物となっていた。

へ坐れば立つよなドンザ着て

石狩浜中ぶーらぶら

後から掛け取りやホーイホーイ

と言う囃子言葉まで流布した。

ドンザ（ドンジャ）は青森、秋田、山形、岩手、福島、佐渡、宮城、北陸地方の仕事衣で、この地方から移住者によって普及された労働着であった。

注4、ツツレ。チジレ、ツツレ（綴）、サシコチジレのこと。サクリや木綿衣を丈夫にしかも水を通さないように細く刺した着物。ハンチヤのものも多い。単に刺子ともいう。

ツツレの解説としては、長着で袖なしの刺子という。青森（津軽）地方からの移入で、松前や松山、爾志（乙部）周辺で流行した刺子だが、石狩、厚田浜では羽織用のものをハンチヤと呼称した。

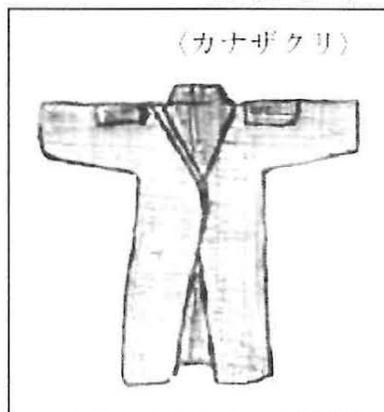
注5、サクリ。さつくり（裂織）

の転訛した名詞。木綿などのほろ布を細く裂き、これを緯に麻糸や綿糸を経糸にして分厚い布で作った労働着。石狩三地区ではこのような労働着は総べてドンザ（ドンヂヤ）と呼んでいた。

注6、メクラジ。盲地（盲縞）縦糸横糸ともに紺染にした綿糸で織った木綿平織物。足袋の表や法被（はつぴ）などに用いる。青縞、紺無地。

注7、カナゲサリ。丈夫なところが金鎖（鉄のくさり）からの異名か。厚地の紺木綿地で作った筒袖の着物。日本海西海岸の漁場に多かった。沖仕事より日常着ることが多かった。

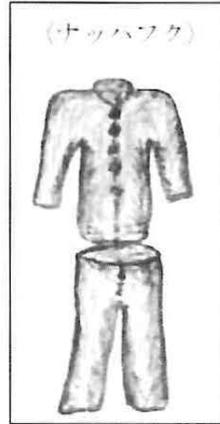
注8、菜葉服。木綿地の紺色労働服。和服（着物）から活動の便利になった西洋風の労働服。今日のジーンズ（綾織の綿布。仕事着などになっている服。英語）用の日常着にも着用。昭和初期に出廻り菜の葉の色



に似ているところから付けられた名詞。老年者より若者に多く着用された。

これらの他に寒い時、また沖仕事の時、着るハンチャまた作業衣の上に着る衣類としてはチャンチャンコとテッポウというのがある。

ハンチャはハンチャコともいい木綿地で作り袖なしの袴纏。袖がないので手仕事は容易。青森、秋田（鹿角）ではハンチャ。岩手ではハンチャコという。石狩三地区ではその県の出身者は夫々呼称するが、大方はハンチャと云うのが主流だった。チャンチャン。チャンチャンともいい漁場で着る袖なしの作業着。袖がないので活動に便利。生地は木綿で男物は紺、グレーのものが多く、花模様のももあった。この着物も青森、岩手地方からの来道した人々によって普及したものである。



この様にして着物の上に、また中に三尺帯や紐で締め、普段は帆船掛け等で立ち動くが沖に出る時は外した。秋も深まり寒くなつて来ると赤ケット（毛布、ブランケットの略。英語）のハンチャやフランネル（紡毛糸で荒く織った織物。やわらかい。ネルのこと）で作つて着た。煙草を吸う人は胴乱（注1）を腰に刺し、持ち歩いてた。この格好はこの頃の若い衆の粹な姿であった。

昭和十（一九三五）年頃でも中高年の男は腰に下げ、天気の良い日は磯舟の上で一服だと言つて胴乱の莢から煙管を出して刻み煙草を詰め吸つていた。男の甲斐性（けなげな気質）として懐かしい光景であった。

注1、胴乱。煙草入れ。革または布張りで作った方形の袋で葉、印、煙草、銭などを入れて腰に下げる。織物、羅紗製のものもあった。もとは銃丸を入れる袋という。煙草の葉を細く刻んだものを刻み煙草といいキ

セルに詰めて吸う。みのり等の銘柄があった。昭和十年代後半物資不足の頃、虎杖（イタドリ）や蓬（ヨモギ）の葉を摘み、乾燥させて吸つていた。

(2) 外出着

(ア) 下着。(肌着。) 肌襦袢。

メリヤスのシャツ、モモヒキ、木綿の下帯（褌）か越中褌（親方、船頭）。昭和に入つてから繊維品が出廻るようになってからは一般漁夫も着るようになった。

(イ) 上着、着物。

大島（注1）または縺子（注2）か木綿の一重物（注3）夏はカシリ（カスリ）の浴衣（主に白地に藍の柄を染めたもの）に三尺の帯をしめる。上に綴（絹糸で織つたもの）または木綿の羽織。頭は無帽が多いが、夏はカンカン帽（かたく造られた麦わら帽）かタカシャツポ（注4）。履物は縺子または木綿の一重の足袋。冬は裏付きもの。木綿の足袋は自家で女子衆が夜なべで、底は白地の木綿を刺して縫つて履いた。余裕のある家では羽二重（注5）の足袋（八幡町堀江呉服店、田岡呉服店。親船町（まるごいち）中島呉服店、（かくに）長野呉服店、厚田村栗谷呉服店、和泉呉服店、早川呉服店）を買い求めて履いた。

外出は下駄（余裕のある人は桐下駄）冬は雪下駄、雨降り足駄、冬は深靴や爪皮（下駄）を履いた。石狩本町地区は吹雪、雪が深いので爪皮は正月以外履く人は少なく深靴が主だった。

ゴム長靴が出廻つてからデンプン靴（ゴム長靴の俗称）が殆どだった。デンプン靴はゴムが粗雑なので破れるのが早く昭和十年代の修理は親船町靴修理屋の（ダキヤマニ）佐々木榎太郎方が修繕待ち程するほど繁盛していた。

注1、大島。大島紬の略。鹿児島県大島で生産される紬。手工で紡いだ糸を土産のティーチキと称する植物の煮出した液を泥中の鉄塩とで褐色

に染めて、かすりに織った絹織物。模造品に対して本場大島ともいう。

注2、縹子(どんす)。布面は滑らかで光沢がある。本絹を使用した本縹子。絹、綿交織の綿縹子、綿毛交織の毛縹子、また種々の浮模様を織り出した紋縹子など種類が多い。

注3、一重物(ひとえもの)。裏をつけない一種の着物。初夏から初秋にかけて着る。

注4、タカシャツポ。山高帽子のこと。シャツポはフランス語。つばのついた帽子、多くはラシャ製。石狩本町地区や厚田本村ではタカシャツポと呼んでいた。現在のソフト、中折帽子(フェルト製)。山高帽子はフロックコート、モーニングコートなど礼装の時に用いるてっぺんが円く高い帽子。色は礼装用として黒。乗馬、散歩用としてネズミ色または茶色である。浜では中折帽子を勘違いして被っていたのではないか。

注5、羽二重。絹織物の一種。上質の絹糸で織り、練った純白のもの。つやがあり膚ざわりがよい織物。

○雨具など。マント類。

外出時、古くは一般はケラ(蓑)(注1)、勤め人や役人はマント類(トンビ(注2)、カラス(注3))。布地は羅紗(注4)で、浜では親方や船頭衆が着用した。

一般漁夫は夏は一重の浴衣や一重のムジリに三尺帯をしめ、無帽か三角、または手拭いで頬かぶり、履物は下駄か草履。冬は二重のムジリに深靴を履いて出歩く。夏雨の日はカラカサ(番傘)で外出。ゴム製品が出廻るようになってからは冬は殆どゴム長靴だった。

注1、ケラ・蓑。茅または菅などの茎葉を編んで作った雨具。その末が乱髪のように垂れる。また藁、棕櫚などで造ったもの。ケラ、蓑の東北地方の呼び名。青森、秋田、岩手、山形(庄内)、宮城地方からの来道者によって普及された雨具の名称である。

注2、トンビ。マントの俗名。トンビ(鳶)の羽に似ているところから名

付く。袖の広い長い外套。鳶合羽とも呼んだ。

注3、カラス。マントの俗名。カラスの羽のように黒く似ているところから男用の二重マントで冬期間のもの。

注4、羅紗(ラシャ)。羊毛織物の一種。ポルトガル語。羊毛を収縮させて地は厚く密にして更にけばだつもの。今は毛織物全般のことをいう。

○女子衆

○頭、顔、頬

仕事の場合無帽の時が多いが、日本手拭かタオルで頬かぶり、また木綿かメリンスで裏地を付けた風呂敷状に縫ったものを三角に折って被った。通称「三角」または「三角帽」と呼んだ。表手地は紺、黒、濃紫。裏地は薄紫か海老茶色が主体だった。

冬はこの三角の外にネル製の三角。外出時は夏は無帽か日の照る時は頬被りかメリンスの三角。冬は御高祖頭巾(注1)を被る。何れも前述呉服店(屋)から相応の生地を買い求めて自家で縫って被ったが、御高祖頭巾は市販されたものもあった。

注1、御高祖頭巾。(おこそずきん)普通は形状が日蓮の像の頭巾に似ているからというが、形状からおこそ頭巾にも似ているところからという説や大明の高祖に係る説もあるという。四角な切地に紐をつけたもの。目の部分だけ出し、頭部、顔部を包む。主に婦人が防寒用に用いる。おこそ頭巾は、おこそ(草屑・カラムシの屑)で造った頭巾。山岡頭巾ともいう。八丈絹やピロッド、藪(いぐさ科の多年草。湿地に自生。畳表になる)でも作った。

○手

普段の仕事は素手が多い。練場の沖揚げ後の陸仕事(練抜き、練潰し、練割き等々)七、八割方女子衆の仕事。その時は手がけ(注1)、つかみこて(注2)手首(注3)、それに腕貫き(注4)などを嵌め作業した。

冬は木綿生地で作った綿入れテックイシ、子供は小型のテックイシに紐をつけ首から下げて嵌めた。これらは統べて、その家の女子衆が呉服店からそれぞれの生地を買って来て夜べで手首など刺し、縫って嵌めた。外出時は昭和期に入ってから毛糸が出廻り一般家庭でも手編みの手袋を作り嵌めた。

注1、手掛け。男子衆の項で解説してあるが、木綿生地を裁断して二重刺しにして作る手袋。軍手は大正末期頃に出廻った。だが石狩浜や厚田浜では刺した手掛けは手に合って嵌きよく、特に鍊抜きなど水仕事では手首を紐で結ぶようになっていて固定され脱げることなく作業が出来た。

注2、掴み小手。単に「こて」ともいう。「手甲」ともいう。木綿生地（紺色が主）を裁断して二重刺しにして指の第二関節まで出して作った指なしの手袋。陸仕事のこまめに手を動かすのに便利だった。

注3、手首。首サック用の作り。白木綿生地を指の太きと長きに裁断して細く先端から刺し筒を作り、親指、人指指、中指にはめ、端に紐一本をつけその紐を手首に固定する。指サックのこと。「ニシン潰す」作業用の指袋（サック）。ニシンの笹目（えら）、内臓を取り出すため考案されたもの。長時間、手掛けや軍手では手が疲れ能率があがらない。潰す人の指に合わせて作っていた。

注4、腕貫。主として紺木綿生地を腕の長さに裁断し筒状にして縫い上げる。作業する時腕や袖口がよごれないようにするもの。市販のものもあったが、自家製のものは屋外労働専用のもので、端に紐をつけ首から下げ、下がらないように作った。

この四種は統べて自家製で漁閑期の冬場一月二十日正月から三月上旬まで、石狩本町地区から厚田村の鍊場、出漁する漁家（二十二軒）以外でも作成するのが慣わしとなっていた。厚田村や浜益村の漁家で鍊場に来る人々の「ニシン潰し」用の手首（指サック）など何人分をも作っ

て春を待っていたものである。

参考

洗剤のない時代の汚れ落とし。木炭灰。

ニシン場仕事での汚れはゴタジル（注）など当時の洗剤では良く落ちない。むかしから伝えられている木炭による洗い落としが最も良好と、刺子やドンザまで洗われていた。四斗樽に木炭を多量（多い時は五分一位）に入れ、水を八分目位張攪拌し、その上水で洗うと汚れは落ちる。ドンザやムジリなど汚れついたゴタジルも二、三日この水に潤すと汚れは綺麗に落ちた。物のない時代の洗濯水（剤）であった。

注、ゴタジルはゴタは塵芥。汚い塵芥汁のこと。

○下着

仕事する時は木綿生地の自家製の襦袢（注1）、昭和期に入るとメリヤスの肌着（シャツ）とモモヒキ下は木綿の腰巻（注2）、冬はネルまたはメリンスのものを締める。脛には木綿の脚絆をはく。外室時はメリンスや木綿の襦袢、メリンスのシャツかモモヒキ、脛にはメリンスの脚絆をはいて外室した。

注1、襦袢。ジバンとも発音する。ポルトガル語。和服の下に着る肌着。

注2、腰巻。御腰ともいう。主に白色、赤色、橙色等で木綿地の他、メリンス、ネル、羽二重などがあり殆ど自家製であったが、市販8羽二重（注）のものもあった。

参考

腰巻の火事払い。魔除け（火を悪魔とする）。

火災の時、隣家の類焼を防ぐため。今まで締めていた腰巻をはずして竿に結び、屋根上にかざして火を払う。火はこのことによつてその家に移らないという。

（筆者九才昭和九年六月ころ、厚田村字小谷村（吹田家）で発生し

た火災のとき隣家（花田家など）一、二軒が屋根上に赤い腰巻を立てているの目撃した。各家は風上であり難を免れた。吹田家は母家と雑倉が全焼。我が家は風上隣家であったため類焼せず。

○上着

(1) 仕事着は長着（ほとんど木綿生地で自家製）刺子、カシリ（紺紺注1）、ムジリ、テッポウ。ミズカ（注2）などを着て、木綿の三尺帯や手製の紐を締め、また手作り前垂れ（花模様）時に帆前掛け（注3）をして作業した。

また流し場に立つときは姉妹被り（注4）でタスキ掛けで立ち動いた。

注1、カスリ、紺。所々かすったように模様を織り出した織物または染模様。模様染め出したものを染め紺、模様を織ったものを織紺という。主として紺紺（紺地に白いかすりのある織物）であった。久留米紺などの木綿物。

注2、ミジカ。海岸方言。木綿生地のみぎまでの短い綿入れ。チャンチャンコより丈が長いもので冬期間の仕事着。男女共着る。

注3、帆前掛け。天竺木綿で作った前掛け。外見して帆に似ているところからの名詞である。大店や却店、漁網漁具店等で宣伝を兼ね贈答用に作った前掛け。天竺木綿は、もとはインドから輸入したところから天竺木綿という。金巾（きんちやく）よりやや厚手の白生地木綿織物で敷布、足袋地の裏地などとなっている。石狩本町地区では昭和十年代独航船（北千島鮭鱒流網漁漁船）の贈答用の大漁旗に多く使われていた。金巾はポルトガル語。堅くよった綿糸で目を堅く細く薄地に織った綿布。金布とも呼称する。広幅金布。（反物の普通より広い幅。約七五センチ大巾物のこと。鯨尺約二尺。

注4、姉妹被り。女の手拭のかぶり方。手拭を中央前頂にあて、左右の端を角立てて後にまわし、その一端を頂上に折り返すだけ、またはその

すみを額のところにはさむ。ねいさんかぶりともいう。

○外室着（上着のうち）

縮緬の肌着や襦袢を着る。上衣は紺紺またはメリンス、大島、御召縮緬（注1）ウール等の生地を自家で仕立てて（高級生地は仕立屋）着た。一般家庭の女子衆は木綿生地の着物が主で縮緬など大宅（網元）や勤め人の家族の外出着であった。

モンペ（注2）は大正時代からモモヒキの変形で着物の上からはくようになったが、ブルマ（注3）、パンツなどは昭和十（一九三五）年以降の普及であった。

和服の仕立ては専門の営業する人（和裁仕立業）もいたが、若い女子は和裁修得、嫁入り仕度として習熟するため漁閑期の一月、三月和裁教室や女子青年学校に通い習っていた。

当時、嫁入道具としては三種の神器（裁板・まな板のこおと）、張板（注4）、衾台（注5）と俗称される輿入れ道具があった。漁家の家でも洗張りなども行なわれていた。

注1、御召縮緬。単に御召ともいう。もと貴人（地位、身分の高い人）が着用したことからのという。縮緬の一種。練染（毛先を練った上で染めること。またそのもの。）の絹糸を材料として織り上げたもの。微温湯（ぬるま湯）に入れて「しほ」（しわ）を立てる。縞、無地、紋、錦紗などがある。

注2、モンペ。モッペ、モンペエともいう。袴の形をした足首のくくれている股引。保温用または労働用に使用。雪袴ともいう。特に昭和十年代（太平洋戦争等）全国の女性の間に着物を解きモンペを作って外出着にはいた。活動的な履物だった。

注3、ブルマ。ブルーマーの略。英語。婦人、子供の着。腰から膝までのパンツ。アメリカ人のブルーマー夫人の考案した下着。

注4、張板。和服を洗濯する際に使う板。和服の洗濯は縫い目をほどこいて

ばらばらにして洗う。洗い終わった布をこの板に貼り付けて乾かす。
(洗い張り) 乾いた後に再び縫い直した。

注5、桁台(くけだい)。裁縫用具。衣服などを仕立てる際、そのものたるまなまいよう、その一端を糸で釣っておくための台。掛台ともいう。

○足

かわじろ(注1)裏の紐付き足袋。夏はほとんど素足。冬は木綿の布二枚を重ねて底は細かく刺した自家製の足袋を大人も小人も履いた。

脛には木綿地もあつたがメリンスの薄紺、エビ茶、桃色、薄茶色など、若い者程明るい色のケハン(脚絆)を当て、夏は下駄(上流は桐、普通は柳材)か草履。(厚田で藁草履が多かつた)冬は爪皮の下駄(齒に金の滑り止)。雪路は深沓(注2)を履いた。昭和に入つてからゴム製の長靴が出廻つたが、戦争たけなわとなりゴムが特需(特別な方面の需要)となり粗雑な誰言うとなないデンブン靴(注3)と名付いたゴム長靴を履いた。子供達も夏は素足に下駄、草履(藁製)や女の子はガッパ(注4)、冬は深沓からデンブン靴だつた。

注1、かわじろ。かわじろの訛。河内木綿のこと。河内国(大阪府の北、中、南河内三部)に産する白木綿織。普通のより地厚く女帯の芯、暖簾、足袋裏などに用いられた織物。

注2、深沓。藁製の長沓。冬、雪の中を歩くのに用いた。雪沓とも云つた。主に日本海沿岸地方に多く履かれた。ゴム長靴が出廻り廃れた。

注3、デンブン靴。澱粉靴。ゴム長靴の異名。ゴム長靴にデンブンのような白い粉がついたように見えるのでこの名がついた。昭和二十年代前後、物のない時代配給になり履いたが、ゴムが粗材でひびわれ破れ水もれ激しい履物だつた。

注4、ガッパ。ほつくりのこと。木で造つた履物。女児用の下駄。台の底をえぐり後側を円くし前部のめりにしたもの。多くは黒または朱の漆

を塗っていた。青森、秋田、宮城地方ではほつくりと呼称し、宮城の石巻地方では氷滑り用の履物をガッパと言っていた。石狩本町地区では女児用はガッパ。氷滑りや雪すべりは下駄に金具をつけて「下駄スケート」と呼んでいた。

○用具防寒用具など

仕事着では通常刺子やムジリなどの上にチャンチャンコを着るが、ハンチヤを着ることもあつた。雨の日はボイルカッパ(注1)を着た。

(1) 外出時、夏は厚刺しの刺子または唐傘(注2)。冬は角巻(注3)を羽織る。子供をおんぶしたときに着る亀の子(注4)やネンネコ(注5)などがあつた。

注1、ボイルガッパ。強くよりのかかつた糸で粗く平織にした薄地の織物。夏の婦人、子供服やシャツに使用。この布地に荏油(エゴマ油)を塗つて雨具にした。

注2、唐傘。石狩三地区では番傘。紙張りの実用的(粗末)の雨傘。

注3、角巻。東北地方の女性の防寒具。婦人用の防寒用、四角い毛布のふちに房のついたもの。黒、紺、茶色が一般的で若い女子衆ほど明るい色のものを羽織つた。

東北地方から移住者によって普及した防寒用具。

注4、亀の子。子供を背負う時防寒のため羽織る絆纏。通称、亀の子絆纏。木綿またはメリンスの花模様(男の子は五月人形、船、金太郎、桃太郎など)の生地で綿入れ状に左右袖なく紐をつけ亀の子の形に仕立てる。亀の子の由来、亀の甲に似ているところからの形容名。

注5、ネンネコ。ネンネコ絆纏の略。木綿またはメリンスの花模様などの生地で綿入れ幼児の着物状に仕立てたもの。赤ん坊を背負つた時、防寒のため着の絆纏。幼児語のネンネの転訛名。

おわりに

種々往時（明治中期～昭和初期）の石狩湾三地区漁場を中心とした労働着などを記述して来たところである。本町地区は知られているとおり鮭で始まり練で開けた街。

漁場に携わった人々の多くは東北地方（津軽衆南部衆）を初め新潟を中心とする越中衆、越後衆であった。

従って衣食住もこの地方の習俗や方言も混在して定着した。衣を見るに刺子ひとつ取っても出身地の呼び名が使われて来た。

本稿にあつて多くの先達研究者によつて紹介されているところであるが、体験し着用した作業着など記憶のまま記述したまでのもの。内容に相違するところがあればご叱責ください。ご指導ご鞭撻下されれば幸甚です。

齢九十、手稲の自宅にて。

話者

吉岡 ヒデ	大正四年生	弁天町
吉田 ミヨ	明治三〇年生	横町
吉岡 タカ	明治三八年生	弁天町
真田 サダ	大正一〇年生	横町
鈴木 ナミ	大正一二年生	弁天町
広厚政次郎	明治二二年生	厚田村厚田
米田 ソヨ	明治一三年生	厚田村別狩
伊藤 予代	明治一六年生	厚田村別狩
有田 ヨネ	明治二〇年生	厚田村別狩
伊藤 寅松	明治二四年生	厚田村別狩
伊藤 ナミ	大正一一年生	厚田村別狩
萩原 朝雄	明治三八年生	浜益村茂生 (現浜益)
坂口 正美	大正二年生	浜益村尻苗

飛内 正一 明治二八年生 浜益村尻苗
中村甚三郎 明治四一年生 浜益村濃昼
仲野 繁雄 大正一三年生 浜益村尻苗

参考文献

広辞苑
水産百科事典 一九七二 海文社
北海道郷土史辞典 一九六五 渡辺茂
北海道方言辞典 一九八三 石垣福雄
国語辞典 第二版 一九九五 岩波書店
古事ことわざ慣用句辞典 二〇〇〇 三省堂
山菜実用図鑑 一九九一 山岸喬ほか
新日本植物図鑑 一九八六 北陸社
北海道日本海漁場漁具事典 二〇〇三 吉岡玉吉

石狩市八幡町の古老が語る二つの空襲体験

三島 照子

藤井コヨさんは、戦前東京に働きに行っていた時に一九四五年三月一〇日の東京大空襲にあい負傷された後、傷がなかなか治らず、石狩町の実家に帰ってきて療養していました。その療養中の七月一五日に石狩空襲に遭いました。

その体験について石狩市民図書館で行われている「石狩の古老の話を聞く会」でお話をして下さいとお願ひしたところ了承して下さいました。ご本人も「二度の空襲の話を誰かに話しておきたい。何かの形で残したい」と思っていたそうです。

図書館でお話を聞いた後も度々お話を聞くためにお伺いしました。なにしろ体験されたのは七十数年前のことですし、話をしていくに連れ、いろいろなことが思い出されるらしく話が前に行ったり後になったりします。ご本人の思い違いもあるかもしれませんが、私の聞き違いもあるかもしれません。しかし、これはその時間き取った記録です。

私は石狩町立尋常高等小学校を卒業（一三歳）した後、石狩警察署の給仕をしていました。そこで二年間働いていました。警察署は大変忙しかったです。そのうちに東京の縁戚で看護婦養成所の寮をやっている人がいて、その人が「女の子の働き手がほしい」と、石狩まで迎えに来たのがきっかけで警察を辞めて東京に出ました。

その頃は、女の子は学校を出るとみんな農家や水産加工場などに働きにでていたものです。父親が「うちは女の子がたくさんいるので一人くらい出てもいいべや」と東京に出してくれました。

東京では、看護婦養成所の寮の下働きや奥さんの手伝いをしていました。しばらくして東京の生活に慣れた頃に、看護婦学校に入れてく

れました。神田の三崎町にあったので浅草から電車に乗って通っていました。その電車で、偶然にも石狩の本町の林さんに会った事がありました。海軍さんでとても立派でした。

看護婦養成所の寮は、浅草観音寺がある象潟さむかたにありました。象潟三丁目通りはとても人通りの多いところでしたし、大きな置屋もありました。その頃はもう時々アメリカの空襲もありました。

看護学校は六カ月でしたが、卒業するまでは仕事が忙しかったので一年くらいかかりました。看護婦養成所の寮をしていた人は、渡辺（渡辺正美）という人で、渡辺さんとは私の父親と同じ秋田県の出身で親戚つきあいをしていました。奥さんは、さよさんといって札幌出身で、浜益出身の蛭名さんとは札幌での知り合いでした。

渡辺さんは浅草区役所の偉い人だったので、人の出入りが多かったです。札幌からはもう一人働きに来ていました。時には宮様などが箱根の宮ノ下の温泉にいったときなど二三日手伝いに駆り出されたりしたこともありました。

東京に「はまなす会」という会があり、渡辺さんも入っていて、そこで浜益出身で早稲田大学の近くの早稲田の森というところで産婦人科の病院を経営している蛭名かつあきという人が、渡辺さんに「女の子を貸してくれ」と言われ、私が行くことになりました。

蛭名さんの病院のある所は早稲田の学生が下駄を履いてがらんがらんいわせて沢山歩いていたところでした。奥さんも浜益の毘砂別から来ていて、浜益弁丸出してよく働く奥さんでした。お嬢さんが二人、息子さん一人いました。

先生は学生の頃、わらじを履いて浜益の毘砂別を山越えて石狩に出て大学に通っていたそうです。わたしが石狩から来たと言うと懐かしいといって、わたしのことを「イシカリ」「イシカリ」と呼んで可愛がってくれました。浜益から食べ物を送ってくると、「イシカリ、浜益か

ら荷物が来たから来い」といつて先に食べさせてくれたものです。その頃は空襲警報がありました。まだ空爆はありませんでした。あきこさんというお嬢さんともう一人お嬢さんがいて袂をふりふりよく働いていました。病院は入院患者も居て食事の用意等で大変忙しかつたです。

息子さんは結核になっていて、自分の家で療養していました。奥さんの弟さんが海軍で戦死しました。前の日にお別れをして乗船した船が沈没して戦死しました。

姥名さんとは空襲で別れ別れとなってしまいました。石狩に帰ってからはいつか浜益にいつて姥名さんの親戚に会いたいと思つていますが、実現しませんでした。

三月一〇日の東京大空襲の時には、私は浅草の寮にいました。空襲になったときには友達五人と雷門で落ち合おうと約束したのに三人は亡くなって二人だけ生き残りました。生き残ったのは私と山梨県の人なのにどうしても名前も住所も思い出せません。いくら考えても思い出せない。もう死ぬまで思い出せないと思います。

ちょうどその時寮の責任者は札幌の円山に親戚が居たので、疎開の荷物を持って行つていませんでした。大空襲の時、若夫婦が荷車に年寄り和孩子二人を積んで引つ張つて逃げていたが、道がふさがれて逃げるところがなく、後ろから逃げてきた人達が「車どけろ、どけろ」と言つているのに子供と親を助けたい為どけることができないうし、荷車に火がついているのに。荷車に乗つている親にも子供にも火が付いて焼けているのに。引つ張つている若夫婦はわかんないんだよね。

わたしも履いていた靴が焼けて火傷をしていたんだけど、自分の靴はぬいで道路脇でなくなった人の靴をはぎ取つて履いたの。そうしなければ自分の足が燃えちゃうんだもの。そういうこともあつたし、言つ

たら言い尽くせないことばかりで、よく生き延びたと思います。

雷門で別れた友達の中で、川に入つて死んでた友達の名前は覚えていません。何でかという、胸に名札を付けていたから。なんで川に入るかという、どんどん上から爆弾が落ちてきて焼かれ、熱いから川に入ると冷たいと思つたけど、墨田川の水は煮立っている。そこにみんな入つた。墨田川は死人の山になっていました。

私は空襲が始まった時は、近くの学校のプールに逃げました。でも、プールにも人が次から次に来て入りきれない。足に火傷をしていたので、何かないかと周りを見ると、チヨロチヨロ水が流れているのが見えたので、何か手当をするものがないかと思つたけどなにもないし、防空頭巾を歯で切り、綿をむしつて出してその水を浸し足の熱い所に浸した。友達にも周りの人にも水を浸し助けた。そこは象潟警察署があつた近くでした。

その上プールの柱みたいな物が頭に落ちてきて頭が割れるほどの怪我をしました。友達もわたしも血だらけになって、二、三日たった頃救護班の人達が死体をかき分け、かき分け来てくれた。変な話亡くなつた人たちは丸焼けになっていました。

私は衣類が焼けずに残つていて、誰かが私と友達を死体の山に入れる時に、私が動いたのか救護班の人が「ああ、生きてる、生きてる」と言つて二人とも生きてる山に移されました。生死の境目つてあんなことを言うんだね。それで助かりました。

死んだ人は積み重ね、生きてる人は会館みたいところへ運ばれたと思います。二日ぐらいしてから治療班が入つたと思う。その時は何日なのかなんのかわかりませんでした。物を食べたのは何日もたつてからだし。水を呑んだのも何日もたつてからだと思う。一番最初に水を飲まされました。

ともかく二人は離れませんでした。助かったのは二人だけ。友達の名前は絶対忘れないと思ったのに、いま、いくら考えても思い出せない。

でも、もう一人の友達の住所はおぼえていた。それは山梨県南巨摩郡で、親が学校の先生で子供が何人もいるので一人くらい出してやろうというので東京に来ていました。身元がわかったので親がすぐ引き取りにきていました。胸に付けていた名札でわかったのです。

治療班が来て治療してもらいましたが、油で焼けているのでなかなか皮が張りませんでした。怪我の治療でリヤカー乗って行くんだけど、何日も何日も遺体がありました。私の傷は、ジリジリ焼けて言うのか皮がパキパキしてなかなか治らなかった。数ヶ月して石狩に連れて貰って帰って来ましたが、傷が乾いてきませんでした。空襲にあつてからは、寮をやっていた渡辺さんの軍需工場が向島にあつて焼け残っていて、そこにしばらくいました。

東京から帰るときは、大森に住んでいた母方の姉である大森のおばさんのところに暫く居て、その伯母と一緒に石狩町に帰ってきました。石狩病院の鈴木だるま先生（鈴木信三院長）にみてもらいました。だるま先生は「よく助かったなあ」と言ってくれました。

石狩に帰って来たのはもう石狩が暖かくなつてからだった。帰つて来てからは病院にかかりながら大滝さんのところで運針を習っていました。大滝さんはやまたまさん（ヤマタマ印村田商店）の隣の豆腐屋さんでそこで裁縫を教えていました。石狩では畑も作っていたし、父親が漁師で魚を獲つて来ていたし食料には不自由しなかった。

そして七月一五日の石狩空襲にいました。あの日は東京のいとこ



が札幌で盲腸の手術を受け、石狩で静養していました。いとこと弟が小学校に遊びに行っていたときに空襲に会い、二人で家に逃げて帰ろうとして能量寺のところから道路に出て来た時、中央バスが寺の鐘撞堂まで来ていました。そのバスの蔭に隠れて家に帰ろうとしていました。私は家のそばの電柱の蔭に隠れて見ていました。

子供達が「撃たれる、撃たれる」と思ったけど出て行けなかった。出ていったら私も撃たれるから。戦闘機が爆弾を落としたが爆弾は能量寺の横にあった林に落ちていました。バスの乗客は 爆弾で怪我をしたが子供達は無事だった。怪我をしたバスの乗客を私の家族と隣の家族が私の家の防空壕に運びました。防空壕は七、八人入れる広さがあつたし、入

れていた物をのけて怪我人をいれました。他に能量寺の境内に運ばれた人もいました。怪我をした人は札幌に連れて行かれた人もいたし、石狩病院で手当を受けた人もいました。

後で分かったんだけど、望来農協の人もいました。戦後、望来農協の人は私を嫁にもらいに来たけど「農家はできない」と断りました。

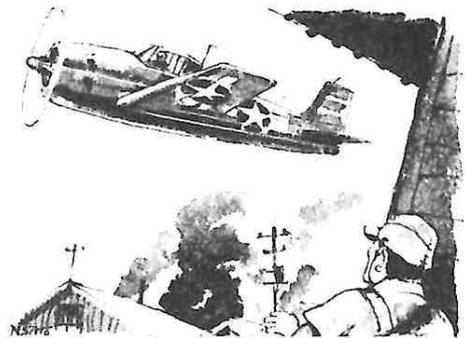
望来農協の人は、村で集めた献金を三人で輸送中だった。その献金がバスの廻りに飛び散っていて、近所の人が集めて農協の人に渡したって言っていました。

救助班が来るのを待っていたが一時間たっても来なくて、海の方を見たら真っ黒くなっていて火の手があっていました。横町の方がやられていて、空には二機の戦闘機がグルグル廻っていたので動くことができませんでした。

戦闘機は低空で飛んでいたの、パイロットの飛行帽の眼鏡まで見えました。それも震えながら見たのです。

川にも爆弾が落とされていました。石狩川には石油を通す鉄管の塔がありました。それに爆弾を落していました。「ジャボン、ジャボン」という音がものすごかった。何しろちょっと大きかった物はみんなやられたんだから。

それからが大変でした。また空襲があるんだと、年寄り子供は山林に隠しました。夕方になるとリヤカーに食料や毛布を積んで山に行きました。治水（事務所）の方や川測の柏林に子供や年寄りを隠し



たのです。大人は家で見張っていました。三、四日続いたけどもう大丈夫ということでおかしく帰りました。

今から考えるとおかしいけれど、隠れるときに母が枕も持って行くかとか聞いてきたので、わたしは「そうだね」と言ったらしく後々まで「枕を持っていったほうが良い」と言っていたと言われました。

玉音放送は自分の家のラジオで聞きました。近所の人も集まってきて雑音の多い何言っているのか分からない放送を、東京から来ていたいとこも一緒に聞いて説明してくれたのです。天皇陛下は日本軍が負けたと言っていると聞いても、そんなわけはないと近所の人はいよっぱって聞かなかった。いとこが言葉を通じないから後でゆっくり言うとか分かんと思うよと、後で説明してくれて近所の人には納得した。

泣く人もいれば怒る人もいた。「今まで出した物はどこへやった」と言っていた人もいました。

いまでも心残りなのは、浅草で隣に住んでいた若い奥さんと子供二人のことです。空襲の時奥さんに「一人でもいいので一緒に連れて行って欲しい」と言われたけど、断ってしまっただ。くるくるした目で可愛い子だった。いまでもその目が自分の背中にくっついていてるようで未だに忘れられない。今考えると一人でも連れて逃げていけばと思った。自分でも助からなかったのにね。他人の子供を連れてこれなかった。後で何とかならなかったかと今でも時々思います。

話者・藤井コヨ（大正一三・一九二四年九月五日生まれ）

東京大空襲

昭和二〇年三月一〇日の午前零時から二時四〇分ころまで、三三七機のB29が東京下町に地域に焼夷弾（ナバーム弾）三三三万発を投下した。

被害

死亡 八万三、七九三人

負傷者 四万九一八人

被災者 一〇〇万八〇〇五人

被災家屋 二六万八三五八戸

イラストは『石狩の空襲を語り継ぐ』（石狩町郷土研究会一九八七）から佐藤信明氏によるものを使用させていただきました。

〈追記〉

郷土研究会元会長の山口福司さんが亡くなられました。山口さんは市民図書館でよくお会いしましたが、いつも笑顔で握手してください、「いつも頑張ってるね」とおっしゃられ、わたしに元気をくれました。もうお会いできないなんて寂しいです。ご冥福をお祈り致します。

弁財船入港でにぎわう明治の厚田の情景を新設道の駅に

ジオラマ模型製作の構想

石黒 隆一 (www.aikaze.net)

一 厚田村史に記された古潭の情景

厚田村史(昭和44年 厚田村)に、弁財船入港でにぎわう古潭の情景が記されている。

「弁財船が日本海を盛んに往復したいわゆる全盛期は、徳川中期から明治中期なのであるが、本村には大正初期ごろまで、来航していたらしい。蝦夷地・北海道へ移入したものは、味噌・米・醤油・塩・酒・麴・茶・煙草・呉服太物・綿・紙・蠟燭・石油(明治期)・金属器・漆器・ムシロ・ナワ・ロープ・魚網などであった。これらの生活必需品を積んだ船が入港するのを、この村の人達は、いわゆる宝船が入ってくるように待ちわびたことであろう。古潭の渡辺与之助氏によれば、古潭の押琴湾は深いので、弁財船がともづけ(艫付け)し、こどもたちは喜んで、はしゃぎ回ったという。(中略)こちらから弁財船に積み込んだ荷物は、鯨粕・身欠鯨・胴鯨・開鯨・干鮭・塩鮭・昆布・煎海鼠(イリコ)などである。」

二 日本海と私のかかわり

この情景が描写された厚田村古潭に、私は平成2年まで2年間、中学校社会科の教員として勤務した。閉校の記念誌編集を担当し、地域の歴史を調査した際に、お年寄から弁財船入港の喜びを直接お聞きした経験がある。

その後、平成13年から3年間、合併の時期をはさみ、厚田村立と石狩市立の厚田中学校に教頭として勤務した。厚田村最終の年に、弁財船による交易で結びつきがあった石川県門前町(現在は合併により輪島市)を、子ども親善大使派遣事業の事務局長として訪問させていた



↑厚田に新設される道の駅の完成予想図

いた。

だった。事前学習として、子ども達とともに、厚田にやってきた弁財船の航跡を探ることができた。

石狩湾に面した学校には3校勤務した。校長として浜益小学校に勤務した際に、鯨場の様子を伝える白鳥番屋を中心としたジオラマを、地元の人形作家八田美津さんと共同で制作することができた。

このような経験から、日本海、鯨漁、弁財船について、ライフワークとして調べたいと願い、石狩市郷土研究会に入会させていた

三 新設道の駅にジオラマ制作

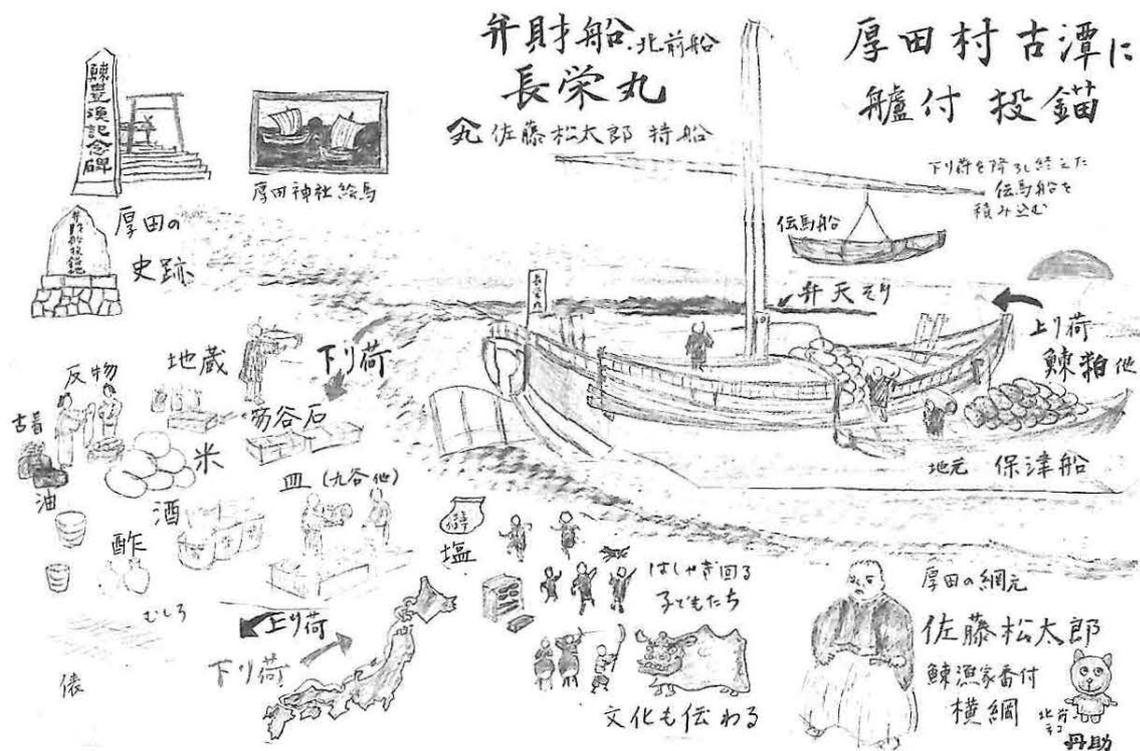
平成30年春オープン予定で、石狩市厚田区の国道231号線に『道の駅(仮称) あったか・あいろーど』が建設されることになった。

施設内には地場産品の販売・飲食コーナーのほか、周辺地域の歴史・文化・自然などを紹介する情報コーナーが配置される。その情報コーナーの一角に、「北前船と鯨漁」というジオラマ模型を人形作家八田美津さんとの合作で制作させていただくことになった。

ジオラマ模型の基本的な構想は、冒頭に紹介した港の賑わいと「宝船を待ちわびた」という人々の喜びを表現することである。八田美津さんの表情豊かな人形と、つれあい石黒美香子の色彩感あふれる小物を組み合わせる最高の条件がそろっている。

四 道の駅ジオラマの制約

一方、制約は多い。一つは展示スペースである。歴史スペースはすでに展示内容とおよその配置が決まっているため、弁財船とたくさん



↑厚田村史に記された情景をまとめた構想図。これをもとに細長い展示スペースに船、人形、小物を配置



↑石狩市はまます郷土資料館に展示しているジオラマ模型。人形が楽しい

五 ジオラマ制作の機会をいた
だいた背景
浜益小学校に勤務した平成24
年度に、石狩市は、はまます郷
土資料館のリニューアルを計画
した。それまでに、子どもたち
の「沖揚げ音頭」を指導するた

が、そのほとんどは、実際の船を作った船大工が船主に贈った物であり、それが神社に奉納されたり、さらに博物館に移されたりして現在に至っている。船大工の秘伝を伝承していない者が、曲面だらけの弁財船を製作することが可能なのかという問題である。
様々な制約があるといっても、お世話になった厚田に新設される道の駅に、作品を展示できる機会をいただいたことは望外の喜びである。全力で、作品作りに取り組んでいきたい。

の種類の下り荷と上り荷を置くには制約があるが、広大なスペースがあると、作るものが増えすぎて対応しきれなくなるので、ちょうど使いやすい広さと割り切って構想を考えることにする。
次は時間の不足である。道の駅オーブンは平成30年春。作品の搬入は3月いっぱいの子供の予定である。資料の調査や文書の読み込みもしたいが、実際には展示作品の制作に追われることになりそうだ。しかも、制作が本業ではないので、費やすことができる時間は限られている。
さらに、技術的な問題がある。全国に弁財船の模型が保存されているが、そのほとんどは、実際の船を作った船大工が船主に贈った物であり、それが神社に奉納されたり、さらに博物館に移されたりして現在に至っている。船大工の秘伝を伝承していない者が、曲面だらけの弁財船を製作することが可能なのかという問題である。

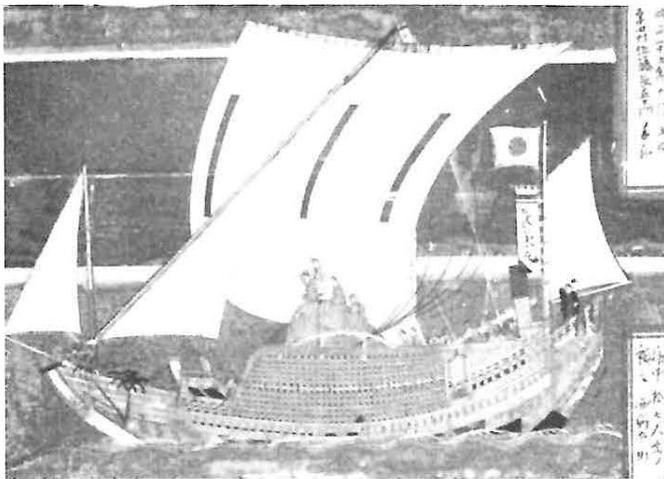


↑地下歩行空間で展示。手前から八田さん、私、石黒美香子

めに、かつての鯨漁について聞き取り他かなりの研究をしていたので、文化財課の課長から声をかけていただき、リニューアルにかかわらせていただいた。その際に、郷土資料館（旧白鳥番屋）の改修時に使った詳細な図面を見せていただき、番屋の模型を制作することになった。番屋内部を見ることができるようになって、八田美津さんの人形と合わせた楽しい作品が完成した。

岡市長さんは、石狩市ホームページ「市長の部屋／市長からのメッセージ（平成24年7月31日）」で、次のように紹介してくださった。

「浜益在住の人形作家八田美津さんと浜益小学校校長石黒隆一さんの訪問を受けました。旧白鳥番屋（市指定文化財）の20分の1の模型と、往時のニシン番屋の生活を人形で再現した、素晴らしい作品です。校長先生の奥様もミニサイズの調度品や家具を制作した3人による合作とのこと。浜益の女性たちで地域起こしのために開いた、レストラン「カフェ・ガル」の中に展示するそうです。これから更に外回りや、船などの制作を進めるとのこと。地域の子どもたちの学習に役立てる取り組みや、地域の宝を発信する取り組みが地域の誇りとなり、ポジティブ思考を生み出す起爆剤となります。」



↑長栄丸船絵馬。後期北前船の特徴と洋船の影響が見られる

この年は、建物本体まで作って時間切れになってしまったが、その後、周辺の地形や建物、船や鯨加工の道具類などを作り続け、平成27年になって、最初の予定通り、沖揚げから加工まで鯨場の情景を完成させることができた。

ジオラマとなったこの模型は、展示場所を郷土資料館に移し、子どもたちが学習する教材としても役立てることができた。

28年1月に、このジオラマ模型を、札幌の地下歩行空間に展示して、多くの方に注目していただく機会を持つことができた。会場にお越しくださった田岡市長さんから、あたたかなねぎらいの言葉をいただいた。

その際に、「……………地域にこういう魅力ある作品を作る方がいるのだから、知恵を絞ってお願いして、そういう力を道の駅に反映できるように……………」と、道の駅にかかわる市職員の皆さんにアドバイスをされている市長さんの声がそれとなく聞こえてきた。

六 展示作品の構想

When (いつ)

ここまでは「弁財船」という厚田の伝統的な呼び名を使ってきた。広義の「弁財船」は、江戸中期から明治期まで一般的なだった和船の総称である。

厚田で言う狭義の「弁財船」は、買い積み船として日本海を北上してきた船であり、本来上方方面の呼び名であった「北前船」が、現在は一般的な名称として定着している。ここからは、「北前船」という名称を中心に使っていく。

「北前船」が、石狩湾で活躍した時代を考えると、場所請負制終焉後の江戸時代後期から、明治期さらに大正までが範囲になる。

後述する佐藤松太郎を登場させると、時代はさらに明治25年から大正7年に絞られる。

Where (どこで)

ジオラマの舞台は、冒頭で紹介した古潭の押琴湾にしたい。厚田村史には次のような記述がある。「厚田の豊川氏によると、安瀬（やそすけ）のサキ漁場には山丸佐藤氏の漁場があつて、ここでは弁財は沖に錨を下ろし（沖がかり）という）伝馬船で荷揚げ、荷積みをしていたということである。」

古潭の押琴湾には弁天そりという沖に突き出した2本の岩礁があり、天然の防波堤の役割を果たしていた。現在の古潭港の防波堤はこの岩礁の上に築かれており、神社のあたりから今も海中に見ることが出来る。古潭は、手宮以北初めて現れる北前船が停泊可能な港であり、厚田の運上屋は古潭に置かれていた。冒頭に示した厚田村史の記述のように、「艫付け」といって、船尾ではあるが、船を陸地に着岸することができた。

一方、厚田や安瀬の場合は、「沖がかり」で岸との間は伝馬船を利用していた。

限られた展示場所に作るジオラマでは、船と岸が離れ、その間に海が広がる配置は効率的ではない。密度感のある演出のために、艫付けができた古潭をジオラマの舞台に設定することにする。

Who (誰が) Why (なぜ)

厚田で北前船というと、山丸佐藤松太郎がすぐに連想される。松太

郎は石狩から厚田、浜益の沿岸に99ヶ所あつた漁場のほとんどを所有する大網元で、当時の「ニシン漁家列伝」（長者番付）では横綱とされている。漁場で得られた利益を海運業にも投資し、明治25（1892）年頃からは石川県の寺谷家と共同で北前船経営に関わった。明治40年からは、北海道議会議員に選ばれている。

What (何を) How (どのように)

何を表現するかというと、到着した北前船である。せっかくなので、架空の船ではなく、佐藤松太郎が寺谷家と共同経営で運行していた「長栄丸」を再現したいと考えた。幸い、明治25年に奉納された長栄丸の船絵馬が、石川県加賀市橋立の出水神社に残されており、その写真は厚田村史で見ることが出来る。ジオラマとしては、長栄丸だけでなく、降ろされた下り荷と積み込まれる上り荷、人々の様子を表現したい。

船から降ろし終わつた下り荷は陸地に配置する。下り荷の種類は、厚田村史で紹介されている佐藤松太郎家文書や石狩町誌上巻357ページ以降に記載された「庚午年・石狩郡諸調」等、詳細な地域資料があるので、産地なども含め、根拠のある表現を心掛けたい。さらに、伝馬船も表現したい。荷の積み下ろしのために、北前船は自前で小船を積んできていた。古潭は艫付けしかなかったため、側舷にある荷物の積み下ろし場所である伝馬込みと岸の間では伝馬船が活躍していたことが想定される。

伝馬船の積み下ろしは補桁をクレーンのように扱い、轆轤で上下させていた。下り荷を降ろし終えた伝馬船を船に積み込むようすを表現することにした。

もう一つ、地元の漁船である保津船を配置しようと考えた。1俵で90kgにもなつたという上り荷の鯨粕を厚田や浜益から運んでくる手段は、陸路が整備されていない当時は船しかなかった。沈みそうになるほどの鯨粕を積んだ保津船の写真が残っているので、その雰囲気を感じ、ジオラマの中に表現してみようと考えた。このように考えて描いたのが、

はじめの方に示した構想図である。

道の駅には、観光の拠点として、厚田まで来ていただいたお客さんの足を、さらに北に向ける役割が期待されている。鯨漁場の繁栄を紹介するために、白鳥番屋のカットモデルを作って展示する予定である。実物と鯨加工の様子を30km北上して見てみたいと思っていたら、いろいろな工夫が課題である。合わせて、濃昼のカネシメ木村番屋の外形模型も制作、紹介する準備を進めている。

七 制作に当たっての調査

今回のジオラマ模型の成否は、北前船をどこまで正確に表現できるかにかかっている。

はまます郷土資料館の白鳥番屋模型は、実物そのものと改修時の建築図面があったために、正確に制作することができた。しかし、北前船の資料はまったくといっていいほど不足していた。

北前船は、松前藩の税金徴収の過酷さを逃れるため、時代と共に変則的な形態に変化していた。18世紀後期以降は、絵馬や写真を一見して、一般的な弁財船と見分けることができるほどの外見的特徴を持つにいたった。

松前藩は、船の大きさを表す石高について、一般の基準とは異なり、荷済みをしたまま測る方法を用い、帆柱と交差する位置にある「腰当船梁の幅」、甲板に見える「梁の間隔」、「側舷の深さ」を元に計算して課税した。このため、課税の基準となる帆柱の部分を狭くし、前方を極端に幅広とし、前後のそりが極端な「どんぐり」と通称される形態を持つにいたった。当然、航行速度などは犠牲となった。

一般的な弁財船は、少ないながらも側面図・平面図共に公開された資料があり、書籍等から入手できた。一方、北前船の資料は不十分で、平面図を入手することができなかった。(後からフランス海軍軍人による調査図面の存在を知った)

北前船の側面図と、一般的な弁財船から推定で変形させた平面図を元に、設計図を作図してみたが、いびつさが残り納得できる図面にはならなかった。

いったん制作を開始すると、相当な時間と労力を要することは明らかであり、しかも完成後の修正は不可能である。また、道の駅に展示していただく以上、多くの方の目に触れることになる。中途半端な模型は作りたくないという気持ちが強まってきた。

八 最高の北前船資料は佐渡の白山丸

北前船の平均寿命はおよそ20年といわれており、当時の実船は残っていない。実物大の復元船が、資料として最良であろうと考えた。

実物大の復元船は、これまでに全国で4艘制作されている。そのうち、大阪の時空の記念館にある「なにわ丸」は、種別が違う菱垣廻船であり、北前船の参考にはならない。また、時空の記念館自体が閉鎖されており、調査は不可能だった。



↑佐渡市で復元された白山丸

航行可能な復元船として注目されていた。しかし、みちのく北方漁船博物館が閉館した後、所有者が変わり、新たな展示方法を模索する中で、船体の老朽化が明らかになり、解体されてしまった。

気仙沼市の「気仙丸」は、東日本大震災の津波を洋上で乗り切り、



↑大切に保存展示されている白山丸。佐渡市立博物館館長の高藤さんに詳しく説明していただく。内部構造も調査。下は白山丸復元の鍵となった幸栄丸の板図

奇跡の船として注目を集めた。しかし、震災からの復興の中で、保存と活用が未確定な状態にある。

4艘のうち、唯一完全な状態で保存、公開されている実物大の復元船は、佐渡市宿根木にある佐渡国小木民俗博物館にある「白山丸」である。

次のような理由から、白山丸が最善の資料であると考えた。

・「白山丸」は、地元宿根木の白山神社と、宿根木で最初に建造された千石船・白山丸から名前をとっている。復元に当たっては、宿根木で発見された多くの板図の中で正確な側面図・平面図と、細部の特色がわかる船絵馬が共に残る「幸栄丸」を資料としている。

・「幸栄丸」は、建造年が安政5年（1858）であり、船主が加賀屋市三郎、石高512石積というように由来が明らか。

・「どんぐり型の船型」や「垣立の足洗い」など後期北前船の典型的

な特色を有している。

・総監修者を和船研究の第一人者 石井謙治氏に依頼して、正確な考証と再現が行われた。

・施行管理を日本財団と連携して海事に実績を持つ「EMN研究所」が担当。部材ごとの使用木材などの資料が公開されている。

・実際の施行は、4艘の復元船全てにかかわった「気仙船匠会」。棟梁は新沼留之進氏。

・恒久的な保存を目指し、陸上で屋内保存されている。

・情熱と熱意あふれる地元「白山丸友の会」の活動。

・友の会による書籍「時代に帆を揚げて」と、制作記録等の動画「千石船 白山丸」の存在。

公開されている写真などを見て、細部まで非常に正確であること、工法も可能な限り当時の通り再現されていることがわかった。

九 佐渡での調査

「白山丸に会うために佐渡に行きたい」という想いが募ってきた。11月下旬に日程の空白があったため、旅行計画を立てた。出発までの日程の余裕が少なすぎたので、一般見学者の立場でもやむを得ないと思っていたが、市文化財課工藤課長のはからいで、佐渡市教育委員会の協力をいただくことが可能になった。新潟空港からジェットフォイルに乗り継ぎ佐渡に入り、レンタカーを使って、佐渡国小木民俗博物館に到着した。

博物館に隣接した展示館では、佐渡市立博物館館長の高藤一郎平さんが待っていてくださった。高藤さんは、宿根木出身で、白山丸建造に、当時小木町立だった佐渡国小木民俗博物館の学芸員としてきわめて深くかかわった方である。平成の大合併で、全島の10市町村が佐渡市になった後に市立博物館に異動し、現職に就かれています。

白山丸と北前船全般にかかわって、熱い情熱をお持ちで、話題が尽きない方である。昼食をはさんで午後まで、説明をしていただいた。北前船の構造や工夫から、佐渡が北前船の重要な拠点となった背景としての地形的、地理的な特色や宗教にまで話題が及び、摩崖石仏が残される岩屋遺跡なども案内していただいた。

また、白山丸友の会の石塚会長さんともじっくりとお話をさせていただく時間があり、白山丸復元の「言いだしっぺ」としての想いをお聞きすることができた。

何よりありがたかったのは、白山丸の元となった幸栄丸の板図の赤外線写真データをいただくことができたことだ。側面図だけでなく平面図を鮮明に見ることができた。

2日目は、写真を細部も含め、500枚以上心ゆくまで撮影した。また、デジタル機器を駆使して、寸法や角度を計測し記録することもできた。

佐渡では、北前船時代の人々の姿が思い描けるような貴重な体験をさせていただいた。

十 図面の書き直し

板図データ、写真と実測寸法をもとにCADソフトで、図面を引きなおした。シート数で約60枚、おそらく100時間程度はかかっている。どの角度から見ても、納得のいく形になった。

図面から部材表も書き出した。部材数は215点になった。左右で複数の部材も多いので、総数は500程度になる予定。エクセルの表なので、材種と厚み順にソートして、同じ素材から部品を切り出していく。

十一 材料の調達

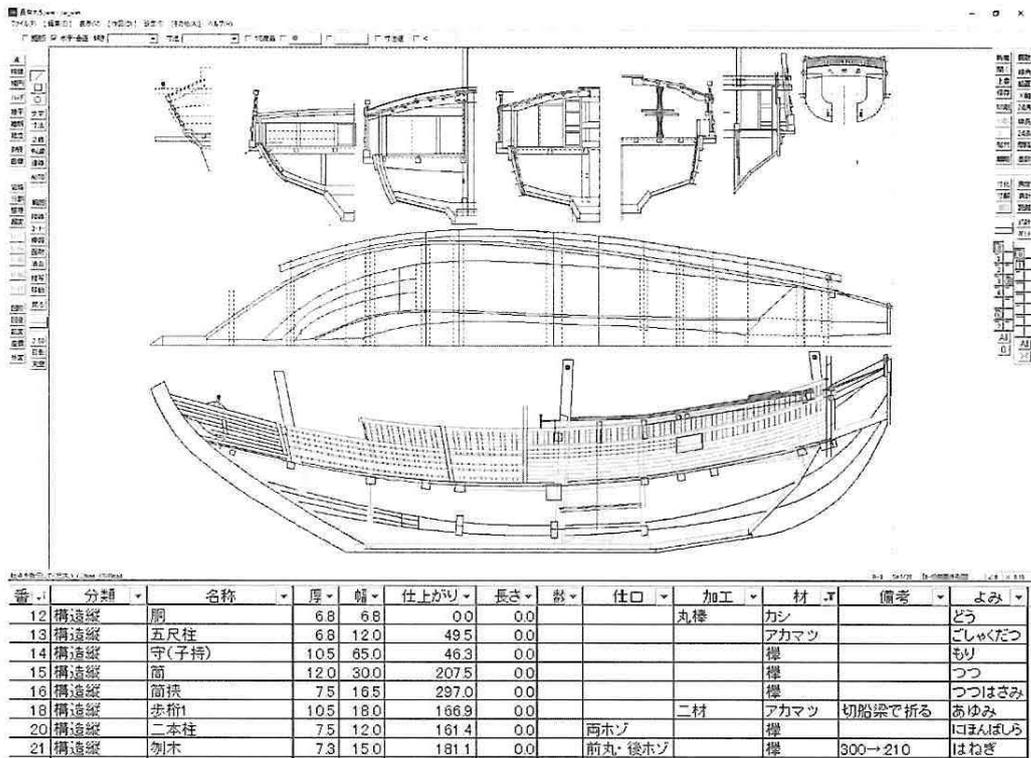
各部の部品はできるだけ実際と同じ木材を使用することにした。白山丸の部材ごとの樹種は、友の会発行の「時代に帆をあげて」で紹介されている。北陸の一般的な成材と同様である。

① 樺

強度を要する部分と外観を美しく見せたい部分には、樺が使われていた。水押、船梁、台、化粧板、寄掛、ちりなどである。20分の1の模型であまりはつきりした板目を見せると不自然なので、正目材を用いた。寄掛だけは、板目を見せたいので、細かな板目が見える別材を用意した。模型でも精度と強度が出るので、樺は非常に使いやすい。なお、瀬戸内の造船では、これらの部分に楠が使われている。

② 松

船の土台といえる航（船底材）には、松の大幅が使われた白山丸の実船では、厚み8寸（24cm）、幅5尺（1.5m）、長さ40尺（17m）で、3材を合わせて使用した。松を使う理由は油脂を豊富に含んで水に強いことだった。佐渡を含め北陸で造船に使われた松はアカマツだった。



↑ 図面と部材表の一部。ほぼ全ての部材に固有の名称がある。材質が実船と同じになるように設計した

代用品を使うのを避けると、意外に入手が難しかったが、苦勞して入手したアカマツは、脂の乗った美しい材だった。この他、根柵、戸立、歩桁、筒、守と、一部の船梁にも松が使われる。

③ 杉

船の外板である中柵、上柵やはぎづけには、杉が使われていた。外板は曲げ加工に適した材料であることが実船、模型共に重要であり、マゲワツパの素材となる杉が適している。佐渡の杉は入手できず、秋田杉の美しい正目材を入手した。この他、帆柱と帆桁、甲板に当たる矢倉板の素材も杉である。

④ 檜 樫

垣立には檜、舵の身木と轆轤には、樫が使われていた。

十二 制作の実際

正月休みから制作を始めた。私は材料を大きなまま入手し、帯ノコで挽き割ってから、手押しカンナ盤、自動カンナ盤で、厚みを調整していく。厚みが4mm以下になると割れることが多いので、自動送りのやすり・ドラムサンダーを使用する。厚みを決めてから、幅と長さを切り出していく。

板を曲げるには自作の蒸し釜を使う。微妙な曲げ木には、バイオリンの側板加工用のベンディングアイロンを使用する。

写真上は、工房の内部である。手狭ではあるが、ほぼ全てといって差し支えない木工機械がそろっている。どのような加工にも対応できる。基本的に10分の1mmの制度を出すことが可能である。

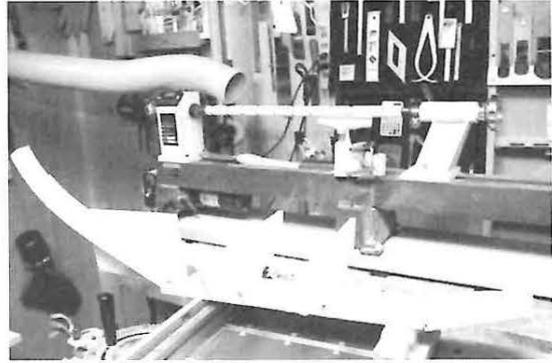
写真下は製作中の様子である。赤松で作った航という土台に、樺の水押を取り付け、さらに、実船同様に曲げ加工を施した加敷を取り付け、下船梁を加えて、船の基本ができた。

十三 調査の続き

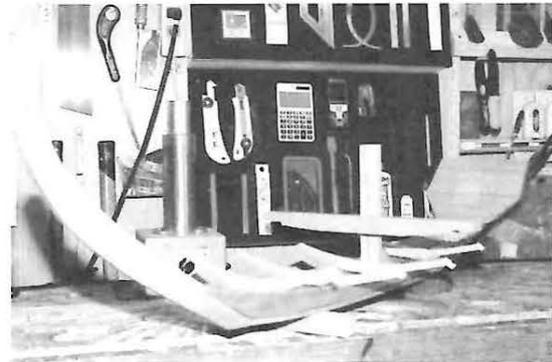
2017年1月にフランスを旅行した際に、パリの国立海洋博物館を見学することができた。19世紀末にこの博物館の館長を勤めたF・E・パリスは、海軍中将として退役するまでに3度の世界一周を経験した。日本でも多くの船を調査しているが、その一艘として1869年に函館で実測した「北の船」の図面を残している。驚いたのは、図面だけでなく、その調査にもとづいた北前船の模型が残されていたことである。パリスの図面とそれにもとづく模型には、海事の専門家ではなくては気づくことがなかったであろう、北前船の特色が見られる。模型の仕上げで、適切に表現していきたい。

十四 これからの課題

厚田では道の駅の工事が着々と進んでいる。実はそのすぐそばで、大規模な工事が計画されている。厚田区内の学校を統合して、小中一



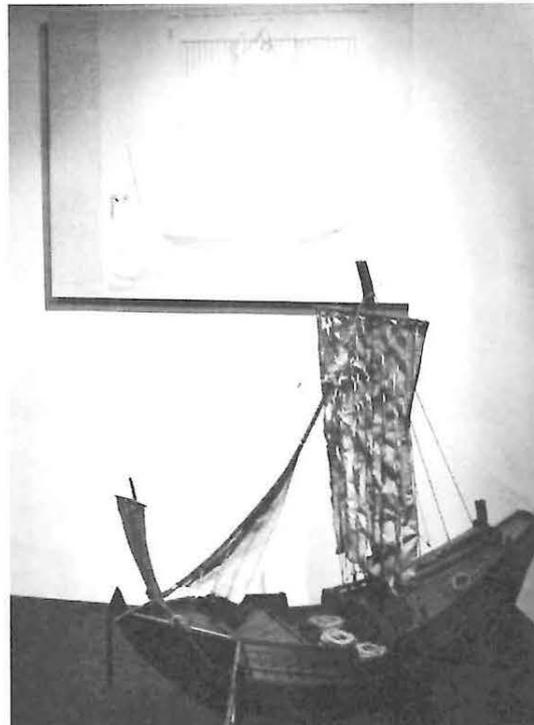
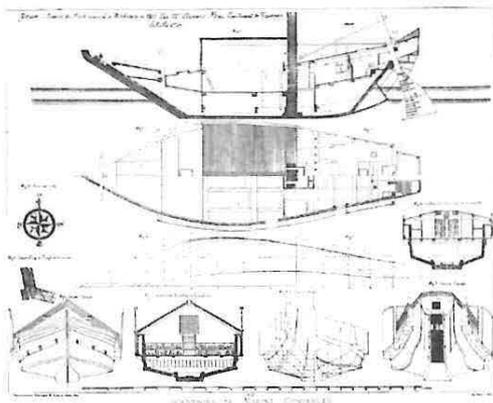
↑6畳間に配置した木工機械。防音と集塵を重視している



↑製作中の北前船。実船と同じ作りで船大工の知恵を学ぶ



←F.E. パリス
↓ヨーロッパ伝統の立体的な図法で描かれた図面



↑フランス海洋博物館の図面と模型。模型には図面ほどの正確さがないが、ディテールに注目すべき特徴

貫の義務教育学校を平成32年に開校し、同時に新校舎を建設する計画である。現在、準備委員会が新しい学校の構想を協議している。私は現在教育委員会に勤務して、この学校の開設準備にかかわっている。

厚田は長い歴史の中で、地域と結びついた教育を進めてきた。その一例が、石川県門前町との交流だった。新設校におけるふるさと教育として、北前船のジオラマ模型を活用することや、最新の通信手段等を使って姉妹都市輪島市の子ども達との交流を復活させることを、学校や関係者と協議して実現したい。

北前船による地域繁栄の歴史が、厚田の子ども達の郷土愛として未来につながることを願いながら、当面は地道な手作業を進めていく予定である。

(詳しい情報は www.aikaze.net で)

撮影紀行『河口の町・石狩』

坂東 忠明

石狩町と再会の日

二〇一六年（平成二八年）九月十八日、私は石狩市郷土研究会の石黒隆一さんの案内で石狩市の両岸を訪ねることができた。札幌に住んでいながら石狩市から遠ざかっていた。私の石狩市、いや石狩町は昭和五十五年末、職に就いて札幌を離れて以来である。その後道内を転勤する身となり、生活が一変した。これを一つの区切りとしていたからである。だから本稿では、あえて「石狩町」とさせていただきたい。

一九九七年（平成九年）には札幌勤務とはなったが、二〇〇七年（平成十九年）、美唄市で退職を迎えて札幌に居を構えた。しかし石狩町に行くことはなかった。なぜかと言えば、すでに石狩町は浜益村、厚田村と合併し石狩市となり役場庁舎も花川に移転しており、たぶん、私が訪ねたあの石狩町の姿はなく、その変貌ぶりを目にしたくなかったからである。

でもこうして再び石狩町を訪ねる機会をつくっていたのだいた石黒さんのご配慮には感謝し、私自身の来し方を振り返り、当時の石狩町を回顧するには十分な時間を過ごすことができた。

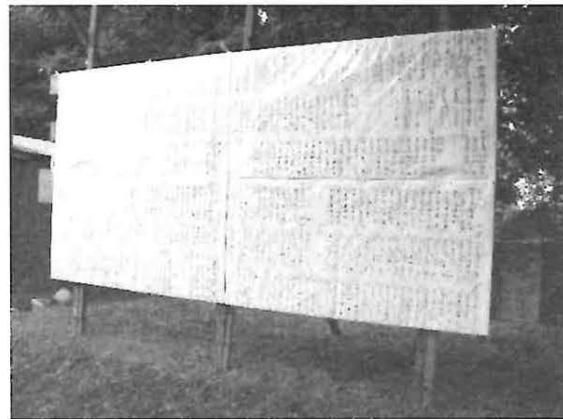
石狩川の右岸の八幡町を廻り、石狩河口橋を渡って石狩町に入った。この日、幸運にも石狩八幡神社の例大祭の日だった。町内を練り歩く神輿も終わり静かな境内に例祭寄付者一覧表が掲示されていた。カメラのファインダーにすっぽり収まった。掲示板が小さくなった（写真1）。一九七九年（昭和五十四年）の時にはファインダーに収まらなかった。三十六年間のあいだに寄付者も減ってしまったのだろうか。これが最初の驚きだった。町のお祭りを担う人達が不足し、祭りの主役でもある子供たちのにぎやかな声さえも聞こえてこない。そんな印象を受けた。



2 築堤から望む石狩川（2016年9月）

例大祭の日ではあったが、だれもいない河岸を見渡し、私には寂寥感の漂う光景に言葉はなかった。ひとつの築堤がすっかり石狩町を変えてしまったのだ。

次に渡船場に通じる街角、旧中島商店や柳食堂、塩原旅館などの見える親船通りに立った。道路は拡張され両側には新しい住宅が並んでいる（写真3）。



1 例祭寄付者一覧（2016年9月）

あの時には未完成の築堤に立った。河岸はすっきりと整備され、町並みを見下ろすほどの高い築堤が出来上がっていた（写真2）。

渡船場の待合所のあった場所も分らない。築堤は石狩川と町並みを壁のように分断し、河畔と町並みの混然とした一体感が失われていた。私は、石狩町行きのバス終点に降り立つと、まず河岸に向い、網を繕う漁師や漁から戻った船を迎えて一声掛ける。必ず誰かが河岸の船着き場にはいた。ここが私の撮影のはじまりの場所としていた。



3 旧石狩町親船通り (2016年9月)

軒を並べているわけではなく、むしろ空地が目立つ本通りだった。町の装いが今の時代に合わせて変化するのはどの町でも同じだが、どこかに以前の賑わいの痕跡はないか探すものだ。しかしそれさえ見当たらない。写真の右わきに旧中島商店の土蔵と店舗があったはずだ。この角には赤いポストも立っていたはずだが、それさえ疑わしくなってしまう。

私は、確かにここには石狩の町並みがあったはずだと時間の町並みがあつたはずだと時間を巻き戻してみたが、現実の光景に引き戻されてしまった。これもまた石狩町と納得するしかない。

私はその場から石狩川の方向を振り返った。例の築堤が見えるだけで川の流れる様子を望むことができなかつた。さらに左に目をやると、見覚えのある石蔵がぼつんと立っていた。ここに柳食堂があつて、蔵の出口は店の中にあつた。食堂はすでになく、この石蔵だけが草叢の中に残っていた。柳食堂前に立ってみると、その奥に赤いペンキのトタンに覆われた赤い倉庫が見えた(写真4)。

この赤い倉庫は戦前からあり、この辺りには置屋があつたとか聞いたことがある。そう言われると、色あせた艶めかしい風情を漂わせているような感じを受け、ようやく石狩の町の賑わいを嗅ぎ取ることができた。私は食い入るように町並を歩いた。本庄鉄工所や長野商店は文化財として移築されていた。通り過ぎて気が付かなかつた。



4 柳食堂跡地 (2016年9月)

造船工場や病院も消えていた。鮭を捌く加工場もいくつかあつたはずだ。私が撮つた数々の商店や漁師の住宅も少ない。

消えてしまった形を探すことは無駄なことだと知りつつ、当てもなく歩いた。これが三十六年の月日の流れなのだろう。この変わり様は埋めようにも埋められない。今の私が訪ねてもカメラに映る町並みや人々の生活は見えない。この石狩町におよそ一〇年間通つて撮影してきた私は、どんな魅力を発見したのだろうか。今の石狩町の姿を予測していたかのように、撮影された写真の数々を見て人々は、再び石狩町を忘れることのない町として語ってくれるだろうか。

自転車で石狩町に行つて見よう

私は二十六歳の大学院生だった。研究室の仲間との雑談で石狩に行こう、となった。私たちは北海道と言えば鮭、鮭と言えば鮭の故郷は石狩。どんなところか見てみよう、ということになった。軽い動機だった。一九七三年(昭和四十八年)一〇月一日の日曜日。はじめての石狩町だった。

私は北海道生まれ、二人の友は関東圏の出身。札幌市内から石狩町まで約二十キロ。国道二三一号线、通称「石狩街道」を北上し、茨戸公園、花畔へ入る。茨戸公園の隣にはレジャーランドもあつた。この間、

左側には造成中の広い住宅団地が広がっていた。花畔からさらに北をめぐらした約八キロ先には石狩町がある。札幌市郊外の田園と石狩川の蛇行を見ながら、軽快なサイクリングが楽しめる。自転車は三段切り換えだが、サイクリング用の専用自転車ではなかったが、それほどの行程ではない。

創成川畔の見事なポプラ並木、水郷公園のような茨戸公園、花畔は石狩新港開発も着手されようとしていた。防風海岸林が続く。旧石狩川の茨戸川にはボートが浮かび、ポプラやドロノキが田園風景を飾り、広い大地を走る爽快感に浸ることができる。その先に石狩町が待っている。そんな期待もたちまち破られた。札幌市の郊外に出たあたりから、私たちは思わぬ向かい風の中を走っていた。石狩湾から吹き寄せられる浜風の出迎えを受けて苦戦する羽目になったのだ。秋晴れの絶好の日に浜風に自転車は進まないと思ったのである。

近いと思った石狩町はずいぶんと遠かった。私たちは完成して間もない石狩河口橋の入り口にたどり着いた。さすがに北海道を代表する石狩川に圧倒されたが、河口の方に小さな集落が頭を低めて砂丘に埋もれているようにして兩岸を挟んでいた。石狩灯台も見えたが、どっちが石狩町なのかと思った。

海側にある本町をめぐりて向かった。静かな佇まいの町を抜けて渡船場に着いた。休日を楽しむ人達がいた。今ではここだけという石狩川の渡船に人々が集まっていた。道内の一級河川で渡しが行っているのはこの石狩川と十勝川ではなかったかと記憶しているが、渡船はここだけであった。

渡船「ちどり丸」をバックに石狩町に着いた証の記念撮影(写真5)。浜風は相変わらず強く、石狩川は波立っていた。私たちは渡船に乗ることができなかつた。渡船のある町、それが石狩町の第一印象だった。旅情か果の先に来たような気分させるからだ。

そして河口の奥に小さく紅白の石狩灯台があった。これだけのロケ



5 渡船場に着いた友 (1973年10月)

シヨンで人々を誘う雰囲気
漂っていた。

ここだけの物語がありそう
な気がした。再び札幌に戻る
には平坦な道ではあったが、
体力を消耗するだけの時間し
かなかつた。友人には不評
だった。

なぜ石狩町だったのか

私の石狩はこれで終わらな
かつた。それまで写真を趣味
にしていた私は、撮影のため
に、当時人気の高かつた美瑛
町や小樽へ出かけていた。雪、
ハクチヨウ・タンチヨウ、流

氷など、いわゆる「白物」を撮れば写真コンテストマニユアになるこ
とができた。アマチュア写真界では、北海道らしさを追求める傾向
に私は疑問を抱くようになっていた。

また私は、『写真は記録を追求することに真実がある』と教えられ
ていた。《テーマのない写真は退屈で後に残らない》と語る仲間がい
たからである。私自身、アマチュアでありながらコンテスト入賞をめ
ざすアマチュアの行き過ぎた撮影を批判していた。そんな状況に置か
れていた時に、たまたま石狩町を訪ねたのである。

一見して砂に埋もれ、息をひそめた静かな石狩町。海と川に挟まれ
た、この小さな河口の町が、幻の鯨とともに、鮭の故郷、石狩と呼
ばれてきた所以はどこにあるのだろうかと思つた。北海道の大河、石
狩川の河口に町が形成されてきたのには何か理由があるはずだ。さま

さまざまな想像をしながら、札幌から近くて、誰も気が付かないこの場所を撮影のフィールドにしてみようと考えた。

通い続けた八年

一九七四年（昭和四十九年）の一月。この日が石狩に通い始める最初の日だった。そして私の就職が決まり一九八〇年（昭和五十五年）一〇月末、住み慣れたアパートから苫小牧市へ引っ越した。就職が区切りとなり、石狩町との行き来も終了とした。しかしその後も機会を見つけて時々訪ねており、通算すると一〇年前後、石狩町との関わりを続けたことになる（写真6）。

よく続いたものだと思う。私は大学院生として自分の研究課題を持ち、道内の農山村調査し、その結果を学会や雑誌に報告し、それなりの実績をつくるノルマを自分に課していたから、写真に熱心になるのもほどほどにしなければならなかった。共通点もあった。地域を知る、そこに住む人達の生活や文化、そして歴史に精通すること、自分の感性や好奇心を広げるためには有益だとおもった。石狩にはどんな風景や四季、行事があるのだろうか。

次に石狩の人たちの日常の営みを知りたかった。そして出会った人たちとの会話からこの町の様子を断片的にみる事ができる。こうしたことの繰り返しをしながら町を歩く毎日だった。訪ねるたびに新しい発見や出会いがあった。いきなりカメラを向けるのでなく、一声かけて少しずつ接近し、私は何者であるかを悟ってくれることを期待して近くようにして、少しでも打ち解けようとした。最初、カメラを構える私は、遠慮がちだった。人慣れしないこともあり、「おい、なに写真撮っているんだ」と怒鳴られたこともあった。

ここで怯んではいけないと思って挨拶をして許しを請う場面もあった。私は町の中をぶらぶらと歩くよそ者だった。

最初の年は下見同然の撮影で、冬の一月、春先の三月、秋の九月、



6 船着き場の私（1955年4月）

一〇月、十一月、そして冬の十二月と八回だった。翌年昭和五〇年は七回、昭和五十一年九回と、およそ一〇回に満たない回数である。ところが昭和五十三年に昭和と二十三回も通った。この年三月の渡船廃止があったからである。四年目に入ってようやく町が見えてきた。

昭和五十四年には十五年振りに鮭が戻り、復活の鮭まつりがはじまり、石狩から目が離せないようになった。昭和五十五年、石狩の人口が三万三千人を突破し市制の話題が現実味を帯びてきた。この年、石狩の撮影は一〇回ほどであった。私が石狩から離れる時でもあった。昭和五十六年、私は石狩を再訪し、築堤の完成を見ることになった。息の根を止められた印象を受け、これが最後かなと感じていた。

約八年間で約九十回、札幌と石狩との間を行き来したのではないかとと思う。石狩町はその後石狩湾新港の開港、石狩町は市となり、人口も五万人を突破し、札幌経済圏の重要な都市へと変貌を遂げてきた。私が訪ねた昭和四十八年の石狩の姿から新しい町へと発展し、石狩町の名はなくなった。私は《写真は記録を追求すること》だと言った。私の撮った写真の数々もセピア色の古い記録の箱の中に納まることになってしまった。

町並みを撮り歩く

二人の作家による小説から抜粋した文章を紹介しよう。石狩当別町生まれの作家・本庄睦男は『石狩川』（昭和十四年）で「川はのっそりと最後のうねりを伸ばしていた。見るからにねばりつくような水が、底知れぬ重みをもつて動いていた。その口にあるのが即ちこのイシカリの街」と書いている。石狩川にピタリと寄せ合うように深く沈んでいる町の印象が浮かぶ。

また作家・伊藤整は、『石狩』（昭和十二年）の中で、石狩町の印象を主人公の私に次のように語らせている。「多くの板葺の家々は、川面とすれすれに堤防もなく並んでいた。その背後には低い砂山があり、疲れたもの憂い風景だった」、「水に浮いたように石狩川の河口の両岸に並んでいる黒ずんだ桎梏きの家々も、なお伝統と、私がこの町におしかぶせていた情緒とにふさわしいものであった。手の届かない過去にある町、という感じが失われていなかった」。

石狩の町は砂丘に埋もれ、ひっそりと過去の歴史の中にたたずみ耐えて忍んでいる町なのであろうか。それが却って人々を引きつける場所なのかもしれないと思った。町の本通を歩くと、軒先の切れる街角から石狩川が見える。伊藤整が言う、堤防のない町が洪水の心配もなく、川とともに運命を共にしてきたことを物語っている。

今は冬だが、町並みは砂丘の高さより低く連なっており寄せている。石狩湾から流れ込む風雪を避けて低く身構えていようにも見える（写真7）。雪は荒涼とした浜の雪原を走り、雪は雪を削る。日本海の闇の奥からは風に乗って再び雪を運んでくる。時折、石狩浜では吹雪の中に好んで佇む者を見かけたことがある。石狩町は他の町にはない、消すことのできない寂寞とした独特の風景が昔から残っているのかもしれない。

街角から見えるのは石狩川（写真8）。子供たちは水溜りで遊んでいる。川で遊ぶ子供たちは見たことがなかった。子供たちは川には近



7 雪の中の石狩町（1974年1月）

寄らないことを知っていた。流れは静かだが深い。落ちたら体ごと渦のなかに引っ張られるだろう。それこそ「ねばりつく水」なのだ。

町内のなかでひときわ目立つ建築物が写真9の旧長野商店だった。色あせたパチンコ店の看板が貼り付けられたり、倉庫に代わったりしていたが、漁協の冷凍庫や魚捌き場として一九八四年（昭和五十九年）まで使用されていた。建築されたのが一八九四年（明治二十七年）と分かり市指定の文化財となったのは、二〇数年後のことでこの建物に気を留める者はなく、どのような建物だったのかわかる人はいなかった。忘れ去られた歴史がここにあったのである。旧長野商店は本通りの中に構えた大きな建物である。プラプラ歩いていると気が付いたことがある。一つは小さくまとまったような町なのだが、本町、弁天町、新町、浜町、横町、中町、舟場町、親船町、対岸には若生町、八幡町と区画ごとに立派な町名がつけられていることだ。

8 水溜りで遊ぶ子（1975年6月）

弁天町には蝦夷地十三場所の元締めとして権勢を振るっていた運上屋が





10 本町通り (1979年4月)

小さな町だがあちこちに長い歴史を感じさせる建物や遺構がわずかに残り、「手のとどかない過去にある町」(伊藤藤整)とは、そんなことを言うのかもしれない。



9 旧長野商店前 (1978年12月)

あった。運上屋を中心に町ができたのではないか。二つ目に寺が多いこと。真言宗、曹洞宗、日蓮宗、浄土宗の各宗派がある。石狩町には安政年間に創建された古い寺と明治初期の寺がある。石狩町は藩制時代に開かれ、交易、鮭漁で栄えてきたからだろうか、生活習慣の違い、宗教も異なる人々が入り混じり、運上屋の下で、町の保安や社会秩序を保つ必要があり、それが町の区画や宗教の誘致になったのだろうかと思像した。そのような名残りが引き継がれてきたのだろうか(写真10)。

出会った人々
七、八年も通い続けていると偶然の出会いばかりでなく、求めて会いたい人も現われてくる。歩いているだけではこの町を知ったことにはならない。石狩町を知るキーワードは「鮭」である。「鮭」つながりの方々を探して出会ったのが、一九七五年(昭和五〇年)五月、鮭料理「あいはら」の女将・相原みよさん(七〇歳)だった。ご主人が鯨や鮭の網元だった。また、鮭や鯨などの水産加工場を経営していた長谷川ユキさん(七十六歳)には、一九七八年(昭和五十二年)十二月のお会いした。昭和二十三年頃に建てた燻製製造の貴重な建物が残っていた。お二人からは鮭漁で活気のあった頃のお話をなつかしく聞くことができた。石狩の鮭漁を知る人は少なくなっていた。
漁業で生活する人達の中には、花畔方面に干し魚などを売る行商の女性にも会った。鮭漁に代わる漁業も盛んで、チカ、カレイ、貝、ヤツメウナギなどを採る漁師にも会った。一時期、北洋漁業に出漁する中型漁船の出入りもあり、石狩にはいくつかの造船場があり、船大工として活躍していた方、鯨漁のヤン衆だった方とも会うことができた。また、石狩管内ではこの人だけという鍛冶職人にも会うことができた。私が訪ねた昭和五〇年頃の石狩には、繁栄していた時代を知る人たちと幸運なひと時を過ごすことができた。

私と出会った方々、何人かを紹介しよう。

(1) 石狩鍋料理「あいはら」の女将・相原ミヨさん。

相原さんは石狩浜番外地に大きな一軒家を構えている(写真11)。隣には鮭の番屋が残っていた。網元の前浜は漁場だったからである。町から離れて住んでいる。相原さんの得意は「鮭の寒塩引き」だ。風格のある網元の女将だった。

(2) ヤツメドウを造る婦人とヤツメ漁

秋晴れの暖かい日、川辺でカヤの長さを揃えて切っている女性が見えた。ヤツメを採るドウの原料は山形産のカヤだという。



12 カヤでつくるヤツメドウ (1975年9月)



11 元網元「あいはら」家 (1975年5月)

造る工程は、十分に干したカヤの皮を剥き、丈夫で同じ太さのものを揃えて切断する作業(写真12)で、これを編んで一個のドウをつくるのに一日はかかるという。何百個もつくらないと冬の漁に間に合わないという。ドウは筒状のかごで、直径が七〇センチ、長さ一・四メートルの大きさ(写真13)。これを漕上してきたヤツメをドウの底から誘い込んで採る伝統的漁法だが、川の流れや深さを読んで投げられる経験が必要だという。ヤツメ漁を専門にする漁師を



13 完成したヤツメドウ

(3) 管内で数少ない鍛冶職人

本庄一雄さんは三代目の鍛冶職人である(写真15)。鍛冶場には手動の鞴(ふいご)と燃え上がる石炭の炉があり、自慢の金床はスエーデン製のもの。昭和初期に先代が当時一六〇円で買ったものだという。この金床で農機具や漁具などの製造、修理を支えてきたのだ。北洋漁業の衰退や鮭漁の不漁などで大



14 屋内に干されたヤツメウナギ (1978・12)

紹介してもらった。其田辰雄さん、昭和一〇年生まれで、お会いした昭和五十三年は四十三歳。其田さんは昭和四十二年頃にヤツメ漁をはじめて一〇年ほどになる。約一〇〇個のドウを持ち、年間五千尾ほどの漁だという。ヤツメ漁はほとんどが道外に出荷している。ヤツメウナギを干している自宅を訪ねて驚いた。ぼたぼたとつるしたヤツメウナギから脂がしたり落ちていた(写真14)。厳冬期の川を渡る風は冷たく、油断すると船から落ちる危険もあり厳しい漁だという。



15 鍛冶職人・本庄一雄さん（1976年7月）
 ある日、本庄さんが「開拓記念館の学芸員が来てね、鍛冶屋でこれだけの装備が揃っているのは他になく、工場全体を開拓の村に移してはどうか、という話なんだ」。本庄さんは承諾するようだったが、寂しそうな表情を浮かべていた。



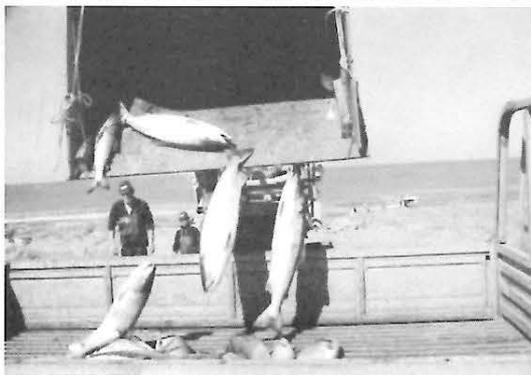
16 渡船「ちどり丸」（1978年2月）

渡船「ちどり丸」の終航と鮭の復活

一九七二年（昭和四十七年）七月、石狩河口橋が完成して車運船の渡船は廃止され、人や車の往来は大きく変わった。渡船「ちどり丸」は残ったが、この「ちどり丸」も一九七八年（昭和五十三年）の三月末に廃止された。私は多くの町民の人達とともに最後の雄姿を見送った。一九七二年（明治五年）の私設渡船場から数えて一〇六年間、河口を往来してきたが、ついにその役割を終えた（写真16）。
 渡船の廃止は、石狩町の長い歴史の最終章を飾る出来事であった。上流からの築堤も町の近くまで迫ってきていた。石狩川は町の人達の

日常生活から切り離されることになったのである。

渡船の廃止で河口周辺はめっきりさびしくなった。ところがその数年から札幌市内を流れる豊平川に鮭が遡上したというニュースが大きな話題となっていた。豊平川の本流は石狩川。石狩川に鮭が戻って来たということだ。一九七九年（昭和五十四年）、復活の石狩鮭まつりがおこなわれまじになり、活気にあふれた、鮭の故郷・石狩の名を再び聞くことになった（写真17）。



17 石狩浜の鮭漁復活（1978年9月）

河口の町から

私に通った約八年は、鮭の故郷・石狩の面影を残す最後の時期だったと思う。石狩新港の開港、町から市制への昇格で町役場は花川へ移転し、河口の町・石狩は積み上げてきた歴史の重みだけを背負い、新しい石狩の礎となっている。

道内各地には十勝川の天津、網走川の網走市、常呂川の常呂町、天塩川の天塩、天の川の上ノ国、静内川の旧静内町、釧路川の釧路市も河口に開けた町や市である。十勝川の天津は十勝内陸の発展の玄関口であり、釧路川は石炭や木材の積出港として、小樽港、室蘭港、函館港と並ぶ良港となった。天塩川の天塩からも多くの木材が道外に移出され発展した。

釧路港を除けばい何れの河口の町は港として恵まれてはいなかった。にもかかわらず早くから開けたのは、河川が背後に肥沃な平野があり、鉄道網や道路が整備されるまで河口の町は北海道開拓を担ってきたからである。その後、北海道全体が発展するとともに、河口の町は忘れ去られてしまった。

これらの河口の町はどのような歴史を重ねてきたのだろうか。あらためて訪ね歩き、北海道の開拓の歴史は河口からはじまったという結論を得ることができた。特に石狩町はその先駆地としてその役割を果たしてきたことを再認識できた。河口の町・石狩は、これからも変わることのない歴史から掘り起こされてさまざまな事実を伝えていくことだろうと思う。

最後になりました、石狩町の多くの方々には本当にお世話になりました。感謝申し上げます。



石狩市郷土研究会活動の記録

(平成十六年度～平成二十七年年度まで)

十年を振り返って

五代目会長 村山 耀一

石狩市郷土研究会は昭和三十五年三月三十日に初代会長花田知也氏はじめ現在顧問の田中實氏(三代会長)や高木憲了氏(四代会長)を含む七十四名の会員により発足しています。発足までの経緯や活動の内容、会員の顔ぶれ、役員名一覧などは、本会が四十五年目を迎えた平成十六年三月三十一日発行した「いしかり暦」十七号を創立45周年記念特集号「柏林」として発行致しております。

あれから十二年、お陰様で会員多少の入れ替わりはあったものも常に三十名を超える会員により活動が継続してまいりました。活動の中心としている月一回の例会は会員の皆様の日頃の研究活動の成果発表の場として、今では四月の総会時には年間月別に発表者の名前が分かるようになっていきます。

会員の中の希望者によるグループ「村山家文書を読む会」では、月一回の勉強会ではありますが、北海道博物館の三浦泰之氏のご協力を得ながら解説とその文書の背景などを研修し十四年目にもなっています。この古文書研修の成果は毎年開催される石狩市民図書館まつりの場でテーマを変えながら市民向けに展示発表をしています。尚、今までで解説された村山家文書はデーターとしてまとめ市民図書館に収蔵し誰もが閲覧できるように作業を進めています。また、調査研究活動として平成十八年二月には「石狩の碑」第三輯、平成二十四年十二月には「石狩の碑」第四輯 厚田区編、平成二十七年十二月には「石狩の碑」第五輯 浜益区編を発行致しました。

今年度から新たに取り組んでいる調査研究活動として、本会に寄贈された地形図類を整理分類しデーター化した上、市民図書館に収納す

る方向で活動が始まりました。同様に石狩市の小・中・高等学校の校歌、廃校、閉校になった学校の校歌の調査活動も同時に始めています。行く行くはまとめて保存していく計画です。

会員の楽しみである七月のバスによる日帰り研修視察旅行もコースを変えて毎年実しています。とくに平成二十七年からは、石狩市の福祉バスの借用により会員のバス代負担がなくなり、とても助かっている次第です。

例年実施している市民文化祭と公民館まつりでは常に高木憲了顧問の了恵寺宝物のなかからテーマを決めて市民に貴重な資料を郷土研究会の名のもとで展示して下さり感謝に耐えません。とくに実質的に展示の準備をして下さっている進藤順子さんにはお礼を申し上げます。

この外郷土研究会ではこの十二年の間に、講演会、特別展示なども実施し市民に提供してまいりました。

本会として喜ぶべき事として、平成二十三年二月二十四日に「平成二十二年度石狩市教育功労賞」を受賞。平成二十三年十月二十二日に「北海道文化財保護協会創立五十周年功労賞」受賞。平成二十五年十月三十一日には、顧問の田中實氏が「北海道文化財保護協会功労賞」を受賞され、本会のこれまでの活動が高く評価されたことに喜びと責任を感じています。

しかし、この間の「いしかり暦」十七号創立45周年記念特集号「柏林」の編集を担当した鈴木トミエさんが、平成二十三年十一月二十二日に六十八歳で亡くなり、本会二代目会長をされた山口福司氏が平成二十八年十一月五日に九十四歳で亡くなりました。お二人とも本会に多大な功績を残していただき、私たちにいろいろとご指導下さったことに感謝をささげ、ご冥福をお祈りしたいと思います。

一、石狩市郷土研究会活動の記録（平成十六年～平成二十七年まで）

■例言

一、本会の活動記録は、結成された昭和三十五年度から平成十五年度までについて、いしかり曆第十七号「柏林」に掲載されている。

一、本稿はこれを補追するもので、項目順や年号などの表記法は「柏林」に従った。

一、活動記録、いしかり曆総目次の編集は、村山耀一が行い、資料提供などで田中實顧問の援助を仰いだ。

平成16年度（平成16年4月14日～平成17年4月 日）

1 例会

5月20日 『北海道日本海漁撈漁具用語辞典』の解説

6月17日 『新潮』（昭和29・4・1発行）新潮社「日米小記」より『未

来に残すあつた百話』より、シオンの丘 ―讃美歌の流れた開拓地― 浅見仙作の生き方について

8月19日 「八幡町について（昭和10年頃から、昭和50年頃まで）」昭和50年頃作成の八幡町鳥瞰図 昭和初期から昭和30年

代の写真 本庄陸男の写真とエピソード。

9月16日 「小樽新聞にみる大正期の石狩遊興処」

10月21日 『石狩本町地区盛衰夜話』

11月18日 「明治15年 樽川村開村後の史料から」

資料1 明治16年 石狩海岸の禁伐林

資料2 明治17年 石狩郡樽川村學田願之件

資料3 明治18年 樽川村移民岡田國藏・宮崎辰藏について

12月16日 『道々石狩手稲線の歴史ノート』

・関連資料・『町村金吾伝』より 兄町村敬貴・志津夫妻の石狩（樽川・花畔）におけるエピソード

・北朝鮮拉致被害者横田めぐみさんの祖父は横田庄八（明治38年花畔村北十四線生れ）といい、栗山と釧路江南高校の校長を経て最後は札幌北斗高校の校長だった。

2月17日 「旧村山家住居再現」写真（村山耀一） 図面（田中實）

3月17日 「中央アジア・シルクロード」ウズベキスタン

2 研修会

7月11日 増毛方面へ研修視察

厚田発祥の地碑（古潭）・増毛小学校・元小屋・国稀酒造・旧商家丸一本間家・浜益村郷土資料館 他／増毛果樹園・濱益ジャンボどら焼き・漁師の店清室。

3 村山家文書を読む会

4月28日 第1回 「村山伝兵衛沿革」の解説

5月26日 第2回 「村山伝兵衛沿革」の解説

6月23日 第3回 「村山伝兵衛沿革」の解説

平成16年度(平成16年4月14日)〜平成17年4月(日)

1 例会

5月20日 『北海道日本海漁撈漁具用語辞典』の解説

―発表者 吉岡 玉吉

6月17日 『清朝』(昭和29・4・1発行) 新潮社「日米小記」より 『未

来に残すあつた百話』より、シオンの丘 ―讚美歌の流れ

た開拓地― 浅見仙作の生き方について

―発表者 田中 實

8月19日 「八幡町について(昭和10年頃から、昭和50年頃まで)」

昭和50年頃作成の八幡町鳥瞰図 昭和初期から昭和30年

代の写真 本庄陸男の写真とエピソード。

―発表者 榎本 新一

9月16日 「小樽新聞にみる大正期の石狩友興処」

―発表者 鈴木トミエ

10月21日 『石狩本町地区盛衰夜話』

―発表者 吉岡 玉吉

11月18日 「明治15年 樽川村開村後の史料から」

資料1 明治16年 石狩海岸の禁伐林

資料2 明治17年 石狩郡樽川村學田願之件

資料3 明治18年 樽川村移民岡田國藏・宮崎辰藏について

―発表者 茂内 義雄

12月16日 『道々石狩手稲線の歴史ノート』

・関連資料:『町村金吾伝』より 兄町村敬貴・志津夫妻

の石狩(樽川・花畔)におけるエピソード

・北朝鮮拉致被害者横田めぐみさんの祖父は横田庄八(明治

38年花畔村北十四線生れ)といい、栗山と釧路江南高

校の校長を経て最後は札幌北斗高校の校長だった。

―発表者 田中 實

2月17日 「旧村山家住居再現」写真(村山耀一) 図面(田中實)

パソコン再現図(榎本新一) ―発表者 村山 耀一

3月17日 「中央アジア・シルクロード」ウズベキスタン

―発表者 山口 福司

2 研修会

7月11日 増毛方面へ研修視察

厚田発祥の地碑(古潭)・増毛小学校・元小屋・国稀酒造・

旧商家丸一本間家・浜益村郷土資料館 他/増毛果樹園・

濱益ジャンボどら焼き・漁師の店清室。

3 村山家文書を読む会

4月28日 第1回 「村山伝兵衛沿革」の解説

5月26日 第2回 「村山伝兵衛沿革」の解説

6月23日 第3回 「村山伝兵衛沿革」の解説

7月28日 第4回 「村山伝兵衛沿革」の解説

8月25日 第5回 「村山伝兵衛沿革」の解説

9月29日 第6回 「村山伝兵衛沿革」の解説

10月27日 第7回 「村山伝兵衛沿革」の解説

11月25日 第8回 「村山伝兵衛沿革」の解説

12月22日 第9回 「村山伝兵衛沿革」の解説

1月23日 第10回 「徳川家康黒印状」慶長九年(一六〇四)一月二

七日、松前志摩寺(慶広)に与えられた黒印状。

「俵物関係」の解説。北海道開拓記念館収蔵

第11回 「俵物関係」の解説

3月2日 第12回 「俵物関係」の解説

3月23日 「水産物営業人組合加入届」北海道大学附属図書館所蔵

4 各種展示会

第49回石狩市民文化祭

10月9日(土)～11日(月) 場所：南コミュニティセンター

展示内容／「日露戦争開戦から百年」(了恵寺収蔵品)

第5回石狩市民図書館まつり

11月3日(水)～7日(日) 場所：石狩市民図書館

展示内容／「エゾ地最大の場所請負人村山伝兵衛の履歴を

読む」

「小倉百人一首女性歌人の取札を詠む」

第17回公民館まつり

3月26日(土)～27日(日) 場所：石狩市公民館

展示内容／「雪まつりの追想」(了恵寺収蔵品)

5 刊行物

3月28日 『いしかり暦』 18号を発行した。

6 講演会 場所：石狩市民図書館

6月1日 講師 引間春一氏 旧吉田町社会教育指導員

演題 「井上伝蔵の生きた秩父」～その若き日の戦い～

平成17年度(平成17年4月21日～平成18年4月18日)

1 例会

5月19日 「俳句王国」ビデオ視聴……平成15年10月4日収録

「石狩紀行」映像視聴……昭和8年10月に小樽の人が撮

影した映像(約五分間)

6月16日 「オロロンラインの四山道」

—発表者 高瀬 たみ
—発表者 吉岡 玉吉

8月18日 「増毛山道」「浜益の雄冬事件」

9月22日 「地名にみる石狩のあゆみ」 —発表者 吉岡 玉吉

10月20日 「姉妹都市中国四川省彭州市からの帰国報告」 —発表者 田中 實

11月17日 チョウザメに関わるNHKビデオ「国境の大河黒龍江」 —発表者 高瀬 たみ

—発表者 鈴木トミエ

—発表者 田中 實

UHBスーパーニュース「私設 ものすごいお宝博物館」

尚古社を紹介(二〇〇五年一月二日放映)

—発表者 中島 勝久

「中国における死刑因からの臓器移植」 —発表者 山口 福司

12月15日 「花川南・北団地創成のころ」 —発表者 村山 耀一

2月16日 「石狩・厚田浜奇語戯言あれこれ」 —発表者 吉岡 玉吉

3月16日 「石狩・厚田・浜益三郡の石狩協会に関する覚え書」 —発表者 鈴木トミエ

2 研修会

7月16日 当別町・月形町・北村方面へ研修視察

生振↓当別・本庄陸男 文学碑「石狩川」↓伊達記念館・

伊達邸別館↓昼食 月形「天狗会館」↓月形樺戸博物館↓

北村農業資料館↓当別・スエーデンヒル↓当別・本庄陸男

生誕之地の碑・ロイズ(チョコレート) ↓石狩高岡・沖本

宅↓公民館

3 村山家文書を読む会

4月27日 第1回 「水産物営業組合加入届」の解説

5月26日 第2回 「村山伝兵衛沿革」中の鮭鱒営業方法書の解説

「明治二年巳三月 兵部省出張 石狩役所が新兵衛宛の褒章に關わる文書」

6月22日 第3回 「安政五年石狩改革一件」

7月27日 第4回 「地所建物賣渡証」 石狩鑑詰所

8月24日 第5回 「乍恐以書付奉再願候」 村山伝次郎に対する嘆願、親類一同が刑法局御掛中様宛 明治二年巳七月十二日

9月21日 第6回 「村山コトの手紙」(村山耀一所蔵)

・昭和21年春頃のもの

「借用地面一札之件」(開拓記念館収蔵)

・法性寺金毘羅堂建立

10月26日 第7回 「御料之節被仰渡書面」 「差上申一札之事」

11月30日 第8回 「乍恐以書附奉歎願候」

12月21日 第9回 「履歴書 田口梅太郎」

1月25日 第10回 「呈上 紀念盃之章」

2月22日 第11回 「公儀御役所ヨリ御尋ニ付苗字帯刀差免来り候」

3月29日 第12回 「明寅年より定」(村山家文書) 田中實所蔵

4 各種展示会

第50回石狩市民文化祭

10月21日(金)～23日(日) 場所 南コミュニティセンター

展示内容 「引き札」(了惠寺収蔵品)

第6回石狩市民図書館まつり

11月3日(木)～6日(日) 場所 石狩市民図書館

展示内容 村山家文書に見る「石狩缶詰所」と「明治期の村山漁場」

第18回公民館まつり

3月25日(土)～26日(日) 場所 石狩市公民館

展示内容 「絵葉書 大日本帝国の外地と満州」

(了惠寺収蔵品)

5 刊行物

2月28日 「いしかり暦」19号を発行。

「石狩の碑」第三輯を発行。

平成18年度(平成18年4月19日)～平成19年4月(日)

1 例会

5月19日 「三平汁」を食して語る会。了惠寺にて

田岡市長も出席 三平皿は田中實、中島勝久提供

・了惠寺宝蔵館見学

6月15日 「戦時中の金属類回収はどのように行われたか」

《浜益村資料から》

8月17日 「北海盆唄について」

9月21日 「新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表」

「本庄陸男について」

10月19日 「石狩、手稲両村関連事象から石狩道路開削資料」

「古式泳法・水泳の歌・石狩小運動会応援歌他」

11月16日 「石狩観鮭の記 関場忠武」

「北海道最大のレジャーランドとマスコミ関係で報道された内外レジャーランド株式会社」

12月21日 「石狩観鮭の記 関場忠武」

「北海道最大のレジャーランドとマスコミ関係で報道された内外レジャーランド株式会社」

2月15日 「北海道最大のレジャーランドとマスコミ関係で報道された内外レジャーランド株式会社」

「北海道最大のレジャーランドとマスコミ関係で報道された内外レジャーランド株式会社」

— 発表者 田中 實

— 発表者 吉岡 玉吉

— 発表者 吉岡 玉吉

— 発表者 田中 實

— 発表者 田中 實

— 発表者 田中 實

「病気に罹らないで長生きをする知恵」

―発表者 山口 福司

3月15日 「長野徳太郎と角二長野商店」

―発表者 石橋孝夫

2 研修会

7月29日 余市町へ研修視察

フゴツペ洞窟 旧余市福原漁場 旧ヨイチ運上屋

ニツカウイスキー北海道工場 余市水産博物館

3 村山家文書を読む会

4月26日 第1回 村山家文書を読む会。

5月24日 第2回 「㊦一中島商店発行 領収書」

6月28日 第3回 「秋味雇土人約定証文之事」

7月26日 第4回 「鮮取立約定一札之事」

8月23日 第5回 「石狩場所蝦夷人撫育筋書上」

9月27日 第6回 「石狩場所蝦夷人撫育筋書上」 継続

10月25日 第7回 「石狩場所蝦夷人撫育筋書上」 継続

11月22日 第8回 「石狩場所蝦夷人撫育筋書上」 継続

12月20日 第9回 「故あり故郷を離れんとして 池菱自筆句」

1月24日 第10回 「円八より田口梅太郎への申送り2通」

2月28日 第11回 「加州産物方米代残金之儀ニ付奉歎願候」

3月28日 第12回 「加州産物方米代残金之儀ニ付奉歎願候」 継続

4 各種展示会

第51回石狩市民文化祭

10月20日(金)～22日(日) 場所～南コミュニティセンター

展示内容／「絵はがきでみる海と空」(了恵寺収蔵品)

第7回石狩市民図書館まつり

11月3日(金)～5日(日) 場所～石狩市民図書館

展示内容／ 村山家文書

「中嶋商店受領書」「石狩御場所蝦夷人撫育筋書上」「明寅年より定(村山家家訓)」

第19回公民館まつり

3月24日(土)～25日(日) 場所～石狩市公民館

展示内容／「木版画にみる北海道風景」浅野竹二作

「ポスター」デザイン 洪井一夫

(了恵寺収蔵品)

5 刊行物

2月23日 「いしかり暦」20号を発行。

平成19年度(平成19年4月19日～平成20年4月15日)

1 例会

5月17日 「旧石狩市の屋号」

―発表者 高瀬 たみ

「石狩市厚田区浜益区商店漁業など屋号・家印及び業種調べ」

―発表者 吉岡 玉吉

6月21日 「樽川地区のあゆみ～時代を先取りして躍進」

―発表者 田中 實

8月23日 「昭和中期を検証する」～終戦から講和条約まで～

9月20日 「石狩川鮭流し網漁労回顧」(吉岡氏編集冊子にて) — 発表者 山口 福司

10月18日 「送毛山道」(玉蟲左太夫誼茂の『入北記』を通して) — 発表者 吉岡 玉吉

11月15日 「乙部(町)のことばと伝説」(抜) — 発表者 石橋 孝夫

12月20日 「石狩川八つ目鰻漁場記」 — 発表者 田中 實

2月21日 「世界文化遺産 紀伊山地の霊場と参詣道」 — 発表者 吉岡玉吉

3月20日 「石狩青年会と井上伝蔵」 — 発表者 山口 福司

ビデオ上映 NHK きょうの料理 — 発表者 鈴木トミエ

1997年11月7日放送 — 発表者 中島 勝久

全国うまいもの名鑑『潮風あびて石狩の新巻鮭』あいはら — 発表者 中島 勝久

2 研修会

7月22日 栗山町へ研修視察

谷田のきびだんご工場 小林酒造 木の城たいせつ

開拓記念館・泉記念館 坂本九思い出の記念館

3 村山家文書を読む会

4月25日 第1回 「小学校教師転任挨拶」

5月23日 第2回 「石狩小学校付属学田地内立樹拂下願」他

6月27日 第3回 「村山本家石狩移転二伴う」にケ条心得書ノ事

7月25日 第4回 「村山本家石狩移転二伴う」にケ条心得書ノ事

8月22日 第5回 「確證」(村山家と井尻半左衛門の間で交わされた約定書) 北大附属図書館所蔵

9月26日 第6回 「花畔小学校関係文書」(金子家文書)

10月24日 第7回 「乍恐以書付奉願上候」開拓記念館収蔵

11月28日 第8回 「乍恐以書付奉願上候」(開拓使小樽出張所宛)

12月19日 第9回 「御場所御請負譲受為取替之事」志津ない御場所之儀

1月23日 第10回 「御場所御請負譲受為取替之事」志津ない御場所之儀 続き

2月27日 第11回 「石狩鍋」展示準備 展示会3月11日～30日

3月26日 第12回 「場所證文之事」浜ましけ支配所秋味先買いについで

4 各種展示会

第52回石狩市民文化祭

10月19日(金)～21日(日) 場所 南コミュニティセンター

展示内容 「日本の紙幣」明治の初めから現代まで91枚 (了恵寺収蔵品)

第8回石狩市民図書館まつり

11月2日(日)～3日(月) 場所 石狩市民図書館

展示内容 村山家文書

「古文書に見る明治期の石狩小学校と花川小学校」

第20回公民館まつり

3月22日(土)～23日(日) 場所 石狩市公民館

展示内容 「防風林のある風景」大森亮三版画 (了恵寺収蔵品)

防風林関係書籍 (田中 實所蔵品)

特別展示会

3月11日(火)～30日(日) 場所 石狩市民図書館

テーマ「石狩鍋」

5 刊行物

3月31日 『いしかり暦』21号を発行。

6 講演会

9月23日 講師 橋部一視氏 手稲区前田在住 元松竹映画プロ

デューサー

演題 巨匠木下恵介の世界

映画「喜びも悲しみも幾年月」

※石狩ロケのエピソードを中心に

平成20年度(平成20年4月16日～平成21年4月14日)

1 例会

5月15日 「昭和20年代の手稲の姿と少年時代の思い出」

―発表者 村山 耀一

6月19日 「若生町」明治3年・4年・12年・39年の図面

『石狩往復』明治3年 兵部省石狩役所から開拓使への引

き継ぎ書 ―発表者 石狩市長 田岡 克介

8月21日 「八幡町と近隣の昭和10年～20年代のことについて」

―発表者 榎本 新一

9月18日 公開展示視察「坂本龍馬 同時代の群雄展」 尚古社

10月16日 「新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表(明治29年)」を読む

―発表者 鈴木トミエ

11月20日 「明治九年大火と市街地の形成」 ―発表者 工藤 義衛

12月18日 「北海道庁の今昔と道職員勤務時代の話」

2月19日 「石狩市三地区海産物三大種と三大珍味」 ―発表者 山口 福司

3月19日 「風雪に耐えたアカシア並木」樽川の殿様と言われた國重
義臣の著書 ―発表者 田中 實

2 研修会

7月19日 北広島市・恵庭市へ研修視察

【北広島市】クラーク記念碑 寒地稲作発祥の地碑

旧島松駅通所 【恵庭市】郷土資料館(カリンバ遺跡他)

紫雲台孝子堂宝物館 恵庭えこりん村(銀河庭園 花の牧

場) 道の駅

3 村山家文書を読む会

4月23日 第1回 「イシカリ川借證文之事」

5月23日 第2回 「イシカリ川借證文之事」継続

6月25日 第3回 「問屋利兵衛病身につき張江利佐衛門二預願」

7月23日 第4回 「乍恐以書付奉歎願候」

8月27日 第5回 「乍恐以書付奉歎願候」継続

9月25日 第6回 「乍恐以書附奉申上候」(田中實所蔵文書)

10月22日 第7回 「第9回 明倫教会 月並発句纏珠 三拾壹章」

11月26日 第8回 「乍恐以書附奉願上候」石狩本陣再興歎願

12月25日 第9回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」

1月28日 第10回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」

2月25日 第11回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」

3月25日 第12回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」

4 各種展示会

第53回石狩市民文化祭

10月17日(金)～19日(日) 場所：南コミュニティセンター

展示内容：「夢二の描いたセノオ楽譜」大正時代のもの

(了惠寺収蔵品)

第9回石狩市民図書館まつり

11月2日(日)～3日(月) 場所：石狩市民図書館

展示内容：村山家文書

「ハママシケ場所・アツタ場所関係文書を読む」

第21回公民館まつり

3月21日(土)～22日(日) 場所：石狩市公民館

展示内容：「版画で楽しむ景色」木版画・シルクスクリーン 記念切手

(了惠寺収蔵品)

5 刊行物

3月31日 「いしかり暦」22号を発行。

6 講演会

1月28日 講師 坂田資宏氏 場所：石狩市民図書館

演題 小説「石狩川」の開拓群像

★石狩市郷土研究会として関連展示 本庄陸男と映画「大地の侍」に関する資料 本庄陸男の写真 大地の侍の台本

キャスト・スタッフのサイン帳

(田中實・中島勝久氏所蔵品)

平成21年度(平成21年4月15日～平成22年4月20日)

1 例会

5月21日 「雄冬岬灯台の誕生と消滅」

6月18日 「開拓使画家の描いた石狩」

— 発表者 小寺 幸一

— 発表者 工藤 義衛

8月20日 「シベリア抑留のすべて」2年7カ月の抑留体験から

— 発表者 山口 福司

9月17日 「北海道毎日新聞に見る明治33年の石狩市街地と人物評」

— 発表者 鈴木トミエ

10月15日 「石狩市・厚田浜の鯨刺網漁始末記」より

*P30 「七 鯨催す(処理する)から切り揚げまで」

— 発表者 吉岡 玉吉

11月19日 「北海道神宮・開拓神社」

— 発表者 村山 耀一

12月17日 「石狩の軌道系交通の歴史」

— 発表者 釣本 峰雄

2月18日 「明治の事件簿」 浜益郷土資料館文書から

「明治12年の暴力事件(長谷川嗣解説北大村山家文書)

3月18日 「手稻歴史年表」所収から 石狩関連事象をみる

「尼港事件」(大正九年)の江連力一郎ら軽川で逮捕(大正十一年)

2 研修会

7月17日 浜益区へ研修視察

送毛集落 石狩市営群別牧場 増毛山道入口 木村果樹園

ハママシケ陣屋跡 千本ナラ

3 村山家文書を読む会

4月22日 第1回 「文政四巳年改之」 諸国知人并宿名前所附控 村山

5月27日 第2回 「文政四巳年改之」 諸国知人并宿名前所附控 村山

6月24日 第3回 「文政四巳年改之」 諸国知人并宿名前所附控 村山

7月22日 第4回 「文政四巳年改之」 諸国知人并宿名前所附控 村山

8月26日 第5回 「文政四巳年改之」 諸国知人并宿名前所附控 村山

9月30日 第6回 「文政四巳年改之」 諸国知人并宿名前所附控 村山

10月28日 第7回 第10回図書館まつり展示に向けて準備作業

- 11月25日 第8回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」
 12月16日 第9回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」
 1月27日 第10回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」
 2月24日 第11回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」
 3月24日 第12回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」

4 各種展示会

- 第54回石狩市民文化祭
 10月16日(金)～18日(日) 場所／南コミュニティセンター
 展示内容／「篠路屯田兵 斎藤章作の家族」
 (了恵寺収蔵品)

第10回石狩市民図書館まつり

- 10月31日(日)～11月1日(月) 場所／石狩市民図書館
 展示内容／村山家文書

「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控」から

6代目村山伝兵衛直之の全国的人脈

第22回公民館まつり

- 3月20日(土)～21日(日) 場所／石狩市公民館
 展示内容／「アイヌ語の地名絵手紙」……今崎博子画
 (了恵寺収蔵品)

5 刊行物

- 3月31日 『いしかり暦』23号を発行。

6 石狩市郷土研究会創立50年記念事業 特別展示・講演会

場所／石狩市民図書館

- 5月19日～24日 「増毛山道」特別展示会
 5月24日 講師 伊達東氏(伊達林右衛門子孫) 増毛山道の会会長
 演題 「増毛山道の生い立ち」

講師 桜井勝治氏 札幌三角点の会会長
 演題 「増毛山道と水準点物語」
 講師 小杉忠利氏 小杉測量設計(株)代表取締役
 演題 「増毛山道と航空写真」

平成22年度(平成22年4月21日～平成23年4月18日)

1 例会

- 5月20日 「少年期に見る 石狩川川尻に漂着した裸婦莖包怪事件」
 一発表者 吉岡 玉吉

- 6月17日 「東京大学史料編纂所蔵石狩関係地図について」
 資料の概要 ①石狩市街之図 ②ハママス之図
 一発表者 工藤 義衛

- 8月19日 「皇居・天皇に関わる資料の提示と解説」
 一発表者 山口 福司

- 9月16日 石狩市に残る「二宮金次郎像」を通して、金次郎(尊徳)思想を顕彰する。
 一発表者 村山耀一

- 10月21日 「石狩俳句小史(抄)」明治以前から明治33年まで
 一発表者 鈴木トミエ

- 11月18日 「石狩・厚田おどろおどろしい噺」第9話～第23話
 一発表者 吉岡 玉吉

- 12月16日 「石狩町の進展と町議会」①幻の石狩鉄道 ②住宅団地の形成について ③住宅団地の開発に伴う字名の改正について
 一発表者 萩原茂樹

- 2月17日 「語り継ごう石狩空襲 1945.7.15」
 一発表者 石橋 孝夫

- 3月17日 「元中主典富田信定 贖罪例ニ依り処断ノ件」
 一発表者 工藤 義衛

2 研修会

7月17日 厚田区へ研修視察

「厚田区の碑を訪ねて」聚富 望来 古澤 別狩 厚田を
訪ねる。 帰路は春別 五ノ沢 高岡経由で戻る。

展示内容／「大正時代に描かれた非常に珍しい北海道観光
案内図」『漫画旅行』（了恵寺収蔵品）

第11回石狩市民図書館まつり

10月30日（土）～10月31日（日） 場所／石狩市民図書館

展示内容／村山家文書

「旧幕府軍榎本武揚から軍資金二五〇〇両請求の一件」

石狩改革後の石狩場所請負人村山伝次郎の苦悩

第23回公民館まつり

3月19日（土）～20日（日） 場所／石狩市公民館

展示内容／「十二支にちなんだ掛け軸 十二幅」

（了恵寺収蔵品）

3 村山家文書を読む会

4月28日 第1回 「文政四巳年改之 諸国知人并宿名前所附控 村山」

5月26日 第2回 明和2年『証文之事』（しゃつほろ夏場所請負証文）

6月23日 第3回 寛政6年『定証文之事』（石狩山村木売買証文）

7月28日 第4回 明治2年6月『御尋二付乍恐以書付御答奉申上候』

8月25日 第5回 明治2年7月4日『乍恐以書付奉歎願候』

9月22日 第6回 図書館まつり準備（伝次郎と榎本脱走軍関係）

10月27日 第7回 「旧幕府軍榎本武揚から軍資金二五〇〇両請求の
一件」石狩改革後の石狩場所請負人村山伝次郎の苦悩

12月1日 第8回 村山伝次郎について 特に初代と言われた伝次郎
いぜんのことについて

12月22日 第9回 「要用書」

1月26日 第10回 「要用書」の初代伝兵衛と初代の父伝太夫誕生年
の確認

父伝太夫・寛永一九年（一六四二）壬午年生れ

初代伝兵衛・天和三年（一六八三）癸亥八月一五日生れ

2月23日 第11回 「要用書」宝暦五年 明和八年 天明三年

3月23日 第12回 「要用書」継続

2月24日 表彰

育功労賞」を受ける

平成23年度（平成23年4月19日～平成24年4月18日）

1 例会

5月19日 「ウライとテシ」縄文サケ漁の系譜

発表者 石橋 孝夫

4 各種展示会

第55回石狩市民文化祭

10月22日（土）～23日（日） 場所／南コミュニティセンター

- 6月16日 「石狩浜雑漁曳網回顧」 — 発表者 吉岡 玉吉
- 8月17日 「福島原発に学ぶ」 — 発表者 山口 福司
- 9月22日 「佐藤松太郎の生年と『厚田村史』」 — 発表者 工藤 義衛
- 10月20日 「明治期から全国・全道で活躍した石狩市(旧石狩町域)関係者(抄)」 — 発表者 田中 實
- 11月17日 「石狩町で校長を勤めた斎藤全先生」 — 発表者 茂内 義雄
- 12月15日 「石狩の農業盛衰記」 「最近の郷土研究会の活動を写した写真公開」 — 発表者 釣本 峰雄
- 2月16日 STVラジオ「ほっかいどう百年物語」 ▲村山伝兵衛▼
平成23年12月11日(日)放送 — 発表者 村山 耀一
- 3月15日 「生振観音橋と生振観音堂」 — 発表者 田中 實
- 2 研修会
- 7月17日 札幌市へ研修視察
篠路 龍雲寺・札幌最古の寺 本龍寺・札幌村郷土記念館・つきさつぷ郷土資料館・藻岩北小学校郷土資料室・エドウィン・ダン記念館・北海道神宮(開拓神社)
10月24日 調査船「弁天丸」に乗船し石狩川河口までの体験研修
主催/石狩川振興財団 十六名参加
- 3 村山家文書を読む会
- 4月27日 第1回 「要用書」
- 5月25日 第2回 「要用書」
- 6月22日 第3回 「古潭墓地 阿部屋武兵衛の墓碑」に関わって
- 7月27日 第4回 「江戸住吉屋武兵衛殿より書状の件に支配人甚六扣」
- 8月24日 第5回 「イシカリ御場所里数小名書上」
- 9月28日 第6回 「イシカリ御場所里数小名書上」
- 10月26日 第7回 「イシカリ御場所里数小名書上」
- 11月23日 第8回 図書館まつり展示準備
- 12月28日 第9回 年末のため中止
- 1月25日 第10回 (石狩場所営業許可願) 「乍恐以書附奉歎願候」
- 2月22日 第11回 (石狩場所営業許可願) 「乍恐以書附奉歎願候」
- 3月28日 第12回 「乍恐以書付奉再歎願上候」
- 4 各種展示会
- 第56回石狩市民文化祭
10月14日(金)～15日(土) 場所/南コミユニティセンター
展示内容/「松前藩主松前章廣と男爵松前隆廣の書等」
松前章廣 第十代(松前氏十四世)
松前隆廣 藩主第十三代(松前氏十七世)
松前崇廣の子 掛軸4幅
(了恵寺収蔵品)
- 第12回石狩市民図書館まつり
11月26日(土)～11月27日(日) 場所/石狩市民図書館
展示内容/ 村山家文書
「村山家文書からわかる石狩場所・石狩十三場所」
- 第24回公民館まつり
3月17日(土)～18日(日)
「勝平得之」 版画 十二点 (了恵寺収蔵品)
- 5 刊行物
- 3月31日 『いしかり暦』25号を発行。

6 表彰

10月22日 北海道文化財保護協会創立50周年記念にあたり

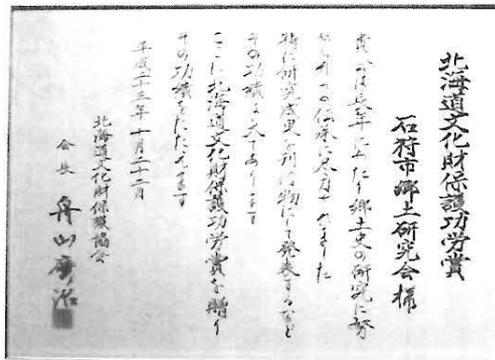
石狩市郷土研究会が功労賞を受賞する。

※会場

ホテル札幌ガーデンパレスにて

7 北海道史研究協議会

10月16日 石狩本町地区視察研修 道史協より十七名参加



平成 23 年 10 月 22 日
北海道文化財保護協会より
「北海道文化財保護功労賞」を受賞する

本会より十名参加

平成24年度（平成24年4月19日）平成25年4月17日）

1 例会

5月19日 「石狩湾新港建設で消えた石狩浜の集落」

～小樽内川集落（オタネ浜）と分部越集落（十線浜）～

— 発表者 高瀬 ため

6月21日 「昭和10年代の若生町・八幡町市街と人物像」

— 発表者 榎本 新一

「箱館奉行所イシカリ役所のワッカオイ移転について」

— 発表者 田中 實

8月16日 「健康寿命を伸ばす知恵」

— 発表者 山口 福司

9月20日

「発寒川」①川の移り替わり ②発寒の地名 ③発寒川の誕生まで ④発寒川のサケと古代の人たち ⑤発寒川のサケとアイヌの人たち 「発寒川・琴似発寒川」

— 発表者 田中 實

10月18日

「手稲山麓に埋蔵金？（義経伝説）」

— 発表者 一ノ宮博昭（手稲郷土史研究会）

11月15日

「茨戸川（旧石狩川）今井家漁労日誌」

— 発表者 今井 光男

「石狩十三場所と旧石狩川鮭場所」

— 発表者 吉岡 玉吉

12月20日

「石狩川河口周辺の鮭刺し網漁回顧」

「新巻（荒巻）塩引き（塩蔵鮭）の捌き方」

— 発表者 吉岡 玉吉

2月21日

「（仮）石狩市（除く厚田区・浜益区）なんでも一番」

（調査素稿）

— 発表者 田中 實

3月21日

明治十年取奉録

— 発表者 工藤 義衛

2 研修会

7月20日 千歳市へ研修視察

①美々貝塚 ②新千歳空港内 ③岩塚製菓 ④千歳サケのふるさと館

10月24日

調査船「弁天丸」に乗船し石狩川河口までの体験研修

主催／石狩川振興財団 十六名参加

3 村山家文書を読む会

4月26日 第1回 「乍恐以書付奉歎願上候」

5月24日 第2回 「上」（イシカリ不漁ニ付仕法立替）

6月27日 第3回 「上」（イシカリ不漁ニ付仕法立替）

7月25日 第4回 「上 口上書」

8月22日 第5回 「乍恐以書付奉歎願候」

9月26日 第6回 「乍恐以書付奉歎願候」

10月24日 第7回 「乍恐以書付奉歎願候」

11月27日 第8回 「上 乍恐以書附奉願上候」

12月19日 第9回 寒氣・風雪の天候のため中止する

1月23日 第10回 「公儀御役所において被仰渡候書付」(封付)

2月27日 第11回 「公儀御役所において被仰渡候書付」(封付)

3月27日 第12回 「以書付申上候」 圓吉謹言

4 各種展示会

第57回石狩市民文化祭

10月19日(金)～21日(日) 場所 南コミュニティセンター

展示内容 / 「大森亮三 版画」 「母子の唄」 など八点

(了惠寺收藏品)

第13回石狩市民図書館まつり

10月17日(土)～28日(日) 場所 石狩市民図書館

展示内容 / 村山家文書

「安政五年の石狩改革以降の不振が続く石狩場所の再興を願う明治初期の文書を読む」

第25回公民館まつり

3月16日(土)～17日(日)

「美人ポスター」 五点(了惠寺收藏品)

5 刊行物

12月 『石狩の碑』第4輯 厚田区編を發行

3月31日 『いしかり曆』26号を發行。

平成25年度(平成25年4月18日～平成26年4月16日)

1 例会

4月18日 船越長善「札幌近郊の墨絵」 | 発表者 工藤 義衛

5月16日 「出征の日・航空母艦「信濃」に関わった思い出」 | 発表者 高木 憲了

6月20日 「アイヌの食事について」 *食材・収納・主食・味付け・保存・和え物・食事の回数・食器ほか | 発表者 藤村久和

8月15日 「シベリア抑留の意味とその実態」 | 発表者 山口 福司

9月19日 「石狩市・厚田浜・浜益浜の鰯刺網漁始末記」 | 発表者 吉岡 玉吉

10月17日 「茨戸の前田農場」 | 発表者 茂内 義雄

11月21日 「石狩市大水路略史」 | 発表者 田中 實

12月19日 石狩町最初の観光パンフレット「いしかりあんない」 | 発表者 工藤 義衛

2月20日 「続・雄冬岬灯台の誕生と消滅」 | 発表者 小寺 幸一

3月20日 「なぜ雄冬岬に建設されたか」 | 発表者 田中 實

3月20日 「蝦夷松前の阿部屋村山傳兵衛家の浮沈と事績」 | 発表者 田中 實

2月20日 「続・雄冬岬灯台の誕生と消滅」 | 発表者 小寺 幸一

3月20日 「なぜ雄冬岬に建設されたか」 | 発表者 田中 實

3月20日 「蝦夷松前の阿部屋村山傳兵衛家の浮沈と事績」 | 発表者 田中 實

「心おほえ」 能登屋圓吉関連文書

6月26日 第3回 「石狩御場所蝦夷人撫育筋書上」

7月24日 第4回 「石狩御場所蝦夷人撫育筋書上」

8月28日 第5回 「石狩御場所蝦夷人撫育筋書上」

9月25日 第6回 「番人円吉 蝦夷記 全」

10月23日 第7回 「番人円吉 蝦夷記 全」

11月27日 第8回 「番人円吉 蝦夷記 全」

12月11日 第9回 「番人円吉 蝦夷記 全」

1月11日 第10回 「番人円吉 蝦夷記 全」

2月26日 第11回 「番人円吉 蝦夷記 全」

3月26日 第12回 「番人円吉 蝦夷記 全」

4 各種展示会

第58回石狩市民文化祭

10月18日(土)～20日(日) 場所：南コミュニティセンター

展示内容：「大森亮三 版画」

「手稲山が見える風景」昭和62年作など 八点

(了惠寺收藏品)

第14回石狩市民図書館まつり

10月26日(土)～27日(日) 場所：石狩市民図書館

展示内容：村山家文書

「石狩御場所蝦夷人撫育筋書上」を読む

第26回公民館まつり

3月15日(土)～16日(日)

「阿部貞夫・松見八百造木版画」 七点 (了惠寺收藏品)

5 刊行物

3月31日 『いしかり暦』27号を発行。

6 表彰

10月31日 北海道文化財保護功労賞 田中 實氏が受賞

平成26年度(平成26年4月17日～平成27年4月16日)

1 例会

5月15日 「厚田の寄り練瞥見」写真(コピー)

6月19日 「アイヌの信仰について」 発表者 吉岡 玉吉

8月21日 「靖国神社の成り立ちと歴史・A級戦犯について」 発表者 藤村 久和

9月18日 「石狩川筋のアイヌ地名について」 発表者 山口 福司

10月16日 「NHK 神の魚が帰ってきた」 発表者 井口 利夫

1987年10月23日放送分「豊川エカシ出演ビデオ」

「第24回 アシリチエブノミ」石狩アイヌ三代の系譜

樺太アイヌの碑 発表者 田中 實

11月19日 「越後衆(新潟県出身者)と越後盆踊り」 発表者 吉岡 玉吉

「石狩越後盆踊り」～郷土から持ち込んだ盆踊り～ 発表者 高瀬 たみ

12月18日 「石狩河口の集落について」 発表者 工藤 義衛

2月19日 「石狩市の墓地と歴史的なお墓について」 発表者 田中 實

3月19日 「指し物師 中島勝人」ラジオ出演の録音テープ視聴 発表者 中島 勝久

2 研修会

7月18日 札幌市へ研修視察

①北海道近代美術館(徳川美術館「尾張徳川家の至宝」)

②北海道庁赤レンガ展示見学 ③北海道知事公館 ④札幌市下水道科学館 ⑤北海道庁食堂体験(昼食)

3 村山家文書を読む会

- 4月23日 第1回 「番人円吉 蝦夷記 全」
5月27日 第2回 「番人円吉 蝦夷記 全」
6月25日 第3回 「問屋株新規ニ被仰付候 書面類之写」
7月23日 第4回 「問屋株新規ニ被仰付候 書面類之写」
8月28日 第5回 「問屋株新規ニ被仰付候 書面類之写」
「問屋株式碑仰付候書面入(封付)」同上に付御役人へ進物
方控

10月1日 第6回 「問屋株式被仰付候書面入」

10月22日 第7回 「乍恐以書附奉願上候」

11月26日 第8回 「覚」(海産物売払代金受取証) 享保19年の文書で

村山家文書で一番古いもの)
「預り申金子之事」

12月17日 第9回 悪天候のため中止

1月28日 第10回 悪天候のため中止

2月24日 第11回 「定證文之事」 石狩山伐木関係文書

3月25日 第12回 「松前様より申渡」(蝦夷檜)

4 各種展示会

第59回石狩市民文化祭

10月17日(土)～19日(日) 場所 南コミュニティセンター

展示内容 「新版画 大正・昭和の浮世絵美人画」 八点

(了恵寺収蔵品)

第15回石狩市民図書館まつり

10月25日(土)～26日(日) 場所 石狩市民図書館

展示内容 村山家文書

「小宿株・問屋株取得願に関わる文書」を読む

第27回公民館まつり

3月14日(土)～15日(日)

「絵双六」 六点 (了恵寺収蔵品)

5 刊行物

3月31日 『いしかり暦』 28号を発行。

6 特別展示会

7月12日(土)～20日(日) 場所 石狩市民図書館

「北海道の駅通展示会」(駅通 明治の道の駅?)

展示者 駅通資料調査会 桜井勝治氏

平成27年度(平成27年4月17日～平成28年4月20日)

1 例会

5月21日 「津軽一統志」をとおして、石狩アイヌの勢力範囲

6月18日 「似せられ、若衆」(若き日の体験と石狩の様子)

8月20日 「戦後70年・日本戦没者と戦争資料」

9月17日 「石狩川沿いのアイヌ地名(2)」マクンベツ・志美

10月17日 「石狩川サケ流し網漁で散った若者達とその教訓」

11月19日 「思い出すままに……」

1 発表者 藤村 久和

2 発表者 今井 光男

3 発表者 田中 實

4 発表者 井口 利夫

5 発表者 吉岡 玉吉

6 発表者 吉本 愛子

12月17日 「樽川、南線地域の戦後の歩み」 — 発表者 本間 純一
2月18日 観光絵葉書「名産鮭大漁実況」「石狩勝景」「水郷石狩八景」
— 発表者 工藤 義衛

3月17日 「古潭校115年の回顧」
— 発表者 小寺 幸一

2 研修会

7月25日 札幌市へ研修視察

①北海道博物館 特別展「夷酋列像」展 ②北海道開拓の村

3 村山家文書を読む会

4月22日 第1回 「稼方土人拝借奉願上書附」 北大収蔵

5月27日 第2回 「ヲコシリ漁場経営に付嘆願書」

6月24日 第3回 「村山傳兵衛宛て消息」

7月22日 第4回 「証（金子借用証）」

8月26日 第5回 「乍恐以書附奉願上候」

9月30日 第6回 「戊辰明治元年十一月吉日 諸書留」

10月28日 第7回 「戊辰明治元年十一月吉日 諸書留」

11月25日 第8回 「戊辰明治元年十一月吉日 諸書留」

12月16日 第9回 （井尻半左衛門送籍届） 北大収蔵

1月27日 第10回 図書館休館日のため中止

2月24日 第11回 「村山家掛け軸」 日下部鳴鶴書

「トド嶋附近漁業慣行概要」 北大収蔵

「戊辰明治元年十一月吉日 諸書留」

3月23日 第12回 「戊辰明治元年十一月吉日 諸書留」

4 各種展示会

第60回石狩市民文化祭

10月18日（金）～20日（日） 場所 南コミュニティセンター

展示内容 / 「千代紙」 九点（了恵寺収蔵品）
第16回石狩市民図書館まつり

10月31日（土）～11月1日（日） 場所 石狩市民図書館

展示内容 / 村山家文書

「石狩山伐木に関わる村山家文書を読む」

その昔、石狩川河口に「木場」が置かれ、江戸・大坂へ
向けて木材が輸送された歴史がある。

第28回公民館まつり

3月12日（土）～13日（日） 場所 石狩市公民館

「色紙」 九点（了恵寺収蔵品）

5 刊行物

3月31日 『いしかり暦』 29号を発行。

6 苫小牧郷土文化研究会との対応

8月28日（土） 山本融定会長ほか三名が石狩を訪れる。

同会計画の「松浦武四郎の足跡を歩くツアー」の最終目的
地、石狩を散策するツアーの下見に田中顧問、村山会長が
対応。

新港↓海岸道路↓灯台付近↓八幡神社↓弁天社を案内す
る。

10月11日（日） 苫小牧郷土文化研究会一行二五名が本町地区を訪れる。

「松浦武四郎の足跡を歩くツアー」最終地の運上屋で集会
を開く。村山会長、中島副会長が出席する。

高瀬さんはガイドボランティアの立場で説明する。

二、『いしかり暦』(第二十二号から第二十九号まで)の総目次

これまで発刊された『いしかり暦』の目次については第十七号「柏林」で創刊号から十六号までがまとめて掲載されている。又、『いしかり暦』二十一号には石橋孝夫氏が創刊号から二十一号までの総目次をまとめて掲載している。ここではこれに続き第二十二号から二十九号までをまとめることにした。

『いしかり暦』第二十二号

平成二十一年三月三十一日発行/A四判/四十八頁
 「石狩川鮭漁」の図瞥見 吉岡玉吉 P 1 ~ P 8

明治九年石狩町大火と市街地の形成 工藤義衛 P 9 ~ P 18
 石狩尚古社社員 井上伝蔵と土方常吉、中島源五郎の俳句 鈴木トミエ P 19 ~ P 27

「図書にみる石狩鍋(サケなべ)材料の変遷」によせて
 鈴木トミエ 田中 實 秋山正子 高瀬たみ
 仲野 孝 三島照子 安井澄子 吉本愛子
 P 28 ~ P 31

石狩浜、厚田浜の履物 吉岡玉吉 P 32 ~ P 36
 村山家文書解説 北海道開拓記念館収蔵「イシカリ川借證文之事」
 村山耀一 P 37 ~ P 41

石狩市(旧)の小・中学・高校校誌等略目録(未定稿)
 田中 實 村山耀一 P 42 ~ P 45

石狩市(旧)の小・中学校唱歌(未定稿)
 田中 實 村山耀一 P 46 ~ P 48

『いしかり暦』第二十三号 石狩市郷土研究会創立50周年記念号

平成二十二年三月三十一日発行/A四判/七十五頁

村山家文書(北海道開達記念館所蔵)解説

「諸国知人并宿名前所附控」 村山耀一 安井澄子 P 1 ~ P 22

石狩国厚田郡厚田村旧樺太アイヌ鯉場漁撈絵図瞥見 吉岡玉吉 P 23 ~ P 32

「石狩川鮭漁」の図について 工藤義衛 P 33 ~ P 42

雄冬岬灯台の誕生と消滅 小寺幸一 P 43 ~ P 52

花川南地域(旧新札幌団地ほか)開発概説年表 田中 實 P 53 ~ P 63

北海道住宅供給公社「花畔団地」開発概説年表 田中 實 P 64 ~ P 75

『いしかり暦』第二十四号

平成二十三年三月三十一日発行/A四判/七十頁

石狩浜の鳥(カモメ)獣(アザラシ)物語二題 吉岡玉吉 P 1 ~ P 8

台鍋についての覚書 工藤義衛 P 9 ~ P 10

— 開拓者が伝えた神事芸能 — 石狩市望来獅子舞 高瀬たみ P 11 ~ P 19

村山家文書解説 石狩改革と石狩場所請負人村山伝次郎の苦悩 村山耀一 安井澄子 P 20 ~ P 41

— 旧幕府軍から要求された二五〇〇両の運上金 — 村山家文書を読む会 村山耀一 安井澄子 P 20 ~ P 41

石狩・厚田・浜益俳句小史(抄) 鈴木トミエ P 42 ~ P 70

明治以前から明治33年まで

『いしかり暦』第二十五号

平成二十四年三月三十一日発行/A四判/五十頁

追悼 鈴木トミエさん

追悼のことは 石狩市郷土研究会会長 村山耀一 P 1 ~ P 2
 鈴木トミエさんの年譜 村山耀一 P 3 ~ P 4
 鈴木トミエ著作目録(稿) 田中實編 田中實編 P 5 ~ P 6
 会員投稿

石狩場所請負人初代村山傳兵衛 の松前居住の疑義を正す
 一 父子の傳太夫一 村山耀一 P 7 ~ P 10
 村山家文書解説

「イシカリ御場所新規増出稼漁場取建約定書之覚」について

尚古社資料館所蔵俳句の紹介 1 巖谷小波 村山耀一 P 11 ~ P 15
 尚古社資料館所蔵俳句の紹介 2 上田聴秋 中島勝久 P 16
 石狩湾新港建設で消えた石狩浜の集落 中島勝久 P 17
 一 小樽内川集落(オタネ浜)と分部越集落(十線浜)一

高瀬たみ P 18 ~ P 21
 工藤義衛 P 22 ~ P 25
 プップ八幡さん一石狩で生まれた戯れ言葉一 吉岡玉吉 P 26 ~ P 30

庄内藩士と鮭汁

村山家に伝わる宝物・へいさらばさら 田中 實 P 31 ~ P 32
 八幡町古老が残した石狩市八幡町若生町の記録 三島照子 P 33 ~ P 39
 一 田岡定男氏の「若生町の頃」一
 特別寄稿

庄内藩のえぞ地警備・開拓の夢を追う
 一 浜益陣屋の建設・経営を中心として一 北国諒星 P 40 ~ P 50

『いしかり暦』第二十六号

平成二十五年三月三十一日発行/A四判/七十七頁
 石狩市市街歴史写真 今井光男・田中 實 P 1 ~
 石狩市市街歴史写真解説 田中實編集 鈴木トミエ調査 P 2 ~ P 6

村山家文書(北海道開拓記念館収蔵)解説 村山耀一 P 7 ~ P 15
 『石狩場所営業許可証』 松前藩主の母・村山左幾子(幼名喜佐)について

村山耀一 P 16 ~ P 23
 今井光男 P 24 ~ P 31

石狩市での今井家漁撈回顧 吉岡玉吉 P 32 ~ P 49
 昭和初期から昭和20年代までの石狩市の漁船について 工藤義衛 P 50 ~ P 59
 補記吉岡玉吉著作目録 中島勝久 P 60 ~ P 77
 石狩浜「鯨」と「塚」をめぐる
 俳人石狩町長坂牛瓢齋の作品集

『いしかり暦』第二十七号

田中實顧問北海道文化財保護功勞者表彰記念号

平成二十六年三月三十一日発行/A四判/八十一頁
 時空へ放つ知識・佇まい 田岡克介 P 1 ~
 祝辞 村山耀一 P 2 ~
 文化財保護功勞者表彰受賞のアルバム P 3 ~
 田中實顧問のプロフィール P 4 ~ P 6

石狩尚古社所蔵俳句の紹介 3 石狩尚古社撰者 青木郭公の遺墨 中島勝久 P 7 ~
 石狩尚古社所蔵俳句の紹介 4 石狩尚古社撰者 牛島勝六 中島勝久 P 8 ~

村山家文書「石狩場所で番人・支配人を勤めた能登屋圓吉」
 石狩改革後の処遇と独立を望む文書 村山耀一 藤村久和 P 9 ~ P 19
 能登屋圓吉履歷 藤村久和 花輪陽平 P 20 ~ P 23
 村山家寄贈の蝦夷錦で作られた「七条の袷袋」を所蔵する西念寺と浄心寺 村山耀一 P 24 ~ P 30
 八幡町の古老が残した石狩市八幡町若生町の記録 2

八幡町の古老が残した石狩市八幡町若生町の記録 2

八幡町の古老が残した石狩市八幡町若生町の記録 2

田岡定男氏の「若生の頃 街の風景」 三島照子 P 41 ~ P 54
石狩越後盆踊り―郷土から持ち込んだ盆踊り― 高瀬たみ P 55 ~ P 59

厚田浜別府今昔物語―昭和初期～昭和二十年前後まで

石狩市大水害概略史と札幌市等の降水量 吉岡玉吉 P 60 ~ P 72
田中 實 P 73 ~ P 81

『いしかり暦』第二十八号

平成二十七年三月三十一日発行/A四判/七十七頁

石狩川筋のアイヌ地名(1)―花畔― 井口利夫 P 1 ~ P 12
村山家文書「村山家と小宿・問屋株」 村山耀一 P 13 ~ P 17
土田宇兵衛について 工藤義衛 P 18 ~ P 28
石狩市に残る中央俳壇明倫教會について 中島勝久 P 29 ~ P 31
濃昼の旧木村番屋から見たニシン漁 高瀬たみ P 32 ~ P 38
厚田浜「寄り鯨」写真瞥見 吉岡玉吉 P 39 ~ P 51
八幡町の古老が残した石狩市八幡町若生町の記録3
―若生町の頃 子供の遊び― 三島照子 P 57 ~ P 68
福田藤男喜寿記念パネル解説 村山耀一 P 69 ~ P 77

『いしかり暦』第二十九号

平成二十八年三月十七日発行/A四判/八十四頁

観光絵はがき「名産鮭大漁實況」 「石狩勝景」 P 1 ~ P 4
村山家文書解説「飛騨屋のあと石狩伐木を請負った村山伝兵衛」 村山耀一 P 5 ~ P 13
村山家文書解説「トド嶋附近漁業慣行概要」 村山耀一 P 14 ~ P 18
石狩川筋のアイヌ地名(2)―マクンベツ― 井口利夫 P 19 ~ P 27
石狩尚古社所蔵俳句の紹介5 石狩尚古社撰者 松島十湖遺墨

石狩尚古社所蔵俳句の紹介5 石狩尚古社撰者 三森幹雄遺墨 中島勝久 P 28 ~
樽川、南線地域の戦後の歩み―入植六十八周年を迎えて― 中島勝久 P 29 ~

似せられた若集 本間純一 P 30 ~ P 40

北海の粒買船早春の日本海を征く 今井光男 P 41 ~ P 49
石狩湾漁業組合にみる近年の石狩市漁業あれこれ 吉岡玉吉 P 50 ~ P 61

八幡町の古老田岡定男が残した石狩空襲の記録 高瀬たみ P 62 ~ P 71

昭和二十年七月十五日 空襲見たままの記 三島照子 P 72 ~ P 80

石狩市内の戦争に関連する石碑、遺構 工藤義衛 P 81 ~ P 84

歴代役員名簿（平成16年～28年度）

年 度	顧 問	会 長	副会長	理 事	監 事	事務局	会 計
平成16年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 釣本 峰雄	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 安田 澄子	星川富美子
平成17年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 釣本 峰雄	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 安田 澄子	星川富美子
平成18年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 釣本 峰雄	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 安田 澄子	星川富美子
平成19年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 釣本 峰雄	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 安田 澄子	星川富美子
平成20年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 釣本 峰雄	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 安田 澄子	星川富美子
平成21年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 釣本 峰雄	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 安田 澄子	星川富美子
平成22年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 石橋 孝夫	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 釣本 峰雄	星川富美子
平成23年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 榎本 新一	鈴木トミエ 三島 照子 吉永 繁起 石橋 孝夫	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	中島 勝久 （庶務） 吉本 愛子 釣本 峰雄	星川富美子
平成24年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 中島 勝久	三島 照子 吉永 繁起 石橋 孝夫	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	吉本 愛子 （庶務） 釣本 峰雄	星川富美子
平成25年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 中島 勝久	三島 照子 吉永 繁起 石橋 孝夫	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	吉本 愛子 （庶務） 釣本 峰雄	星川富美子
平成26年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 中島 勝久	三島 照子	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	吉本 愛子 （庶務） 釣本 峰雄	星川富美子
平成27年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 中島 勝久	三島 照子	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	吉本 愛子 （庶務） 釣本 峰雄	星川富美子
平成28年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	安田 澄子 中島 勝久	三島 照子	高瀬 たみ 吉岡 玉吉	吉本 愛子 （庶務） 釣本 峰雄	星川富美子

石狩市郷土研究会会員名簿（平成16年度以降）

年 度	会 員 名								
平成16年 32名	山口福司 星川富美子 吉田隆義 原沢文子	田中 實 鈴木トミエ 石橋孝夫 吉野惣栄	高木憲了 三島照子 沖本義尚 君 尹彦	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 今井光男	仲野 孝 榎本新一 川島勇一 小寺幸一	榎本新一 中島勝久 石黒嗣康 茂内義雄	中島勝久 高瀬たみ 田中豈恵子 中田尚聡	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 中田尚聡	吉本愛子 青木 隆 石川秀子 中田尚聡
平成17年 32名	山口福司 星川富美子 石橋孝夫 君 尹彦	田中 實 鈴木トミエ 沖本義尚 今井光男	高木憲了 三島照子 駒井秀子 小寺幸一	村山耀一 吉永繁起 川島勇一 茂内義雄	仲野 孝 榎本新一 石黒嗣康 中田尚聡	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 秋山正子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 天野直子	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 原沢文子	吉本愛子 吉田隆義 原沢文子 天野直子
平成18年 32名	山口福司 吉本愛子 吉田隆義 原沢文子	田中 實 星川富美子 石橋孝夫 君 尹彦	高木憲了 三島照子 沖本義尚 今井光男	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 小寺幸一	仲野 孝 榎本新一 川島勇一 茂内義雄	榎本新一 中島勝久 石黒嗣康 中田尚聡	中島勝久 高瀬たみ 田中豈恵子 秋山正子	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 天野直子	吉本愛子 青木 隆 石川秀子 天野直子
平成19年 33名	山口福司 吉本愛子 吉田隆義 君 尹彦	田中 實 星川富美子 石橋孝夫 今井光男	高木憲了 三島照子 沖本義尚 小寺幸一	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 小寺幸一	仲野 孝 榎本新一 石黒嗣康 中田尚聡	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 秋山正子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 天野直子	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 原沢文子	吉本愛子 吉田隆義 原沢文子 千葉敬子
平成20年 33名	山口福司 吉本愛子 吉田隆義 君 尹彦	田中 實 星川富美子 石橋孝夫 今井光男	高木憲了 三島照子 沖本義尚 小寺幸一	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 小寺幸一	仲野 孝 榎本新一 石黒嗣康 中田尚聡	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 秋山正子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 天野直子	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 原沢文子	吉本愛子 吉田隆義 原沢文子 千葉敬子
平成21年 34名	山口福司 吉本愛子 吉田隆義 今井光男 山内幸子	田中 實 星川富美子 石橋孝夫 今井光男	高木憲了 三島照子 沖本義尚 小寺幸一	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 小寺幸一	仲野 孝 榎本新一 石黒嗣康 秋山正子	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 天野直子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 天野直子	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 原沢文子	吉本愛子 吉田隆義 原沢文子 工藤義衛
平成22年 37名	山口福司 吉本愛子 吉田隆義 今井光男 寺尾陽助	田中 實 星川富美子 石橋孝夫 小寺幸一 中野伸夫	高木憲了 三島照子 沖本義尚 茂内義雄	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 秋山正子	仲野 孝 榎本新一 石黒嗣康 天野直子	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 天野直子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 曳地理子	安井澄子 吉岡玉吉 石川秀子 原沢文子	吉本愛子 吉田隆義 原沢文子 工藤義衛
平成23年 33名	山口福司 星川富美子 石橋孝夫 秋山正子	田中 實 鈴木トミエ 駒井秀子 田中豈恵子	高木憲了 三島照子 田中豈恵子 石川秀子	村山耀一 吉永繁起 駒井秀子 原沢文子	榎本新一 中島勝久 今井光男 小寺幸一	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 小寺幸一	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 原沢文子	安井澄子 吉本愛子 吉田隆義 今井光男	吉本愛子 吉田隆義 原沢文子 小寺幸一
平成24年 36名	山口福司 星川富美子 駒井秀子 工藤義衛 若林真紀子	田中 實 三島照子 田中豈恵子 寺尾陽助 藤村久和	高木憲了 吉永繁起 石川秀子 中野伸夫 花輪陽平	村山耀一 吉永繁起 今井光男 山内幸子 相澤智美	榎本新一 中島勝久 小寺幸一 茂内義雄 相澤智美	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 秋山正子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 石原 誠	安井澄子 吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子	吉本愛子 吉田隆義 石橋孝夫 石原 誠
平成25年 37名	山口福司 星川富美子 田中豈恵子 寺尾陽助 藤村久和	田中 實 三島照子 石川秀子 中野伸夫 花輪陽平	高木憲了 吉永繁起 今井光男 山内幸子 相澤智美	村山耀一 吉永繁起 小寺幸一 茂内義雄 相澤智美	榎本新一 中島勝久 小寺幸一 茂内義雄 松下瑛美	榎本新一 中島勝久 田中豈恵子 秋山正子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 石原 誠	安井澄子 吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子	吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子 石原 誠
平成26年 34名	山口福司 星川富美子 今井光男 糟谷奈保子 土井勝典	田中 實 三島照子 小寺幸一 石原 誠 五十嵐祀美	高木憲了 吉永繁起 茂内義雄 松田 進	村山耀一 吉永繁起 秋山正子 井口利夫	榎本新一 中島勝久 工藤義衛 若林真紀子	榎本新一 中島勝久 寺尾陽助 藤村久和	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 山崎智美	安井澄子 吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子	吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子 山崎智美
平成27年 36名	山口福司 星川富美子 今井光男 石原 誠 花輪陽平	田中 實 三島照子 小寺幸一 井口利夫 五十嵐祀美	高木憲了 吉永繁起 茂内義雄 土井勝典	村山耀一 吉永繁起 秋山正子 本間純一	榎本新一 中島勝久 中野伸夫 若林真紀子	榎本新一 中島勝久 山内幸子 若林真紀子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 山崎智美	安井澄子 吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子	吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子 藤村久和
平成28年 37名	山口福司 星川富美子 今井光男 石原 誠 花輪陽平	田中 實 三島照子 小寺幸一 井口利夫 五十嵐祀美	高木憲了 吉永繁起 茂内義雄 土井勝典	村山耀一 吉永繁起 秋山正子 本間純一	榎本新一 中島勝久 中野伸夫 若林真紀子	榎本新一 中島勝久 山内幸子 若林真紀子	中島勝久 高瀬たみ 石川秀子 山崎智美	安井澄子 吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子	吉本愛子 吉田隆義 駒井秀子 藤村久和

いしかり暦 第三十号

平成二十九年三月十六日 印刷

平成二十九年三月十六日 発行

発行者 石狩市郷土研究会

石狩市花川南五条二丁目一三三

村山耀一方

TEL 〇一三三―七二―七四八九